

市内遺跡5

—平成21・22年度 埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011.3

茅野市教育委員会

市内遺跡5

——平成21・22年度 埋蔵文化財発掘調査報告書——

2011.3

茅野市教育委員会

序 文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むこともできます。当市には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡・駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡があり、「縄文の里」として全国にその名を知られています。また、それらの遺跡にかくれがちであった弥生時代から江戸時代の遺跡も、市街地周辺における近年の発掘調査によって徐々に数を増しています。

当市では市内各所で行われる各種開発事業と遺跡の保護・調整を図るために、国庫補助事業による試掘調査ならびに本調査等を進めてきました。その中で、平成21年度から22年度に実施しました24件の調査成果が本報告書にまとめられています。

報告する発掘調査は各遺跡の一部を対象とする小規模なものですが、このような調査を地道に繰り返し行っていくことで、遺跡の広がりやその性格が次第に解明されるものと思われま。最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力を賜りました地権者ならびに事業関係者の皆様、調査に従事された作業員の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成23年 3月

茅野市教育委員会

教育長 牛 山 英 彦

例 言

- 1 本書は長野県茅野市が平成21・22年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金を受け、各種開発事業に伴い実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は平成22年度国宝重要文化財等保存整備費補助金で作成した。
- 3 本書に掲載した遺跡の調査・整理作業・報告書の作成は、以下の期間に実施した。
平成21年度：平成21年4月1日～平成22年3月29日
平成22年度：平成22年4月1日～平成23年3月30日
- 4 各遺跡の所在地は本文中に記した。
- 5 本調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。
- 6 発掘調査から報告書作成までに、長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課、長野県考古学会、諏訪考古学研究会の諸氏からご指導、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げる。

凡 例

- 1 本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。
- 2 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。
① 1号住居址 → 1住 ② 1号土坑 → 1土 ③ 1号溝址 → 1溝 ④ 1号焼土址 → 1焼
⑤ 1号集石 → 1集石
- 3 土層断面図のレベルで未記入のものは、現地表面のレベルを基に任意で設定している。
- 4 本文と写真図版に示した略号は以下のとおりである。
① 平成21年度試掘調査の1 → 21試-1
② 平成22年度試掘調査の1 → 22試-1
③ 平成21年度本調査および工事立会の1 → 21-1
④ 平成21度～22年度本調査の1 → 21～22-1
⑤ 平成22年度本調査および工事立会の1 → 22-1

目 次

第1章 市内遺跡発掘調査等事業の概要	1
第1節 茅野市における埋蔵文化財保護の概要	1
第2節 平成21・22年度事業の概要	1
第3節 調査の体制	1
第2章 試掘調査	5
第3章 本調査および工事立会	18
写真図版	
抄録	

第1章 市内遺跡発掘調査等事業の概要

第1節 茅野市における埋蔵文化財保護の概要

平成23年3月現在、茅野市における周知の埋蔵文化財包蔵地は347箇所である。包蔵地内およびその隣接地で開発行為が計画された場合、事業者と市教育委員会との間で埋蔵文化財保護に関わる取り扱いを協議し、試掘調査の実施を基本に埋蔵文化財（遺構・遺物）の有無を確認することになっている。埋蔵文化財が確認された場合、その保護の理念に基づき、工事の計画変更による包蔵地の現状保存を事業者に求めているが、やむを得ず失われる場合には、本調査による記録保存を実施している。

近年の当市における発掘調査は、ほ場整備事業・土地区画整理事業・幹線道路新設事業などの公共性の高い大規模開発に伴うものから、宅地造成工事・集合住宅建築工事・個人住宅建築工事などの民間・個人が事業者となる小規模開発に伴うものへ移行している。今後も人口の増加と相まって、これら小規模開発に伴う発掘調査の件数は増加の一途を辿ることが予想される。これに対処するため、市教育委員会では埋蔵文化財包蔵地の保護・保存に関する様々な事業を展開してきた。

平成18年度は『遺跡位置図』を掲載した埋蔵文化財の取り扱いに関するリーフレットを全戸に配布し、埋蔵文化財の保護・保存に関わる啓蒙・普及活動を行った。平成19年度は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を全面的に見直し、『遺跡位置図』を改訂した。平成20年度は埋蔵文化財包蔵地の位置・内容の周知化をさらに進めるために、『遺跡位置図』・『遺跡台地』を電子化し、ホームページ上での公開を開始した。これらの取り組みにあわせて、平成19・20年度に市内の不動産取引業者・土木および建設業者・建築設計業者と埋蔵文化財の取り扱いに関する勉強会を合同で開催し、埋蔵文化財包蔵地の位置や包蔵地内で工事を行う際の法的な手続きなどを相互で確認した。

第2節 平成21・22年度事業の概要

平成21年度に受理した『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書（93条第1項）』ならびに『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（94条第1項）』は36件である。この中で平成21年度国宝重要文化財等保存整備費事業補助金の「市内遺跡発掘調査等事業」の対象事業は、試掘調査7件、本調査および工事立会11件で、補助対象事業費が2,220,000円であった。

平成22年度に受理した『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書（93条第1項）』ならびに『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（94条第1項）』は50件である。この中で平成22年度国宝重要文化財等保存整備費事業補助金の「市内遺跡発掘調査等事業」の対象事業は、試掘調査7件（内1件は平成23年度に報告）、本調査および工事立会が13件で、補助対象事業費が2,468,000円であった。

なお、平成21年度に実施した発掘調査等事業の大半は平成22年3月刊行の『市内遺跡Ⅳ』発掘調査報告書で報告したところであるが、報告書作成期間中に行った調査など未報告であった5件（試掘調査1件と、本調査および工事立会4件）については本報告書に掲載した。

第3節 調査の体制

発掘調査は茅野市教育委員会事務局 学習企画課（平成21年度）および尖石縄文考古館（平成22年度）が実施した。組織は下記のとおりである。

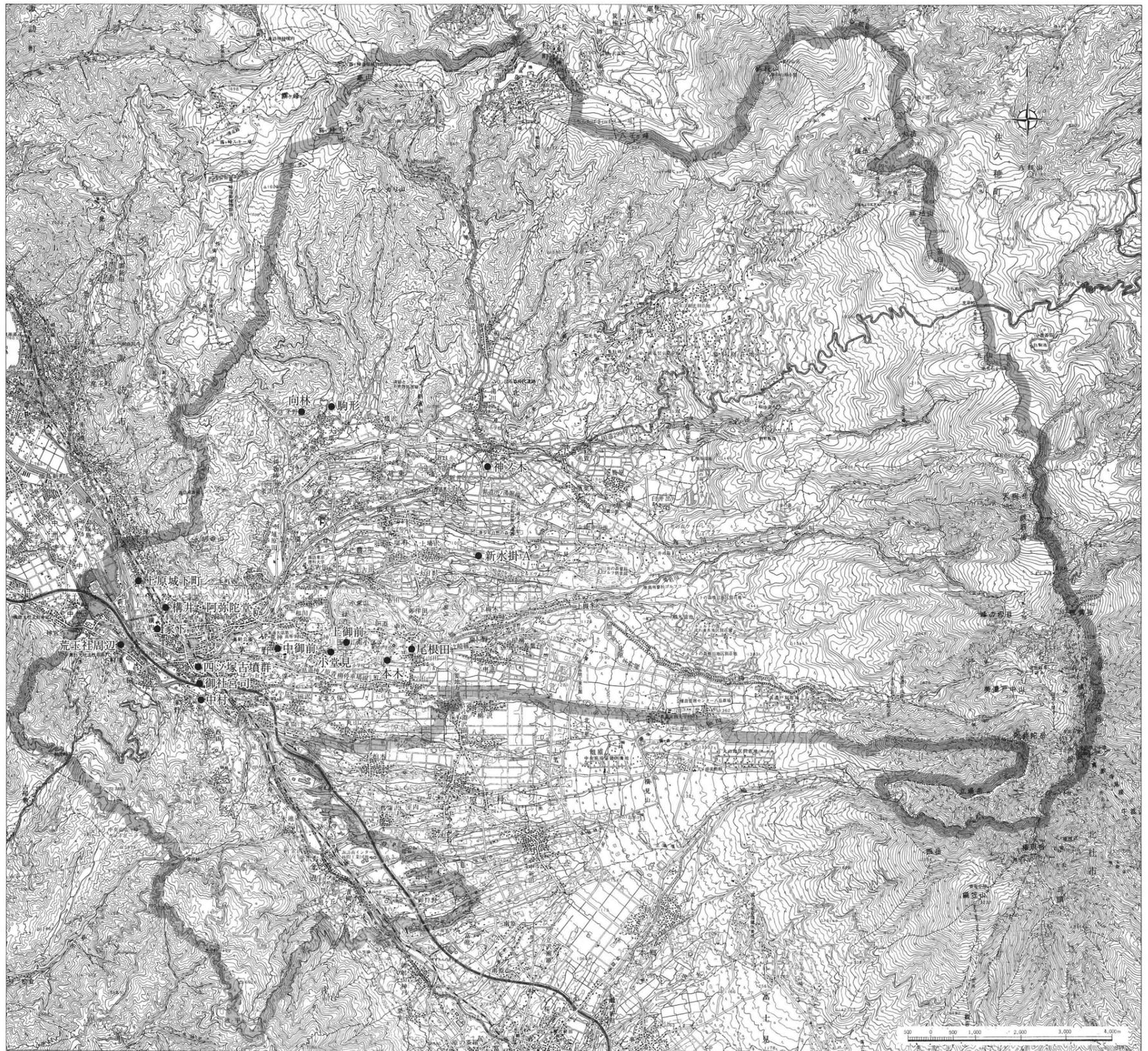
調査組織（平成21・22年度）

- ①調査主体者 牛山英彦（教育長）
- ②事務局 浜 惣一（教育次長 平成21年度まで） 小池沖麿（教育次長 平成22年度から）
- ③学習企画課 柳澤士郎（学習企画課長） 小林健治
 尖石縄文考古館
 鵜飼幸雄（尖石縄文考古館長） 小平光昭（考古館係長 平成21年度まで）
 五味 仁（考古館係長 平成22年度から） 守矢昌文（文化財係長）
 功刀 司 柳川英司 山科 哲（平成22年度から） 大月三千代 小池岳史
- ④調査担当 守矢昌文 小林健治（発掘調査） 小池岳史（発掘調査・整理作業・報告書担当）
- ⑤発掘調査・整理作業参加者
 補助員 牛山矩子 武居八千代
 作業員 宮坂 功 柳沢省一 酒井みさを 大勝弘子 立岩貴江子
 整理作業員 立岩貴江子

年度別調査一覧表

平成21年度 試掘調査								
報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積 (㎡)	調査期間	写真図版 番号	備考
1	110	家下	茅野市ちの2580-5	集合住宅	50	平成22年2月1日～4日	図版1・2	
平成22年度 試掘調査								
報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積 (㎡)	調査期間	写真図版 番号	備考
2	37	向林	茅野市米沢5597	移動無線 通信基地局	3	平成22年10月5日	図版2	
3	53	神ノ木	茅野市北山7347-1	倉庫	13	平成22年4月26日～5月6日	図版2・3	
4	160	小堂見	茅野市玉川3090-3	移動無線 通信基地局	1	平成22年12月6日	図版3	
5	161	上御前	茅野市玉川3108-1ほか	土砂採取	20	平成22年8月30日	図版4	
6	222・223	構井・阿弥陀堂	茅野市ちの2542-11	駐車場	6	平成22年4月13日	図版4	
7	222・223	構井・阿弥陀堂	茅野市塚原1丁目 2497-6	個人住宅	50	平成22年7月20日	図版4・5	
	189	芥沢	茅野市金沢1691-1	移動無線 通信基地局	12	平成23年2月1日～3日		平成23年度 報告予定
平成21年度 本調査および工事立会								
報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積 (㎡)	調査期間	写真図版 番号	備考
1	163	一本木	茅野市玉川18450-1	個人住宅	17	平成22年3月23日	図版5・6	
2	224	上原城下町	茅野市ちの801-1ほか	個人住宅	82	平成21年11月24日～12月3日	図版6～9	
3	224	上原城下町	茅野市ちの1220-16	個人住宅	4	平成22年3月18日	図版9	
平成21～22年度 本調査および工事立会								
報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積 (㎡)	調査期間	写真図版 番号	備考
4	34	駒形	茅野市米沢5073ほか	個人住宅	87	平成22年3月12日～4月13日	図版10	
平成22年度 本調査および工事立会								
報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積 (㎡)	調査期間	写真図版 番号	備考
5	89	新水掛 A	茅野市豊平787	個人住宅	16	平成22年4月20日	図版10	
6	110	家下	茅野市ちの285-3	個人住宅	8	平成22年9月1日	図版10・11	
7	110	家下	茅野市ちの2591-4	個人住宅	28	平成22年10月14日	図版11	
8	142	四ッ塚古墳群	茅野市宮川4704-2	個人住宅	32	平成22年10月20日	図版11・12	
9	143	御社宮司	茅野市宮川5816-1	個人住宅	2	平成22年9月16日	図版12	
10	155	中御前	茅野市玉川4183-2	個人住宅	89	平成22年7月3日～6日	図版12～14	
11	160	小堂見	茅野市玉川3074-1ほか	個人住宅蔵	21	平成22年8月26日	図版14・15	
12	164	尾根田	茅野市玉川10202-1	個人住宅	89	平成22年6月17日～30日	図版15～18	
13	222・223	構井・阿弥陀堂	茅野市ちの2539-1ほか	個人住宅進入路	97	平成22年5月25日～6月1日	図版18～20	
			茅野市ちの2539-27	個人住宅	4	平成22年12月6日		
14	222・223	構井・阿弥陀堂	茅野市ちの3405-1	個人住宅進入路	38	平成22年11月29日～12月1日	図版20	
15	319	荒玉社周辺	茅野市宮川1932-7	個人住宅	1	平成22年9月24日	図版20	
16	323	中村	茅野市宮川16207-3	個人住宅	21	平成22年4月16日	図版21	
17	323	中村	茅野市宮川16209	個人住宅	4	平成22年6月7日	図版21	

平成21年度の事業は『市内遺跡Ⅳ』（2010）で未報告の事業を掲載



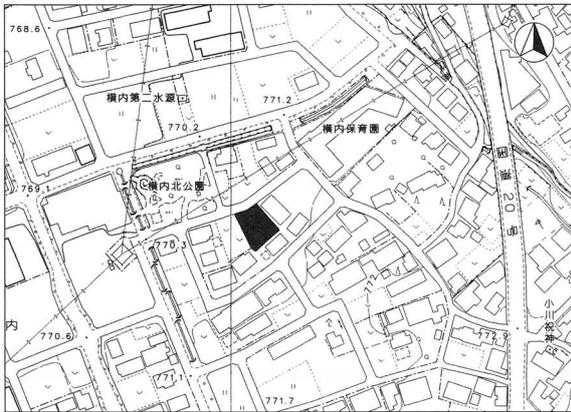
第1図 調査遺跡位置図 (1/100,000)

第2章 試掘調査

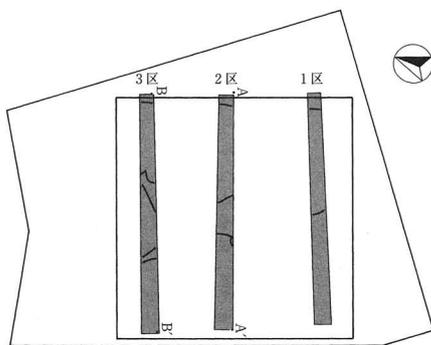
平成21年度

1. 家下遺跡

(21試-1 写真図版1・2)



第2図 調査地点位置図 (1/5,000)



第3図 調査位置図 (1/500)

遺跡番号	110
所在地	茅野市ちの2580-5
調査原因	集合住宅
調査期間	平成22年2月1～4日
調査面積	50㎡
遺構	弥生後期竪穴住居址・方形周溝墓、溝址
遺物	弥生・古墳・平安土器、弥生石器、黒曜石

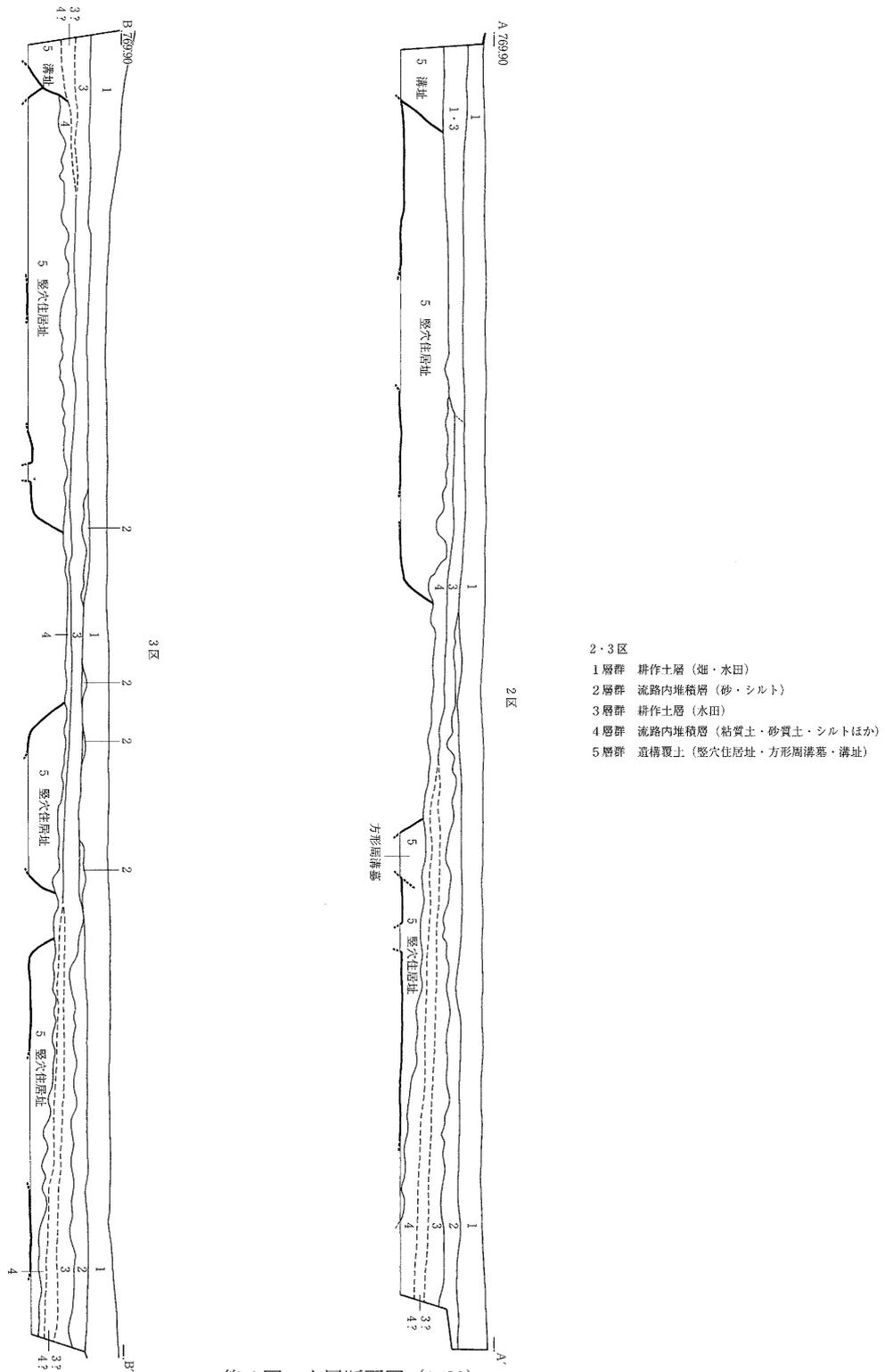
遺跡概要 茅野市街地が広がる沖積面は、北八ヶ岳を源とする上川によって形成された平坦面で、糸魚川-静岡構造線の西縁に平行する「諏訪構造帯茅野断層」により生じた崖を境に、JR中央東線茅野駅がある沖積段丘面とその下に広がる沖積低地に地形上区分されている。当遺跡は沖積段丘面から10mほど低い、断層崖直下の沖積低地に所在する。平成6年度に始まった土地区画整理事業に伴う発掘調査をはじめ、40件余の調査が行われた結果、弥生時代から江戸時代まで継続する集落遺跡であることが確認されている。今のところ、中心をなす時期は弥生時代後期である。諏訪地方で初となる環濠集落や周溝墓群が発見されたほか、断

層崖下に水田址の存在も考えられており、当地方の弥生時代観を変えた遺跡と評価されている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲のほぼ中央で、南東から北西方向に延びる一微高地の西側緩斜面とみられる場所に位置する。標高は770m位である。

周辺におけるこれまでの発掘結果によると、事業計画地は弥生時代後期中葉以降の住居域の一角と推定された。遺構の存在が確実に視されている場所である。当該事業と遺跡保護の調整を図るために、遺構の遺存状況を把握する必要があり、集合住宅が建築される範囲を対象に試掘調査を行うことにした。3箇所（1～3区）の試掘坑を設定し、重機および人力で、遺構が明瞭に確認できるにぶい黄澄（褐）色砂層面付近まで掘り下げた結果、弥生時代後期と考えられる竪穴住居址・溝址（本調査の結果、溝址は方形周溝墓と判明）、それらを切る水路とみられる溝址などが調査区全域に存在することが確認された。また、数面の耕作土層（畑または水田：1層群および3層群）の下に、自然流路に伴う堆積層（2層群および4層群）が確認された。下位層となる4層群は古墳時代（中期？）以降の堆積と考えられ、調査区のほぼ全域を覆っている。この堆積層は西へ向かって厚みを増し、西側で確認された竪穴住居址の中には、床面付近まで削り取られたものも

ある。これら自然営力による削平を受けた遺構には、当該事業に伴う掘削（現況面から110cmまでの土層を補強する表層改良）が及ばないものもあったが、計画どおりに当該事業が行われた場合、十分な保護層が確保できないために、遺構が失われたに等しい状態となることが確認された。事業関係者と保護協議を行ったが、設計変更が不可能との意向が示され、建築範囲全域を発掘調査して記録保存することで合意した。発掘調査は同年2月16日から3月15日まで行った。なお、発掘調査報告書は平成23年度に刊行する予定である。

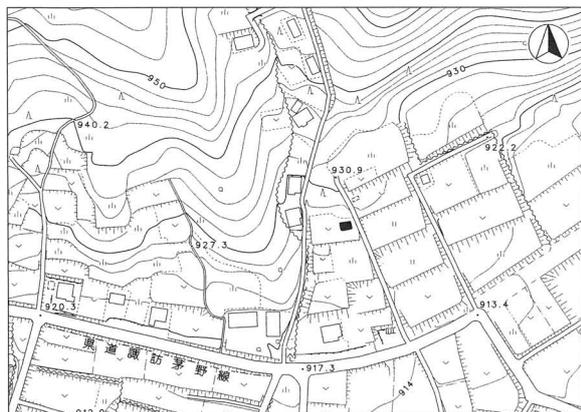


第4図 土層断面図 (1/80)

平成22年度

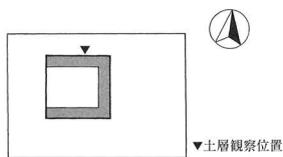
1. 向林遺跡

(22試-1 写真図版2)

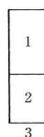


第5図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 37
所在地 茅野市米沢5597
調査原因 移動通信無線基地局
調査期間 平成22年10月5日
調査面積 3㎡
遺構 なし
遺物 なし



第6図 調査位置図 (1/300)



1 黒色土5YR1.7/1 表土
2 黒褐色土5YR2/2~暗赤褐色土5YR3/2
礫2mm~50cm多
3 褐色砂質土10YR4/4
礫2mm~20cm多

第7図 土層断面図 (1/40)

遺跡概要 霧ヶ峰南麓の小さな扇状地状の台地に所在する。この地形は山体崩落により形成されたもので、基盤層に多数の礫が含まれている。昭和54年に遺跡登録され、平成9年に県営ほ場整備事業に伴う試掘調査、翌年に発掘調査が行われた。その結果、縄文時代早期前半・前期末葉、平安時代後半の竪穴住居址、縄文時代早期末葉および前期末葉と考えられる土坑が検出された。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の中央からやや西に寄った場所で、扇状地状台地の扇頂部西側にある山脚末端の小さな高まりに位置する。標高は930m位である。

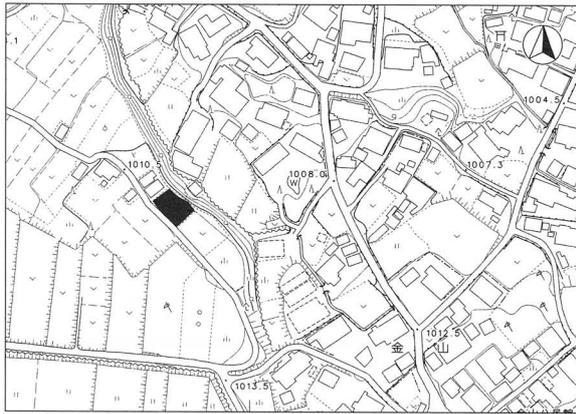
開発事業に伴って、遺跡範囲の東側が発掘調査され、扇状地状台地の扇頂部から扇中央部に竪穴住居址を主とする遺構が確認されている。その分布状況からみて、遺跡の中心部が調査された可能性が高いといえようが、調査区の境界付近に遺構が存在する点から、調査区域外への遺構の広がりも十分に考えられる状態であった。そこで、遺構・遺物の存否、土層の確認とともに、遺跡範囲の確認を視野に入れた試掘調査を行った。

調査対象は2.5m角の狭い範囲である。また、西側に立木があり、掘削可能な場所が限られるため、表土層から人力で掘り下げることにした。基本的な土層は、表土層の直下が礫をほとんど含まない黒褐色土層または暗赤褐色土層で、その下が礫を多数含む褐色砂質土層である。各層は地形に沿って南西方向に傾斜しながら、厚みを増していく。試掘坑の断面および底面を精査したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。これにより当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

まとめ 狭い範囲の調査であったが、1点の遺物すら出土しなかったこと、南西方向に落ち込んでいく地山層の様子が捉えられたことは、遺跡範囲を考える上で重要な所見と思われる。これに平成10年の発掘成果（遺構分布状況）を加え、遺跡範囲を再考するならば、遺跡範囲の西側境界を今回の調査地点付近に設けるのが妥当であろう。これにより遺跡範囲を東側に縮小することにした。

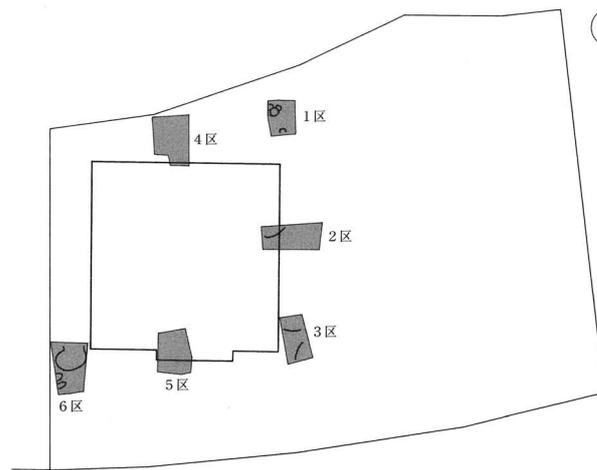
2. 神ノ木遺跡

(22試-2 写真図版2・3)



第8図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 53
所在地 茅野市北山7347-1
調査原因 倉庫
調査期間 平成22年4月26日～5月6日
調査面積 13m²
遺構 縄文前期竪穴住居址3軒、縄文前期方形柱穴列2基
遺物 縄文土器・石器・黒曜石 (91点、288.8g)、近世陶器 整理箱1箱



第9図 調査位置図 (1/300)

遺跡概要 八ヶ岳西麓最北端の南東から北西に延びる尾根状台地に所在する。緩い傾斜の西側斜面に対し、東側斜面は小河川による開析が進み、6～9mの急峻な崖となる。崖下の平坦面は芹ヶ沢集落の南端となり、ここから渋川左岸の河岸段丘面かけて同集落が広がっている。当遺跡は、縄文時代前期前半「神ノ木式土器」の標識遺跡である。型式設定の契機となる土器群を得た昭和27年の諏訪清陵高校地歴部による第1次の発掘調査の後、昭和37年の諏訪実業高校地歴部の発掘調査、平成6年度の県営ほ場整備事業に伴う試掘調査、平成8年度の倉庫建築工事に伴う発掘調査が行われた結果、約15,000m²の面積を有し、縄文時代前期前半を中心とする集落遺跡であることが確認された。なお、当遺跡は、当市において遺跡のほぼ全域が保存されている数少ない縄文集落遺跡の一つである。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の北側で、崖に近い東側緩斜面に位置する。標高は1,011m位である。

この度の試掘調査は、耕作地(畑)に計画された倉庫の建築工事と遺跡の保護・調整を図るとともに、遺構の存在が確認されているものの、実態が不明な遺跡北側の地下の様子を確認することを目的に行った。調査対象範囲に6箇所(1～6区)の試掘坑を設定し、重機および人力による掘り下げを行い、土層の状態と遺構・遺物の存否を確認した。基本的な土層は、黒色土から明黄褐色土(ローム層)に漸移する状態を示す。事業者(地権者)から、かつて耕作(長芋栽培)の際に広い範囲から土器・黒曜石・礫などが多数出土したとの話を伺っていたが、これを裏づけるように、4・5区を除く試掘坑からこの攪乱を受けた遺構が複

無文土器、薄手の無文土器のほか、縄文地文に半截竹管状工具による平行沈線内に「C」字形の爪形文を充填した土器がある。黒曜石（22点、48.8g）には、石核・剥片・碎片・加工痕をもつ剥片・両極打法による剥離痕をもつ石片がある。また、攪乱層から黒曜石（1点、6.0g）の石核が出土した。

2区 堅穴住居址1軒（2号住居址）と土坑1基（2号土坑）が検出された。

2号住居址は床の一部を確認したに過ぎないが、覆土の堆積状態からみて、壁に近い部分であると思われる。床は明黄褐色土層面につくられた硬く締りのある面で、1号住居址より20cmほど高い位置に設けられている。2号土坑を貼床するが、10cmほど陥没する。覆土は黒褐色土層で4層に分層された。「2号住居址」として取り上げた遺物には土器と黒曜石がある。土器は繊維を含む縄文施文の土器、繊維を含まない縄文施文の土器、厚手の無文土器、薄手の無文土器である。黒曜石（8点、40.0g）には、石核・剥片・碎片・石鏃未製品・加工痕をもつ剥片がある。なお、後で触れる「2区」として取り上げた遺物の大半は2号住居址に伴うものである。出土した土器の時期からみて、縄文時代前期前半の堅穴住居址と考えられる。

2号土坑は直径80cm（以上？）、2号住居址床面からの深さが95cmある大形土坑である。覆土は2層に大別された。第6層とした幅30cmほどの黒褐色土層が柱痕とみられるため、本址は柱穴と判断される。また、類似する深さを示す3区検出の3・4号土坑と、北東-南西に一定の間隔で並ぶ状態から、これらの土坑とともに方形柱穴列を形成する可能性が高い。「2号土坑」として取り上げた遺物は土器と黒曜石である。土器は厚手の無文土器、薄手の無文土器がある。黒曜石（5点、21.7g）には、石核・剥片・碎片・加工痕をもつ剥片がある。出土した土器の時期からみて、縄文時代前期前半と考えられる。

「2区」として取り上げた遺物には土器・黒曜石・石器がある。土器は繊維を含む縄文施文の土器、繊維を含まない縄文施文の土器、櫛歯状工具による連続刺突文のある土器、厚手の無文土器、薄手の無文土器などである。黒曜石（42点、150.8g）には、原石？・石核・剥片・碎片・加工痕をもつ石片がある。安山岩で、凹み、磨面、敲打痕をもつ石器が1点あるほか、頁岩（2点、13.2g）の剥片がある。

3区 土坑2基（3・4号土坑）が検出された。これらの土坑は、2区検出の2号土坑とともに、縄文時代前期前半の方形柱穴列を形成する柱穴と考えたものであるが、平面規模はともに不明である。

3号土坑は深さが160cmある。覆土は3層に分層された。主体をなす第4層がローム塊を多量に含むことから、露呈した覆土は掘方埋土と考えられる。櫛歯状工具による格子状沈線が施文された薄手の土器が出土した。

4号土坑は深さが155cmある。覆土は3層に分層された。主体をなす第7層がローム塊を多量に含むことから、露呈した覆土は掘方埋土と考えられる。厚手・薄手の無文土器が少量出土した。

「3区」として取り上げた遺物には土器・黒曜石がある。土器は繊維を含む縄文施文の土器、繊維を含まない縄文施文の土器、厚手の無文土器、薄手の無文土器である。黒曜石（5点、6.7g）は剥片・碎片である。

6区 堅穴住居址1軒（3号住居址）と土坑4基（5～8号土坑）が検出された。

3号住居址は平らで硬化した明黄褐色土層面と、これに続く壁とみられる立ち上がり確認されたため、堅穴住居址と判断した。覆土は黒褐色土層で、色調の違いから3層に分層された（7・8号土坑を除く）。厚さは45cmである。出土遺物は土器のみである。厚手で無文の大形土器片が床上1～2cmから出土したほか、繊維を含まない縄文施文の土器、薄手の無文土器が覆土から出土した。出土した土器の時期からみて、縄文時代前期前半の堅穴住居址と考えられる。

5号土坑は南北長が約90cm、深さが105cm、断面形が筒形となる大形土坑である。6号土坑と重複し、本址のほうが古と考えられる。覆土は2層に分層されたが、ともにローム塊を多量に含む黒褐色土層である。

平面形および断面形、規模、覆土の状態からみて、縄文時代前期前半の方形柱穴列を形成する柱穴の可能性がある。厚手の無文土器が少量出土した。

6号土坑は5号土坑に直交して重複する大形土坑である。5号土坑と大差のない平面規模と考えられること、深さが5号土坑より数cm深く、断面形が筒状となるなど、共通する点が多い。覆土はローム塊を多量に含む黒褐色土層であるが、5号土坑より含有量が少ない。中央に不明瞭であるが、縦方向に分層可能なローム塊の少ない黒褐色土層がある。5号土坑と同様に方形柱穴列を形成する柱穴と考えられる。なお、5号土坑と切り合い関係にあるものの、同じ遺構に伴う柱穴と考えておく。

7・8号土坑は3号住居址の壁際にある小穴で、住居址の周溝に伴うものかもしれない。

「6区」として取り上げた遺物には土器・黒曜石がある。土器は繊維を含まない縄文施文の土器、厚手の無文土器、薄手の無文土器である。黒曜石（3点、7.6g）は剥片・碎片である。

4・5区 遺構は検出されなかったが、土器・黒曜石などの遺物が少量出土した。

4区出土の土器は、繊維を含む縄文施文の土器、繊維を含まない縄文施文の土器、厚手の無文土器である。黒曜石（2点、5.0g）は、碎片・加工痕をもつ石片である。

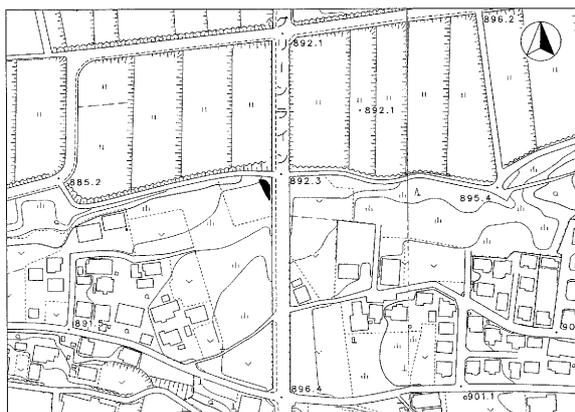
5区出土の土器は、繊維を含む縄文施文の土器、厚手の無文土器、薄手の無文土器である。黒曜石（1点、0.8g）は碎片である。また、頁岩（1点、30.4g）の石核がある。

まとめ 事業計画地は過去に行われた発掘調査の状況から、縄文時代前期前半の遺構の存在が確認されていた場所である。遺構の検出は当然の結果であるといえようが、実態が不明であった遺跡範囲の北側に、縄文時代前期前半の竪穴住居址と方形柱穴列の可能性のある複数の遺構が、台地北側の「肩」に近い地点まで、重複または近接しながら濃密に分布する様子が捉えられた点が試掘調査における最大の成果である。また、調査の原因となった倉庫の建築工事は、諸般の事情から東方約25mの地点に建築場所が変更となったが、その地点からも前期前半とみられる竪穴住居址が複数確認されている。これら今回の一連の調査によって、前期前半の遺構が遺跡範囲のほぼ全域に広がることが明らかになりつつある。

かつて、当遺跡は遺跡範囲の約1/2がほ場整備事業の施工範囲に組み入れられ、一時は破壊の危機に直面したが、地権者・事業関係者の遺跡保護に対する理解・協力によって全面保存されることとなった稀な遺跡である。この点に加え、八ヶ岳西麓を代表する前期前半の集落であるとともに、「神ノ木式土器」の標識遺跡としての重要性を再度認識し、遺跡全体が現状のまま保存されるように地元関係者と調整を図っていきたい。

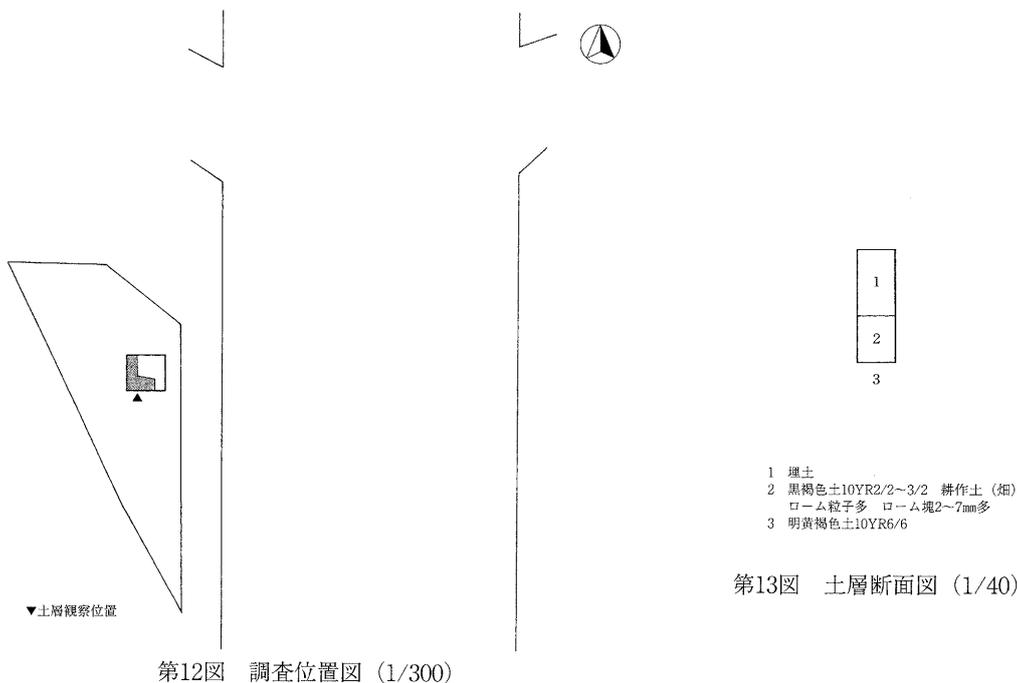
3. 小堂見遺跡

(22試-3 写真図版3)



第11図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 160
所在地 茅野市玉川3090-3
調査原因 移動通信無線基地局
調査期間 平成22年12月6日
調査面積 1㎡
遺構 なし
遺物 なし



第13図 土層断面図 (1/40)

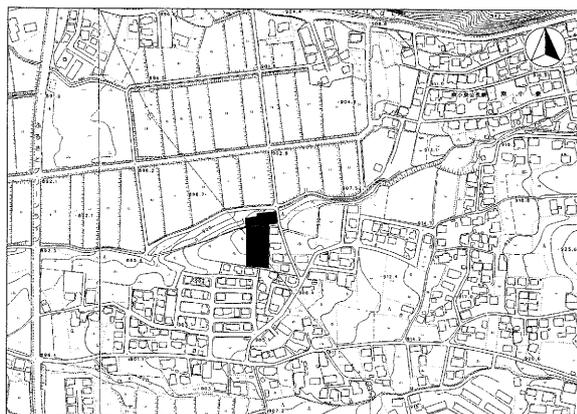
遺跡概要 ハヶ岳西麓の東西に延びる尾根状台地に所在する。平成3年度以降の各種開発事業に伴う数次の発掘調査の結果、縄文時代中期初頭と平安時代の竪穴住居址、縄文時代と考えられる土坑（落とし穴あり）、時期不明の溝址が検出された。当遺跡で注目されるのは、通常、遺構検出の少ない北側斜面に縄文集落がつくられている点である。この特異な集落立地を示すこととなった要因として、南側傾斜に比べて傾斜が緩く、かつては北側の谷を豊富な水が流れていたという地理的な環境との関わりが考えられている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の北端で、北側緩斜面の裾近くに位置する。標高は892m位である。

調査の対象範囲は1.5m角の狭い範囲である。また、対象範囲内に立木があり、掘削可能な場所が限られるため、表土層から人力で掘り下げ、土層と遺構・遺物の存否を確認することにした。本来の基本的な土層は、黒色土から明黄褐色土（ローム層）に漸移する状態であるが、厚い盛土層と耕作土層（畑）を除去すると、明黄褐色土層が露呈した。そして、この層は1.5m角の調査範囲の中で、北側に向かって急激に落ち込む状態を示していた。この面に遺構は確認されず、遺物の出土もいっさいないことから、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

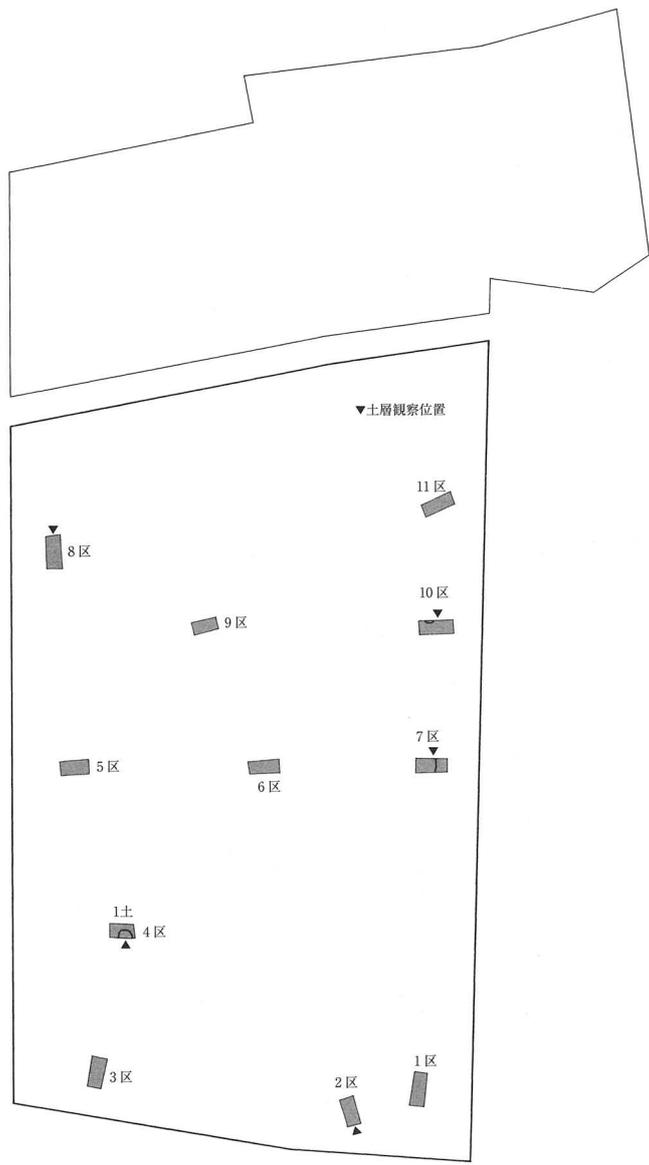
4. 上御前遺跡

(22試-4 写真図版4)



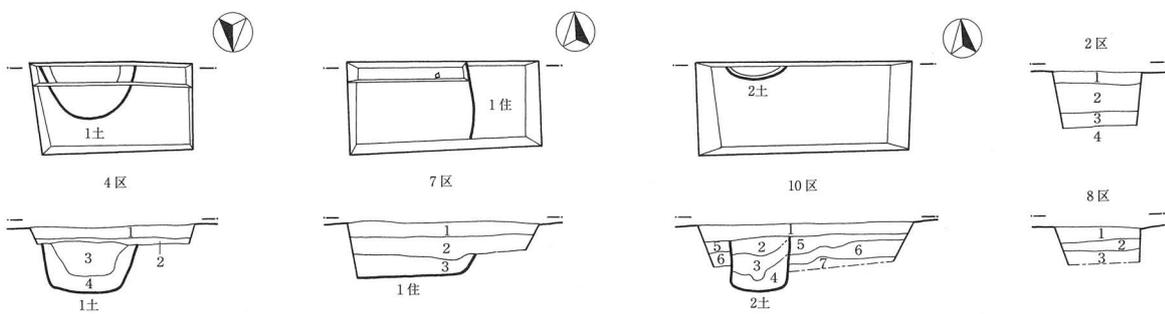
第14図 調査地点位置図 (1/10,000)

遺跡番号 161
所在地 茅野市玉川3108-1ほか
調査原因 土砂採取
調査期間 平成22年8月30日
調査面積 20㎡
遺構 縄文前期竪穴住居址1軒、土坑2基
遺物 縄文土器10点、黒曜石9点 (20.2g)



第15図 調査位置図 (1/300)

- 2区
 - 1 黒色土75YR3/1 耕作土(畑)
 - 2 黒褐色土10YR2/2 耕作土(畑)
 - 3 暗褐色土10YR3/3~褐色土10YR4/4
 - 4 にふい黄褐色土10YR5/4~黄褐色土10YR5/6
- 4区
 - 1 2区1層に同じ
 - 2 2区2層に同じ
 - 3 黒褐色土10YR2/2 (黒色土10YR2/1を含む) 1土
ローム粒子少 ローム塊2mm~1cm少 炭化物2mm少
 - 4 黒褐色土10YR2/3~3/2 1土
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 礫2mm~1cm少 炭化物2~5mm少
- 7区
 - 1 2区1層に同じ
 - 2 2区2層に同じ
 - 3 黒色土10YR2/1 1住
ローム粒子少 ローム塊2~7mm少 礫2mm~1cm少 炭化物2~5mm多
- 8区
 - 1 2区1層に同じ
 - 2 2区2層に同じ
 - 3 黒褐色土10YR3/2~暗褐色土10YR3/3
- 10区
 - 1 2区1層に同じ
 - 2 黒色土10YR2/1 2土
ローム粒子少 礫2~5mm少
 - 3 黒褐色土10YR2/3 2土
ローム粒子多 ローム塊2mm少 礫2~5mm少 炭化物2~5mm少
 - 4 黒褐色土10YR2/2 2土
ローム粒子少 ローム塊2~7mm少 礫2~5mm少 炭化物2mm少
 - 5 暗褐色土10YR3/3~褐色土10YR4/4
 - 6 にふい黄褐色土10YR5/4~黄褐色土10YR5/6
 - 7 明黄褐色土10YR6/6



第16図 遺構平面図・土層断面図 (1/80)

遺跡概要 八ヶ岳西麓の東西に延びる舌状台地に所在する。昭和45年から47年に岡谷南高校歴史クラブ考古班による3次の発掘調査が行われ、縄文時代前期末葉から中期初頭の竪穴住居址、早期前半の居住施設とも考えられる「小竪穴」、中世の地下式坑などとともに、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期・前期・中期・晩期の各種遺物が検出された。この調査結果から、断続的ながら長期にわたって生活の痕跡が認められる点が特徴とされている。また、同一地点から異なる時期の縄文時代の遺物が出土した要因として、舌状

台地先端の南裾にある豊富な湧水との関わりが考えられている。平成13年には宅地造成工事に伴う発掘調査が行われ、縄文時代前期末葉の竪穴住居址1軒、前期末葉とみられる土坑1基、焼土址1箇所が検出された。

調査概要 調査地点は遺跡範囲のほぼ中央で、台地平坦面の頂部付近から南側緩斜面に位置する。この場所は昭和45年から47年に岡谷南高校歴史クラブ考古班によって発掘調査が行われた、東西に約40m離れた「第1地点」と「第2地点」のほぼ中間であり、平成13年の宅地造成工事に伴う発掘調査区の北側隣接地である。標高は906m位である。

当該事業は遺跡に影響のない範囲で表土層を掘り取る内容であるが、立ち会いを進めたところ、思いのほか表土層に厚みのないことが判明し、保護層の厚さ、および遺構の遺存状態を確認する必要が生じた。事業者の協力を得て、任意に設定した11箇所（1～11区）を対象に試掘した結果、厚さ15～40cm程度の表土層下に竪穴住居址1軒（7区）と土坑2基（4・11区）が確認された。そして、遺構の遺存状態および構造を確認するために、事業者の承諾を得て、床面および底面までの部分的な掘り下げを行った。なお、基本的な土層は、黒色土から明黄褐色土（ローム層）に漸移する状態である。調査区ごとに遺構の概要を以下に記す。

4区 15～20cmの表土層下に土坑1基（**1号土坑**）が検出され、断面形・深さなどを確認した。

1号土坑は直径が95cm、深さが55cmの大形土坑である。断面形は箱形であるが、西壁面から底面の境が不明瞭となる。覆土は2層に分層された。ともに黒褐色土をベースとするが、上層（第3層）に黒色土が斑状に入る。縄文時代前期末葉の土器片が1点、時期不明の土器片が1点、黒曜石（2点、0.4g）の剥片・碎片が出土した。出土遺物の時期からみて、縄文時代前期末葉の土坑と考えられる。

7区 30～40cmの表土層下に竪穴住居址1軒（**1号住居址**）が検出され、東壁と床の一部を確認した。

1号住居址の壁は高さが25cmほどで、緩やかな傾斜で床に向かう。壁下に周溝はない。床は締りの弱い面であり、東から西に向かい緩やかに傾いている。覆土は炭化物を多量に含む黒色土層である。縄文時代前期末葉の土器片が5点、黒曜石（1点、0.9g）の剥片が出土した。出土遺物の時期からみて、縄文時代前期末葉の住居址と考えられる。

10区 15～20cmの表土層下に土坑1基（**2号土坑**）が検出され、断面形・深さなどを確認した。

2号土坑は直径が65cm以上、深さが55cmある大形土坑である。断面形は底面が外側に少し開いた筒形で、壁面と底面の境が明瞭である。覆土は3層に分層された。上層（第2層）が黒色土層、中・下層（第3・4層）が黒褐色土層である。縄文時代前期末葉の土器片が1点出土した。出土遺物の時期からみて、縄文時代前期末葉の土坑と考えられる。

1・2区 遺構は検出されなかったが、土器・黒曜石が少量出土した。

1区では加工痕のある黒曜石（1点、6.3g）の石片が、2区では縄文時代前期末葉とみられる土器片が2点と、黒曜石（1点、0.1g）の剥片が出土した。

その他、掘削に伴う廃土から、黒曜石（4点、13.3g）の剥片が採集された。

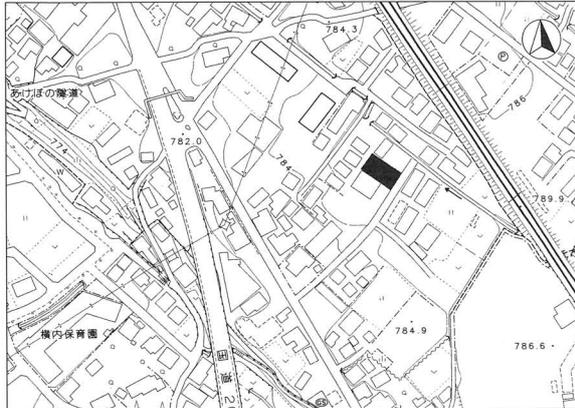
まとめ 今回の試掘調査は対象範囲の1割に満たない小規模なものであったが、11箇所ある試掘坑の3箇所から、縄文時代前期末葉の竪穴住居址1軒と同時期と考えられる土坑2基が確認された。前記のとおり、試掘調査を行った地点は、昭和45年から47年に岡谷南高校歴史クラブ考古班による発掘調査が行われた調査区のほぼ中間に位置している。両地点から縄文時代前期末葉から中期中頭の竪穴住居址が確認されたことを踏まえ、両地点を結ぶ台地平坦面の頂部を中心に該期集落が形成されたと考えられているが、この集落観の

裏づけとなる資料が今回の調査で得られたこととなる。また、平成13年の宅地造成に伴う発掘調査によって、遺跡範囲の南側境界付近となる台地の南側斜面まで該期集落の広がり確認されているので、北方向への集落の広がり確認することが、今後の課題の一つとなろう。

試掘調査の結果に基づき、事業者と当該事業にかかる遺跡の保護措置を協議した結果、表土層の鋤き取りを10cm以内におさめ、表土層の薄い箇所での鋤き取りを避けるとする2点が確認され、検出された遺構の保存が図られることとなった。

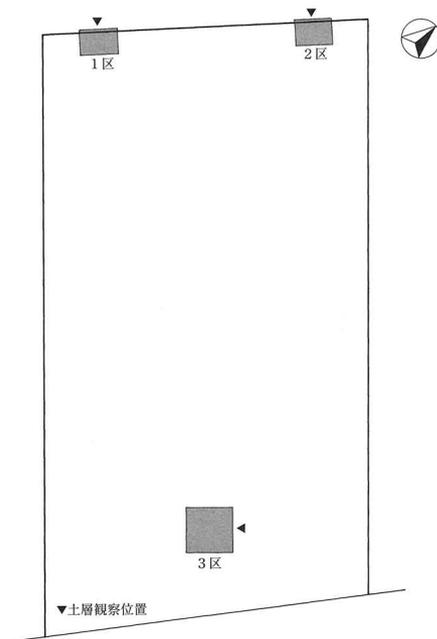
5. 構井・阿弥陀堂遺跡

(22試-5 写真図版4)

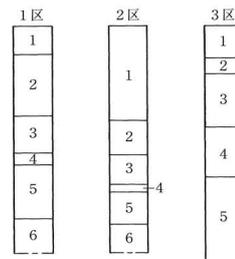


第17図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 222・223
 所在地 茅野市ちの2542-11
 調査原因 駐車場
 調査期間 平成22年4月13日
 調査面積 6 m²
 遺 構 なし
 遺 物 なし



第18図 調査位置図 (1/300)



- 1・2区
- 1 砕石
 - 2 黒褐色土10YR3/1 耕作土 (上位に砕石を含む)
 - 3 黒褐色 (粘質) 土10YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積
 - 4 黒色土10YR1.7/1 (3層に伴う客土)
 - 5 黒色 (粘質) 土10YR2/1
 - 6 黒色土10YR2/1 (黒色土10YR1.7/1の塊を含む)
- 3区
- 1 黒褐色 (粘質) 土10YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積
 - 2 黒褐色土10YR3/1 (1層に伴う客土)
 - 3 黒色土10YR2/1
 - 4 白色砂少
 - 5 黒色 (粘質) 土10YR1.7/1
礫2mm~20cm多

第19図 土層断面図 (1/40)

遺跡概要 霧ヶ峰山塊の南西縁に位置する永明寺山 (1,119m) の南麓で、茅野市街地が広がる平坦面に所在する。この平坦面は地形区分上、沖積段丘面と呼ばれ、上川によって形成された地形面とされる。JR中央東線茅野駅をはじめ、国道20号 (甲州街道) や伊那地方と佐久地方を結ぶ国道152号などの幹線道路が通過する交通の要衝であり、早くから宅地化が進んだ地域である。

当遺跡は古くから知られた遺跡の一つである。遺跡の中央をJR中央東線が縦断しており、東側が「阿弥

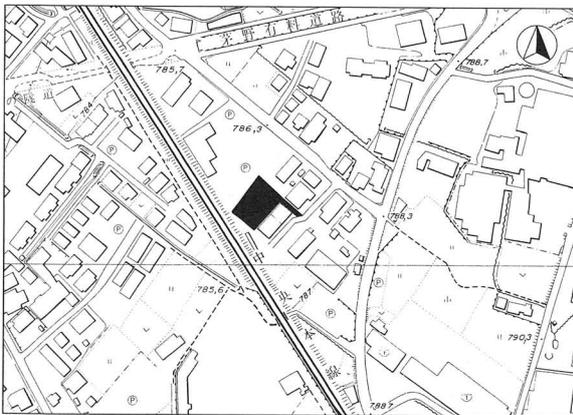
陀堂遺跡」、西側が「構井遺跡」と呼ばれ、長い間別々の遺跡とされてきた。両遺跡は幅50～100mの浅い谷を挟み、東西に対峙する位置関係にあるが、谷の中に埋蔵文化財の包蔵が十分に考えられることから、今では一つの遺跡と考えられている。昭和55年の茅野有料道路建設工事に伴う発掘調査以降、10件余の発掘調査が行われた結果、縄文・弥生・古墳・平安・中世の複合する集落遺跡と確認された。

調査概要 調査地点は中央東線の西側、「構井地区」である。遺跡範囲の西側で、沖積段丘面を形成する南東から北西に延びる一微高地の頂部付近とみられる場所である。標高は785m位である。

駐車場の新設工事に伴い、その外周に長さ17mの擁壁と、2m角の浸透枡が設置されることとなり、土層の状態と遺構・遺物の存否を確認するための試掘調査を行った。擁壁設置範囲に2箇所（1・2区）、浸透枡設置範囲に1箇所（3区）の試掘坑を設定し、当該事業で計画された掘削深度（現況地盤以下、擁壁が120cm、浸透枡が125cm）まで掘り下げた。基本的な土層は3層に大別が可能であり、上位に碎石・埋土などによる表土層（1・2区第1層）、中位に水田およびこれに関わる土層（1・2区第2～4層、3区第1～4層）が堆積し、下位が地山層と考えられる河川礫を含む黒色土層（1・2区第4・5層、3区第5層）となる。当該事業の掘削が地山層に及ぶことが確認され、この層を中心に試掘坑の底面と断面を精査したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。調査結果からみて、調査対象範囲に遺構の存在する可能性が極めて低いと考えられるため、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

6. 構井・阿弥陀堂遺跡

(22試-6 写真図版4・5)



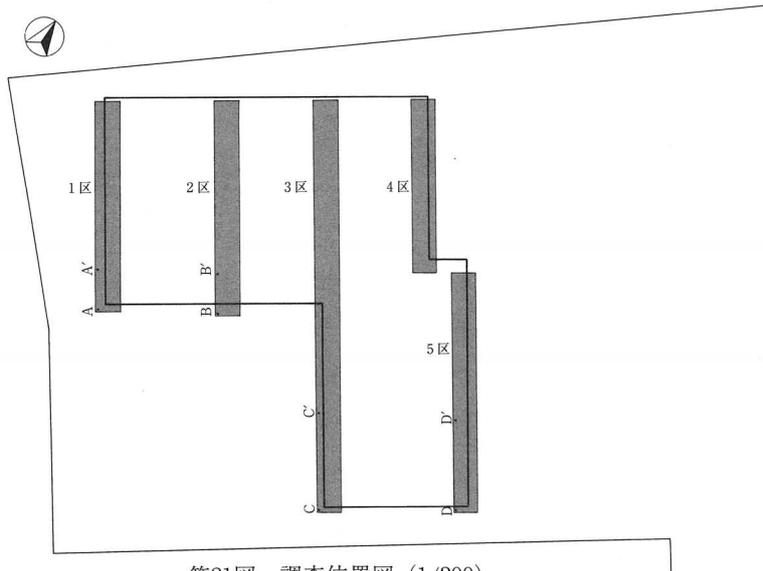
第20図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号	222・223
所在地	茅野市塚原1丁目2497-6
調査原因	個人住宅
調査期間	平成22年7月20日
調査面積	50㎡
遺構	中世遺物包含層
遺物	弥生・古墳・平安・中世土器107点、須恵器4点、黒曜石3点(10.9g)

調査概要 調査地点はJR中央東線の東側、「阿弥陀堂地区」に位置する。遺跡範囲の中央からやや南に寄った場所で、「構井地区」との間に入る、南東から北方に向かう浅い谷の中である。標高は785m位である。

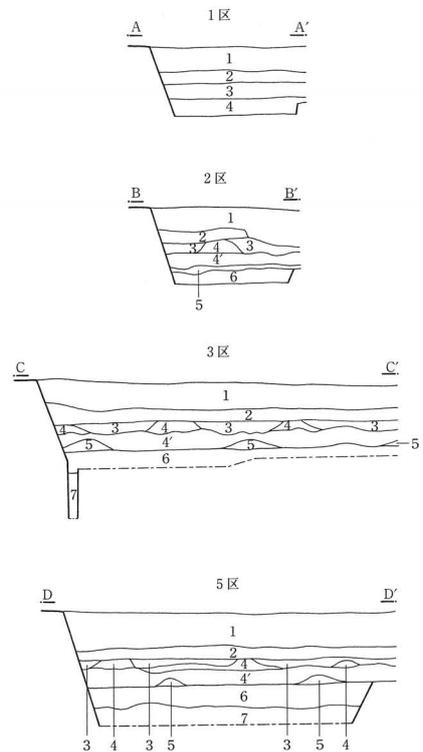
個人住宅の建築工事に伴う基礎工事に先立って、地盤補強工事（表層改良工事）が計画されていた。対象面積は200㎡弱である。計画された掘削深度（現況地盤から60～90cm）からみて、地山層に掘削が及ぶ可能性が高いと予想されたが、周辺での発掘調査事例に乏しく、谷の中と考えられる場所に位置することから、土層の状態と埋蔵文化財の遺存状況を把握するための試掘調査を行うことにした。

対象範囲に5箇所（1～5区）の試掘坑を設定し、計画された掘削深度付近まで重機で慎重に掘り下げた後、試掘坑の底面と断面を精査した。基本的な土層は3層に大別が可能で、砂利が混在する埋土層の上位層（2区第1層ほか）、耕作土（水田、畝状の土層あり）とこれに関わる土層の中位層（2区第2～6層ほか）、中世の土器片（カワラケ主体）を多量に含む下位層（3・5区第6・7層）である。精査の結果、1・2・4区と3・5区北側は中位層の中で当該事業の掘削が止まるのに対し、掘削深度が一段深い3・5区南側で



第21図 調査位置図 (1/300)

- | | |
|--|---|
| <p>1区</p> <p>1 黒色土10YR2.5/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積</p> <p>2 黒褐色土7.5YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積</p> <p>3 黒褐色土10YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積</p> <p>4 黒褐色 (粘質) 土10YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積</p> <p>2区</p> <p>1 埋土 (碎石混在)</p> <p>2 黒色土7.5YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積</p> <p>3 黒褐色土10YR3/1 耕作土</p> <p>4 黒褐色土10YR2/2 (明黄褐色 (砂質) 土10YR6/6塊を含む) 耕作土 明黄褐色砂質土粒子多 明黄褐色砂質土塊2mm~3cm多</p> <p>4' 黒褐色土10YR2/2+黒色粘質土10YR2/1 +にぶい黄褐色砂 (質土) 10YR5/4 耕作土 下位に鉄分集積 明黄褐色砂質土粒子多 明黄褐色砂質土塊2mm~3cm多</p> <p>5 黒色土5YR1.7/1 (4層に伴う客土?)</p> <p>6 黒褐色 (粘質) 土10YR3/1 耕作土 (水田) 下位に鉄分集積</p> | <p>3・5区</p> <p>1 2区1層に同じ</p> <p>2 2区2層に同じ</p> <p>3 2区3層に同じ</p> <p>4 2区4層に同じ</p> <p>4' 2区4'層に同じ</p> <p>5 黒褐色粘質土10YR3/1 耕作土? 下位に鉄分集積</p> <p>6 黒褐色砂質土5YR2/1 遺物包含層 白色または黄褐色砂多 礫2mm~1.5cm少 炭化物2~5mm少</p> <p>7 黒色土5YR1.7/1 遺物包含層 礫2mm~1.5cm多 炭化物2~5mm少 焼土塊2mm~2cm少 (上位)</p> |
|--|---|



第22図 土層断面図 (1/80)

は下位層に掘削が及ぶこととなった。そのため、下位層の性格ならびに堆積要因を確認する必要が生じ、事業者の承諾を得て、部分的な深掘りを数箇所で行った。色調・土質・含有物などの違いから、上下2層に分層され、その層境はわりと明瞭である。上層 (3・5区第6層) は黒褐色砂質土層で、層の厚さが20cmある。層全体に白色・黄褐色の砂が含まれる点から、自然営力によって浅い谷に流れ込んだ遺物包含層と考えられる。下層 (3・5区第7層) は黒色土層で、1.5cm大までの小礫を多く含み、2cm大までの焼土塊を含む点が特徴である。焼土塊を含む点が気になるが、上層と同様の堆積層の可能性が高いと考えている。層の厚さは50cm以上である。

各試掘坑から弥生時代から中世の土器、須恵器、黒曜石が出土した。1区では弥生後期土器 (甕?)・古墳後期?土師器・中世土器 (カワラケ)、2区では平安須恵器 (坏)、3区では弥生土器・古墳土師器 (甕)・中世土器 (カワラケ・内耳土器)、平安須恵器 (坏)、黒曜石 (1点、6.4g) の石核?、5区では弥生後期土器・古墳土師器 (甕)・中世土器 (カワラケ・内耳土器)、須恵器、黒曜石 (2点、4.5g) の剥片が出土した。なお、遺物包含層から出土した土器約90点の大半は手捏ねのカワラケである。

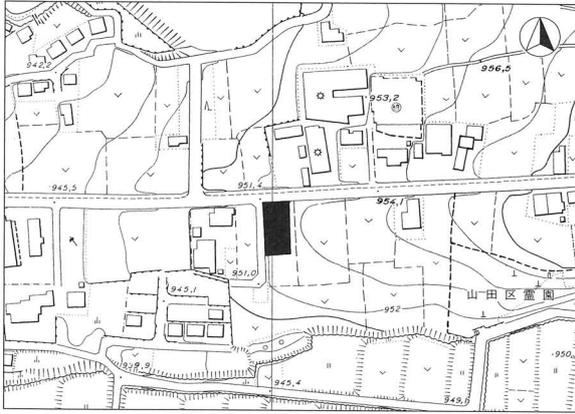
3・5区南側で確認された遺物包含層の保護について、事業者と協議を行った結果、掘削が遺物包含層まで達しないように設計変更されることとなった。そのため、当該事業は遺跡に影響のない範囲で行われている。

第3章 本調査および工事立会

平成21年度

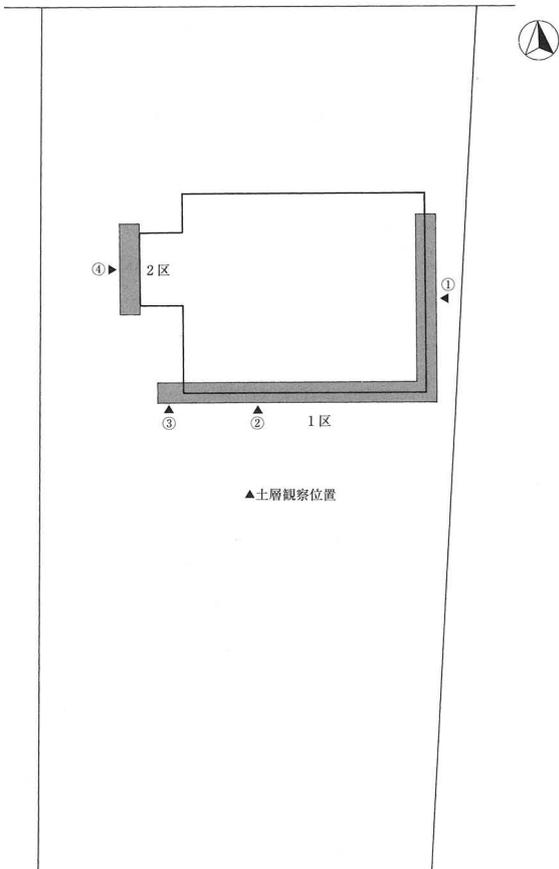
1. 一本木遺跡

(21-1 写真図版5・6)

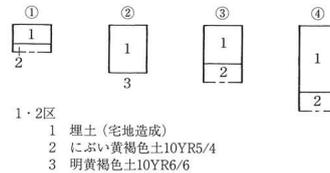


遺跡番号 163
所在地 茅野市玉川8450-1
調査原因 個人住宅
調査期間 平成22年3月23日
調査面積 17m²
遺構 なし
遺物 なし

第23図 調査地点位置図 (1/5,000)



第24図 調査位置図 (1/300)



第25図 土層断面図 (1/40)

遺跡概要 八ヶ岳西麓の東西に延びる台地に所在する。台地平坦面の頂部付近から南側斜面が遺跡に指定され、縄文時代中期末葉の土器や石器が採集されている。しかし、急速に宅地化が進んだ地域である上に、発掘調査事例に乏しいため、遺跡の範囲・時期・性格など不明な点が多い。平成10年3月に、遺跡範囲西端で個人住宅建築工事に伴う工事立会が行われ、時期不明の土坑が1基検出されている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の中央からやや西に寄った、台地平坦面の頂部付近に位置する。標高は952m位である。

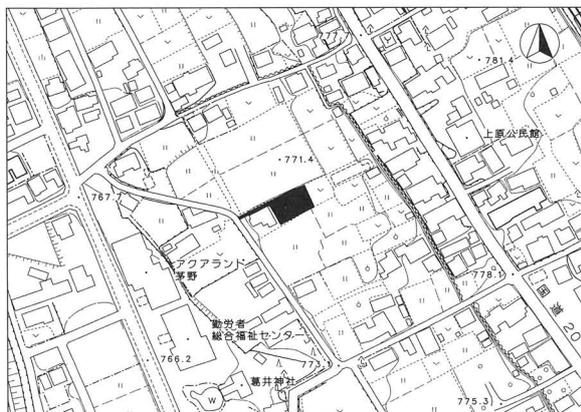
建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会ったところ、宅地造成の際に表土層(畑)および地山層の一部(黒色土～暗褐色土)が持ち出されており、現表土層の直下

に明黄褐色土(ローム層)またはにぶい黄褐色土(ローム漸移層)が露呈した。地山層までの深さが、計画された掘削深度(現況地盤以下70cm)に比べてかなり浅いことから、事業者の承諾を得て、地山層が露呈した面で行った掘削を止め、2箇所(1・2区)で底面と断面の精査を行った。台地の上方となる東側(1

区東側)では、宅地造成時の埋土層の下が明黄褐色土であったが、下方の西側(2区)ではにぶい黄褐色土が残存していた。精査の結果、遺構・遺物ともに確認されず、遺構の存在する可能性は極めて低いと考えられた。これにより当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

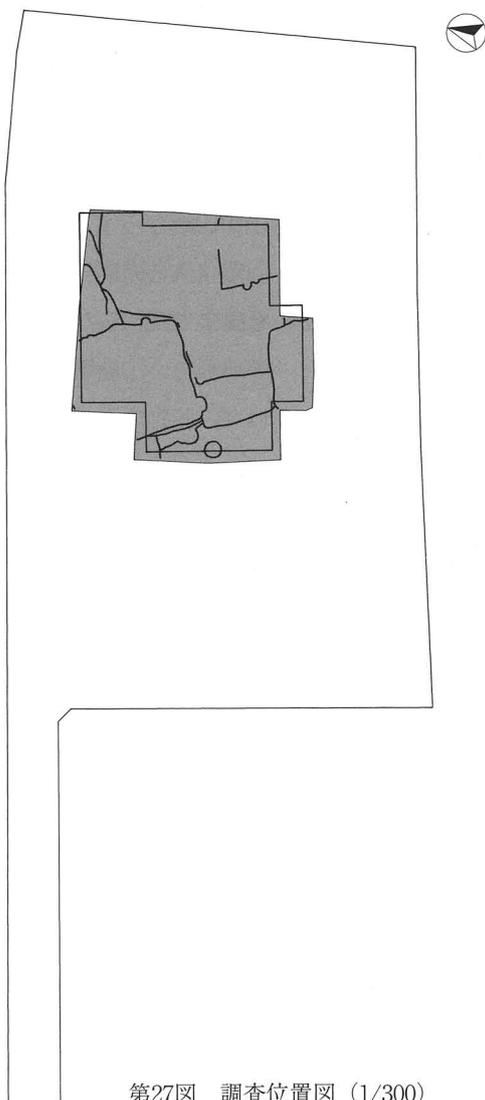
2. 上原城下町遺跡

(21-2 写真図版6~9)



第26図 調査地点位置図 (1/5,000)

- 遺跡番号 224
 所在地 茅野市ちの801-1ほか
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成21年11月24日~12月3日
 調査面積 82㎡
 遺構 古墳中期・後期、平安、時期不明住居址
 計12軒、土坑41基(住居址の柱穴含む)
 遺物 縄文・弥生・古墳・平安・中世土器、須恵器、灰釉陶器、近世陶器、石器、石製品未製品、鉄製品、黒曜石(22点、84.5g)

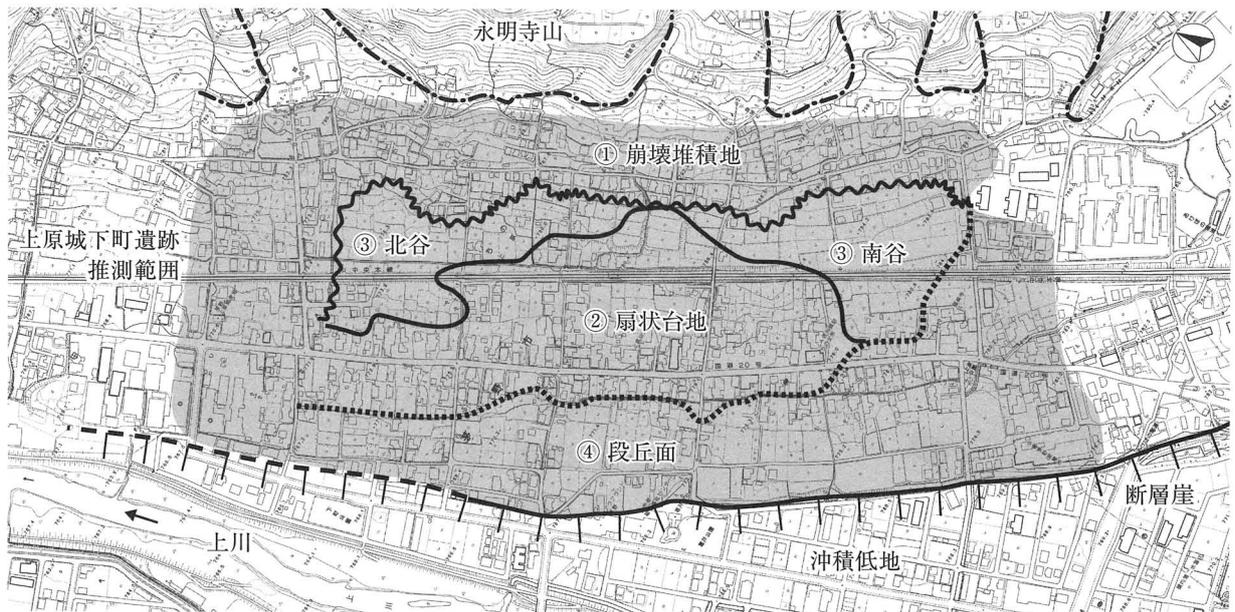


第27図 調査位置図 (1/300)

遺跡概要 永明寺山の一支脈、金比羅山(978m)に築かれた県史跡「諏訪氏城跡上原城」の直下で、西向きの緩斜面一帯に所在する。弥生時代から江戸時代の集落遺跡であるが、縄文時代の遺物の出土も報告されている。遺跡の範囲は約535,000㎡と広大である。東側の境界を永明寺山の急斜面が緩斜面に移行する地形変換点付近、西側を「諏訪構造帯茅野断層」により生じた断層崖、南・北側を城下町のなごりを留める小字・地割りなどに依拠した、東西約1,150m、南北約530mの長方形に囲まれた範囲が遺跡に指定されている。市内で最長の継続期間を有する遺跡であり、最大の面積を測る遺跡である。

平成2年度の試掘調査(実態把握のための詳細分布調査)を緒とし、農地の宅地化による造成工事や個人住宅・集合住宅建築工事などの各種開発事業に伴う発掘調査(試掘調査・本調査・工事立会)が100件以上行われている。中世城下町に関わる遺構ほか、弥生時代中期(後半)から平安時代に帰属する竪穴住居址、弥生時代から古墳時代の墓(周溝墓・古墳)などの発見が相次ぎ、城下町形成以前の様子も明らかになりつつある。

先に記したとおり、当遺跡ではこれまでに100件を



第28図 上原城下町遺跡の地形区分 (1/10,000)

超す発掘調査が行われ、様々な地点で土層の状態が記録されている。それによると、表土層直下の地山層（基盤層）は、①黒雲母花崗岩・花崗閃緑岩の大形角礫を多量に含む黒色～明黄褐色（砂質）土層、②礫を含まない明黄褐色（砂質）土層（再堆積のローム層？）、③粘土・シルト・砂からなる層、④安山岩系の円礫を多量に含む明黄褐色砂礫層に大別が可能であり、これら堆積要因の異なる土層から形成された複雑な地形であることが明らかとなった。それぞれの土層の分布範囲を現況平面図および地質図に重ね、微地形を推測した結果、①が永明寺山の山裾にみられる大小の崩壊堆積地形、②が永明寺山の山裾から国道20号線付近までの間に広がる崩壊堆積土による扇形を呈する台地、③が扇状の台地の東・西脇に入る永明寺山からの伏流水等による谷（湿地）、④が上川の沖積作用を受けた国道20号線付近から断層崖まで間に広がる扇形の台地より一段低い段丘に区分できる見通しを得た（第28図）。本書ではこれらの微地形を、①崩壊堆積地、②扇状台地、③谷（北側を北谷、南側を南谷）、④段丘面と便宜的に呼称し、各地点の報告を進めていくこととする。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の西側で、段丘面に位置する。標高は771m位である。

個人住宅建築工事が計画された当該地は、周辺における発掘調査および工事立会（『市内遺跡Ⅰ』16-1、『市内遺跡Ⅱ』18-2）の結果から、遺構の存在が確実視されていた場所である。基礎工事の前に表層改良による地盤補強工事が予定され、その掘削深度（現況地盤以下120cm）から遺構の破壊が予想されたため、当該事業に先立ち本調査を行うことにした。

重機を用いて掘り下げを進めていくと、表土層下に堆積する数面の耕作土層（上層が水田、下層が畑）から次々と土器片が出土し、濃密な遺構の存在を予感させた。これらの土層を取り除くと、古墳時代中期から平安時代の土器片、炭化物、焼土粒子・塊を含む黒色土が調査区全面に露呈した。複数の遺構が重複するものとみて、人力に切り替えて慎重な掘り下げ進めた結果、南西隅を除く調査区のほぼ全面に竪穴住居址と考えられる多数の遺構が確認された。遺構検出面が当該事業の掘削深度より20cmほど浅いため、遺構の保護措置を図る必要が生じた。事業者ならびに事業関係者と協議したところ、計画どおりに当該事業を進めたいとする意向が示されたため、記録保存による保護措置が確定した。

調査の結果、時期不明なものを含め、古墳時代中期から平安時代前半の竪穴住居址12軒、竪穴住居址に伴

う柱穴を含む土坑41基が検出された。

① 竪穴住居址

1号住居址 調査区南側から検出された。3・5号住居址と重複するが、新旧関係は明らかにできていない。また、本址の南西隅にある貼床された黒色土の掘り込みが、未確認の竪穴住居址の一部(北コーナー部)である可能性もあるが、ここでは本址の掘方の一部と考えておく。

平面形は方形で、一辺が4.0m前後と推測される。カマドが東壁にあるとみられるため、主軸方向はN-62°-Eを示す。北壁と東壁の一部が検出された。高さは5~10cmで、床との境が不明瞭である。壁下に周溝は確認されなかったが、明黄褐色砂質土塊を多量に含む黒褐色土が溝状にめぐり、その土を取り除いたところ、幅20~50cm、深さ5~10cmほどの凹凸のある窪みとなった。この窪みの検出面が硬化する床面に続くことから、住居の構築に伴う掘方と判断した。床は明黄褐色砂質土層に平らに設けられており、中央ほど硬化が著しい。柱穴とみられる5基の土坑の中で、本址に伴う可能性があるものは、貼床のない13・30号土坑である。カマドは検出されていないが、東壁下に遺存する粘土の大きな塊(カマドの袖?)がカマドの構築材と考えられるため、東壁に設けられていた可能性が高い。30号土坑から粘土塊にかけて、4個体の古墳時代後期の土師器(第77図2~5、2は黒色処理あり)が出土した。南端の土師器坏(第77図4)は粘土塊の上(床上10cm)にのっているが、その他は床面直上からの出土である。胴部以下が打ち欠かれた土師器甕(第77図5)が、床面直上に逆位で遺存する状態からみて、これらの土師器は東壁に沿って据えられたものと考えられる。覆土の下位に含まれ、その大半が床面直上から出土した、30個以上出土した10~20cm大の安山岩の礫も、据えられた土師器と何らかの関わりがあるのかもしれない。これらの礫は中央に集中する傾向がある。

カマド周辺から出土した土師器以外で器形が窺えるものに、床面直上出土の古墳時代後期の土師器坏(黒色処理あり?)がある(第77図1)。その他の遺物として、弥生時代中期後半土器(壺)、弥生土器(鉢または高坏で赤色塗彩あり)、古墳時代中期土師器?(高坏?)、古墳時代後期土師器(坏は黒色処理あり・甕)、須恵器(甕ほか)、黒曜石(1点、8.0g)の剥片がある。

床面直上出土の土師器の時期からみて、古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。

2号住居址 調査区中央から西側で検出された。5~8・11号住居址と重複し、6~8号住居址より新しい住居址と考えられる。

平面形は方形で、主軸長が4.6m、副軸長が5.0mである。主軸方向はN-54°-Eを示す。東壁・南壁・西壁の大半と北壁の一部が検出された。壁の高さは5~10cmで、床との境がわりと明瞭である。壁下に周溝は確認されていない。床は壁下をめぐる溝状の掘方(幅30~70cm、深さ5~15cmほど)と、その内側を数cm埋め戻してつくられている。明黄褐色砂質土層に平らに設けられ、主柱穴に囲まれた内側で硬化が著しい。床面に3基の土坑と、間仕切り状の溝址が1条検出された。土坑は位置・形状・深さから主柱穴と考えられ、住居の主軸に直交する楕円形の掘方が特徴である。「五平(状)柱」が据えられたとみられる掘方で、1号土坑(上端の長軸長80cm、短軸長50cm、下端の長軸長60cm、短軸長20cm)で顕著である。深さは40~45cmである。間仕切り状の溝址は、長さが50cm、幅が15~25cm、深さが10cmである。掘方の手前で途切れているが、さらに南側に延びていた可能性がある。カマドは粘土と礫を構築材とし、東壁に設けられている。袖に使用された安山岩と花崗岩の板状礫が1対残されており、焼土(火床)もきれいに取り除かれていた。この遺存状態と対照的なのは、カマドとその周辺から古墳時代後期の土師器(第77・78図)が多数出土した点である。完形・半完形の2個体の土師器甕(第77図17、第78図2)が、板状礫の間に正位に並べて置かれたほか、その周囲に複数個体の土師器甕の大形破片が散在する。また、カマドの南側(東コーナー)の床面直上

から、複数個体の土師器坏・甕が一括出土した。土師器坏(すべてに黒色処理あり)はすべて正位に置かれ、中には重ねられたものもある。カマドの破壊と土器を据え置く行為には、何らかの関係があるように思われる。なお、カマドの北側から出土した大型蛤刃石斧と20cm大の安山岩の円礫も、これらの行為に関わる遺物の可能性がある。

住居址の大半が調査されたこともあり、土師器を中心とする大量の遺物が出土した。土器類は前記したものの他に、縄文土器(後期?)、弥生時代中期後半土器(壺・甕)・後期土器(壺・甕)、弥生土器(高坏または鉢で赤色塗彩あり)、古墳時代前期土師器(S字甕)・中期土師器(坏・高坏・小形丸底壺?)・後期土師器(坏は黒色処理および赤色塗彩あり・高坏・甕)、須恵器(甗・坏・甕)がある。黒曜石(10点、20.3g)は剥片・碎片・石鏃・加工痕のある剥片である。その他、縁辺が丸く整えられ、表・裏面に研磨痕のある、直径4.5cm、厚さ5mmほどの石製品の未製品?が出土した。

カマドおよび床面直上出土の土師器の時期からみて、古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。

3号住居址 調査区中央から南側で検出された。1・2・4・5・10号住居址と重複し、4号住居址より古く、5・10号住居址より新しい住居址と考えられる。

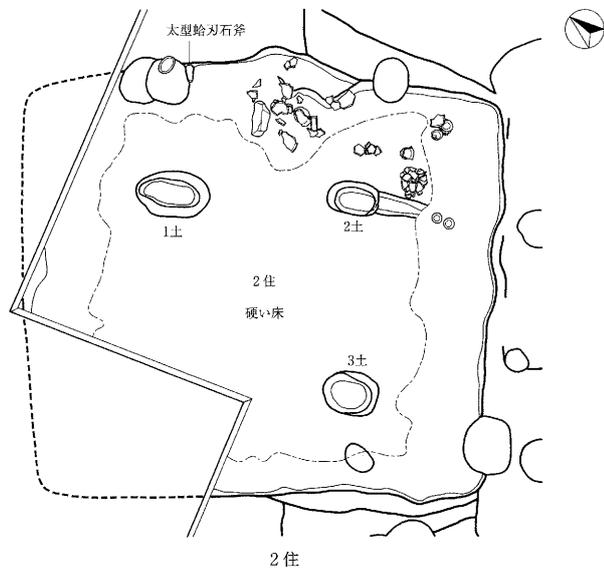
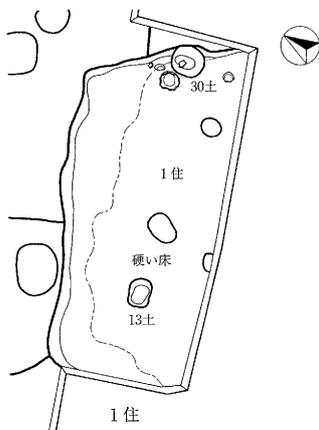
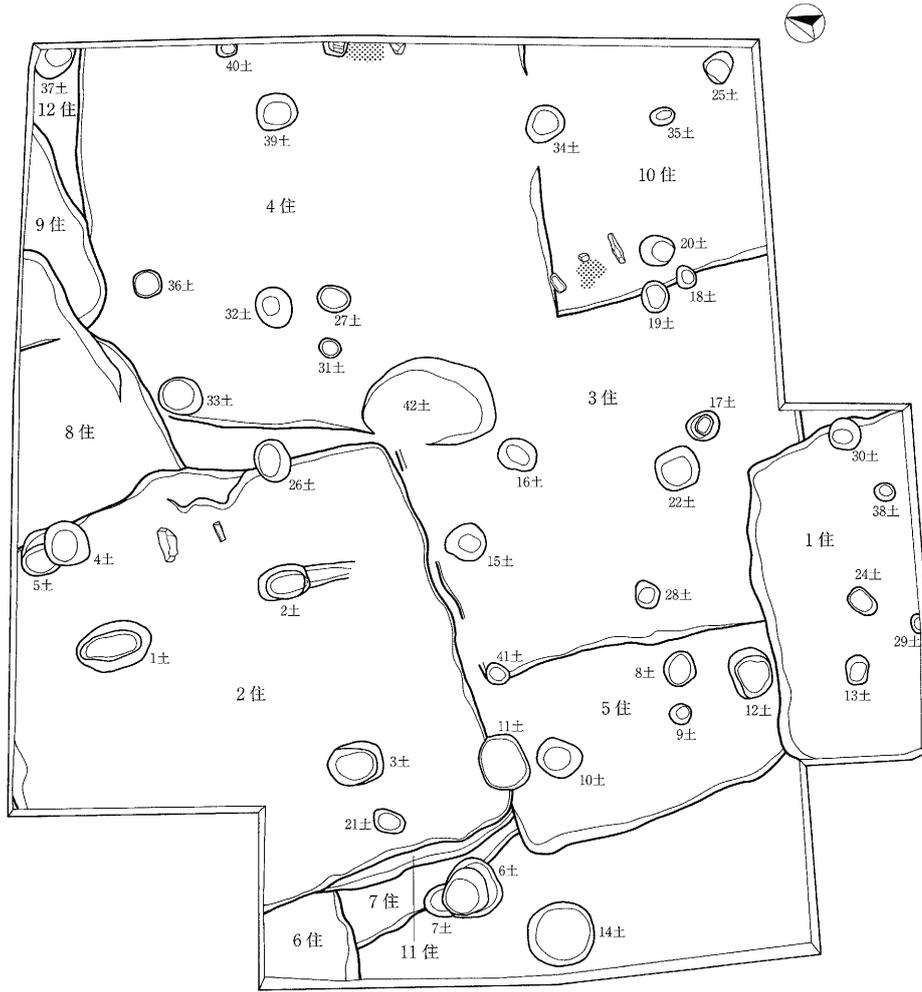
平面形は方形で、主軸長が4.3m、副軸長が4.1mと考えられる。主軸方向はN-60°-Eを示す。西壁と、北壁・南壁の一部が検出された。高さは5~15cmで、床との境が不明瞭である。壁下に周溝は確認されていない。床は、壁下をめぐる溝状の掘方(幅が不規則で、深さ5~10cmほど)を埋め戻してつくられている。床は明黄褐色砂質土層に設けられ、東から西へ緩やかに傾いている。全体的に硬く締りがあり、特に中央が硬い。床面および推測される住居範囲から、9基の柱穴と考えられる土坑が検出され、貼床のない16~20・41号土坑が本址に伴う可能性がある。カマドは粘土と礫を構築材とし、東壁に設けられている。袖に使用された安山岩の板状礫・柱状礫が1対残される状態は、2号住居址と同様である。しかし、本址の場合、支脚と焼土が遺存し、支脚の直上に脚部を欠く古墳時代後期の土師器高坏(第79図3)が伏せられ、その上を多数の安山岩の円礫ないし板状礫が覆うような状態で出土したほか、カマド前面(西側)の床面直上からも安山岩の礫が多数出土した。2号住居址と類似点・相違点があるものの、同じ目的のもとに行われた行為の所産と思われる。焼土は50×50cmの不整形を呈し、その東脇に支脚となる安山岩の柱状礫が正位に埋置される。西コーナーと南コーナーの床上に、焼土塊を大量に含む厚さ5cm前後の黒褐色土が確認された。

土師器(第79図1~4)を中心とする遺物が出土した。土器類は前記した土師器高坏の他に、縄文土器(中期?)、弥生時代後期土器(甕)・弥生土器(高坏または鉢で赤色塗彩あり)、古墳時代前期土師器(S字甕)・中期土師器(坏・高坏)・後期土師器(坏は黒色処理および赤色塗彩あり・高坏・甕)、須恵器がある。その他、黒曜石(4点、11.7g)の剥片・加工痕?のある石片が出土した。

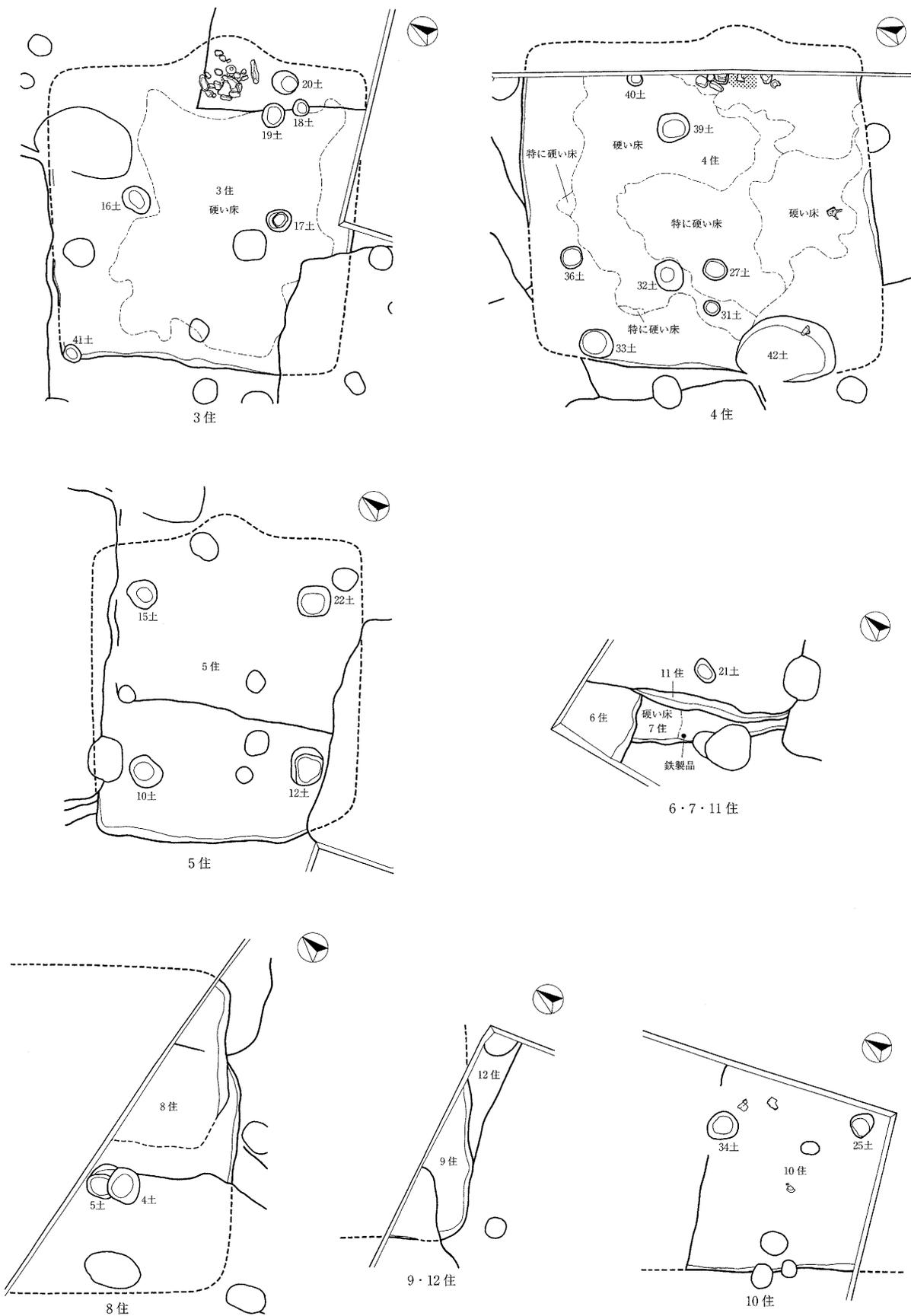
カマドおよび一括出土した土師器の時期からみて、古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。

4号住居址 調査区東側で検出された。3・8~10・12号住居址と重複し、その中で最も新しい住居址と考えられる。

平面形は方形で、主軸長が推測4.5m、副軸長が4.8mである。主軸方向はN-77°-Eを示す。北壁・南壁・西壁の一部が検出された。高さは3~10cmで、床との境が不明瞭である。壁下に周溝は確認されていない。床は壁下をめぐる溝状の掘方(幅50~90cm、深さ5cmほど)と、その内側を数cm埋め戻してつくられている。明黄褐色砂質土層に平らに設けられており、中央ほど硬化が著しい。床面から貼床のない8基の土坑が検出された。42号土坑は貯蔵穴とみられる140×90cmの楕円形の穴で、その位置から本址に伴うものと思われる。その他は筒状の小穴であり、柱穴と考えられる。カマドは粘土と礫を構築材とし、東壁に設けられ



第29図 遺構平面図 (1/80)



第30図 遺構平面図 (1/80)

ている。北側が調査区域外にあり、全体が調査できていないが、袖に対し焼土が外側に出ている点から、焚口側の袖が破壊されている可能性がある。袖に接して遺存する安山岩の数個の礫、正位で出土した須恵器坏（第79図5）はカマドの破壊に際して据えられたものかもしれない。南北40cm、東西20cm以上の範囲がよく焼けており、焼土の5cm上から土師器甕の大形破片が出土した。

住居址のほぼ全体が調査されたが、覆土が薄いためか、遺物の出土量は少ない。土器類には弥生土器（甕）、古墳時代中期土師器（高坏）、後期土師器（坏・甕）、平安時代土師器（甕）、平安時代須恵器（坏・甕・横瓶・壺）があり、土師器甕（第79図7）は床直上、須恵器壺（第79図6）は42号土坑の検出面、須恵器横瓶（第79図8）は住居址南側の床上10cmから出土した。その他、緑色岩製の打製石斧、黒曜石（4点、20.5g）の石核・剥片が出土した。

カマドおよび床面から出土した土師器・須恵器の時期からみて、平安時代前半の竪穴住居址である。

5号住居址 調査区中央のやや南側から検出された。1～3・7・11号住居址と重複し、3号住居址より古く、7号住居址より新しい住居址と考えられる。

カマドおよび床面の約1/2が3号住居址に削平されているが、壁と主柱穴の位置関係から、住居プランの大略を窺うことができる。平面形は方形で、主軸長が4.2m、副軸長が3.7m、主軸方向がN-54°-Eと推測される。西壁と北壁の一部が検出された。高さは5～10cmで、床との境が不明瞭である。壁下に周溝は確認されていない。床は、壁下をめぐる溝状の掘方（幅50～100cm、深さ5～10cmほど）と、その内側を数cm埋め戻してつくられている。明黄褐色砂質土層に平らに設けられており、中央から南側が硬化する。床面および推測される住居範囲から、10基余の柱穴と考えられる土坑が検出された。この中で、貼床のない10・12号土坑と、3号住居址の床面で確認された15・22号土坑の4箇所が主柱穴と考えられる。

調査範囲が住居址の約1/2であり、出土した遺物は少ない。土器類には、縄文土器（前期の繊維を含む土器）、弥生土器（高坏で赤色塗彩あり）、古墳時代中期土師器？（坏・高坏・壺）・後期土師器（坏・甕）がある。

時期決定に耐えうる遺物を欠いているが、最も新しい土師器が古墳時代後期（第80図1、黒色処理の可能性あり）であることから、該期の竪穴住居址と考えておきたい。

6号住居址 調査区西端から検出された。2・7・11号住居址と重複し、2号住居址より古く、7号住居址より新しい住居址と考えられる。

南壁と床と考えられる平坦面の一部が検出されたに過ぎないが、一定規模の大きさが考えられるため、竪穴住居址と認定した。平面形は方形と考えられるが、主軸長・副軸長・主軸方向は推測不可能である。壁の高さは5cm前後で、床との境が不明瞭である。明黄褐色砂質土層に設けられた床に、硬化した面は認められない。床下約5cmに掘方とみられる凹凸のある面が検出された。

調査面積が狭いため、出土した遺物は極めて少ない。古墳時代中期土師器（高坏・甕）と思われる数点の土師器のほか、古墳時代の土師器の破片が10数点出土した。

重複する住居址との新旧関係から、古墳時代中期または後期に属する竪穴住居址と考えられる。

7号住居址 調査区西側から検出された。2・5・6・11号住居址、6・7号土坑などと重複し、どれよりも古い住居址と考えられる。

西壁と床の一部が検出されたに過ぎないが、床面の北側に硬化面が確認され、一定規模の大きさが考えられることから、竪穴住居址と認定した。平面形は方形と考えられるが、主軸長・副軸長・主軸方向は推測不可能である。壁の高さは10～15cmで、床との境がわりと明瞭である。明黄褐色砂質土層に設けられた床は、数cmの土を埋め戻して平らにつくられている。

調査面積のわりに、出土遺物数に恵まれている。弥生時代後期土器？（甕）、古墳時代中期とみられる土師器（坏・高坏・小形丸底壺：第80図2～5）のほか、壁際の床上7cmの位置から、親指ほどの大きさの板状鉄製品7～8枚が塊状となり出土した。

古墳時代中期と考えられる土師器が揃っているため、該期の竪穴住居址と考えられる。

8号住居址 調査区北端から検出された。2・4・9号住居址などと重複し、2・4号住居址より古い住居址と考えられる。

南壁と床の一部が検出されたに過ぎないが、一定規模の大きさが考えられるため、竪穴住居址と認定した。なお、床に5cmほどの段差がある上、壁に僅かな括れもみられるが、4号土坑または5号土坑が本址の主柱穴と考えられることから、1軒の竪穴住居址と判断した。平面形は方形と考えられるが、主軸長・副軸長・主軸方向などは推測不可能である。壁の高さは10cm前後で、床との境が不明瞭である。床は明黄褐色砂質土層に設けられている。北側へ緩やかに傾いた凹凸のある面で、硬化面は認められない。

9号住居址との新旧関係が分からないまま遺物を取り上げてしまい、そのために両住居址の遺物が混在している（第80図6・7、6は内面黒色処理あり）。これらの土器類には、弥生時代中期後半土器（甕）、古墳時代中期土師器（坏・高坏・小形丸底壺）、後期土師器（坏は黒色処理および赤色塗彩あり・甕）、古墳須恵器（蓋）、須恵器（甕）がある。その他、器種不明石器がある。

出土した土師器の時期からみて、古墳時代中期または後期の竪穴住居址と考えられる。

9号住居址 調査区北端から検出された。4・8・12号住居址と重複し、4号住居址より古く、12号住居址より新しい住居址と考えられる。

南壁・西壁と床の一部が検出されたに過ぎないが、一定規模の大きさが考えられるため、竪穴住居址と認定した。平面形は方形と考えられるが、主軸長・副軸長・主軸方向は推測不可能である。壁の高さは15cm前後で、床（壁下の掘方底面？）との境がわりと明瞭である。床は明黄褐色砂質土層に設けられている。凹凸のある面で、硬化面は認められない。

出土遺物については、8号住居址で記したとおり、本址に伴う遺物が特定できない状態にある。

8号住居址と同様に、古墳時代中期または後期の竪穴住居址と考えられる。

10号住居址 調査区東端から検出された。3・4号住居址と重複し、両者より古い住居址と考えられる。

西壁と床の一部、主柱穴の可能性がある2基の土坑が検出されたに過ぎない。平面形は方形と考えられるが、主軸長・副軸長・主軸方向などは推測不可能である。壁の高さは5cm前後で、床との境がわりと明瞭である。床は明黄褐色砂質土層に設けられた平らな面で、壁際を除く範囲が硬化する。床面から4基の柱穴とみられる土坑が検出された。貼床のない25号土坑と34号土坑が本址に伴う柱穴とみられ、壁との位置関係から主柱穴の可能性がある。

床面に近い位置で確認されたためか、出土した遺物は少ない。硬化した床の直上から、古墳時代後期土師器坏（黒色処理あり？）・甕（第80図8・9）が出土したほか、弥生時代中期後半土器（甕）、古墳時代前期土師器（S字甕）、中期土師器？（小形丸底壺）、後期土師器（坏は黒色処理および赤色塗彩あり・高坏・甕）がある。その他、黒曜石（1点、5.5g）の碎片、器種不明石器が出土した。

床面直上から出土した土師器の時期からみて、古墳時代後期の竪穴住居址と考えられる。

11号住居址 調査区西側から検出された。2・5・6・7号住居址などと重複する。

西壁の一部と、床の可能性がある平坦面のごく一部が検出されたに過ぎないが、竪穴住居址の密集地点から検出されたこと、一定規模の大きさが考えられることから、竪穴住居址と認定した。平面形・主軸長・副

軸長・主軸方向などの住居プランは推測不可能である。壁の高さは10cm前後で、床との境がわりと明瞭である。床は明黄褐色砂質土層に設けられている。壁の直下であるためか、硬化面は認められない。

調査面積が極めて狭いためか、遺物は出土しなかった。

出土遺物がなく、時期は不明である。

12号住居址 調査区西側から検出された。4・9号住居址と重複し、両者より古い住居址と考えられる。

竪穴住居址の根拠となる壁が検出されていないが、黒褐色土層と明黄褐色砂質土層の境付近に設けられた床の存在から竪穴住居址と認定した。平面形・主軸長・副軸長・主軸方向などの住居プランは推測不可能である。床は平らで、硬化する。この硬化面が37号土坑を覆っている。

調査面積が極めて狭く、覆土もほとんどないことから、遺物は出土しなかった。

出土遺物がなく、時期は不明である。

②土坑

6号土坑と**7号土坑**は形状と規模から柱穴と思われる。新旧関係は明らかにできなかったが、ともに7号住居址より新しい土坑と考えられる。古墳時代中期土師器（高坏）、後期土師器？（甕）の破片が出土した。

14号土坑は深さ19cm、断面形が皿状である。半截したが、柱痕は確認されなかった。黒曜石（1点、2.6g）の破片が出土した。

遺構に伴う遺物の他に、表土層および攪乱層から土器類・黒曜石・鉄製品が出土した。主体となる土器類は古墳時代の中期と後期の土師器で、弥生時代の土器、中世・近世の土器・陶器は数えるほどしかない。弥生時代中期後半（甕）、中期土師器（坏・高坏・小形丸底壺）、後期土師器（坏は黒色処理あり・高坏・甕）、平安土師器（甲斐型坏）、中世土器（カワラケ・内耳土器）、平安須恵器（坏）、平安陶器（灰釉陶器）、近世陶器がある。黒曜石（1点、15.9g）は石核である。その他、4mm角の棒状の鉄製品（釘？）が出土した。

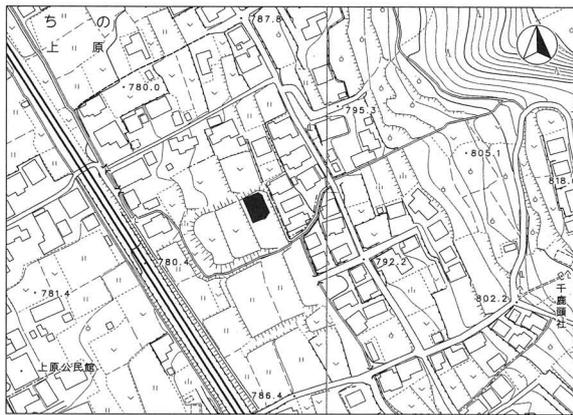
まとめ これまで当遺跡において、調査および確認された50軒余りの古代竪穴住居址（古墳時代後期・平安時代）は、その大半が今回の事業計画地より一段地形の高い扇状台地から集中して発見されている。規模の大きな発掘調査・試掘調査（新上原公民館建設関連工事・集合住宅建築工事など）が扇状台地上で行われたことが影響している可能性があるものの、発見された軒数や同じ地点で激しく切り合う状態から、古代集落の中心は扇状台地にあるとの見方がなされてきた。これに対し、段丘面では発掘面積の狭小な小規模調査が中心に行われてきたために、しばらく古代竪穴住居址の発見に恵まれない状況が続いていた。ところが、近年の発掘調査によって段丘面から古代竪穴住居址の検出が相次いで報告されるようになり、地形的な観点を含め、濃密な遺構の存在が指摘されるまでになった。つまり、扇状台地とその西に広がる段丘面を含めた「三角地帯」とも呼べる場所に、古代集落の中心があったと考えられるようになったのである。

その裏付けとなる資料が得られた点が調査における最大の成果であるが、古墳時代後期の竪穴住居址が扇状台地から段丘面に重複関係をもって濃密に分布するのに対し、平安時代の竪穴住居址は重複関係をもたずに散在傾向にあるとする、時期毎の集落の動態が窺えた点も成果の一つであろう。

以上の古代集落に関わる新たな知見は、集落構造の解明を進める上で良好な資料となるものであるが、これらの集落を支えていた生産域の位置・規模を考えさせるきっかけになるものでもある。特に古墳時代後期の竪穴住居址のあり方から、遺跡に指定されていない段丘面下に広がる沖積低地一帯に、該期の生産域（水田）が存在する可能性を指摘することもできよう。段丘面末端（断層崖）を遺跡の西側境界とする遺跡範囲の見直しも視野に入れながら、今後、段丘面の調査を進める必要があり、その発掘結果によっては沖積低地の地下の状況を確認する必要が生じるかもしれない。

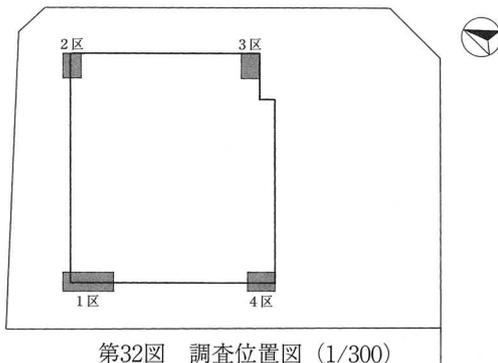
3. 上原城下町遺跡

(21-3 写真図版9)

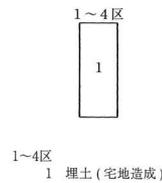


第31図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 224
 所在地 茅野市ちの1220-16
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年3月18日
 調査面積 4㎡
 遺構 なし
 遺物 なし



第32図 調査位置図 (1/300)



第33図 土層断面図 (1/40)

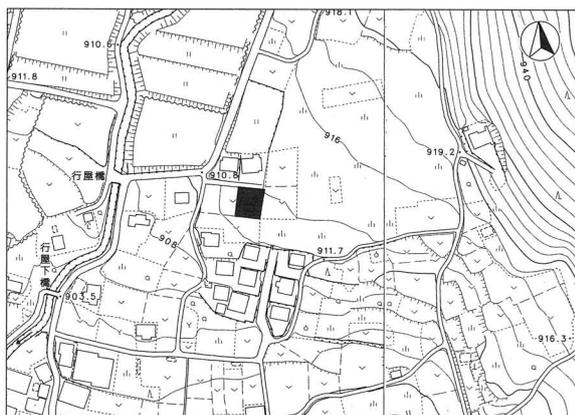
調査概要 調査地点は遺跡範囲の中央から東側に寄った場所で、扇状台地の扇頂部付近に位置する。標高は787m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、計画深度（現況地盤以下50cm）まで掘り下げられた4箇所
 で土層の状態を確認した。宅地造成時の埋土層内で掘削が止まるため、当該事業は遺跡に影響を及ぼすもの
 でないと判断した。

平成21～22年度

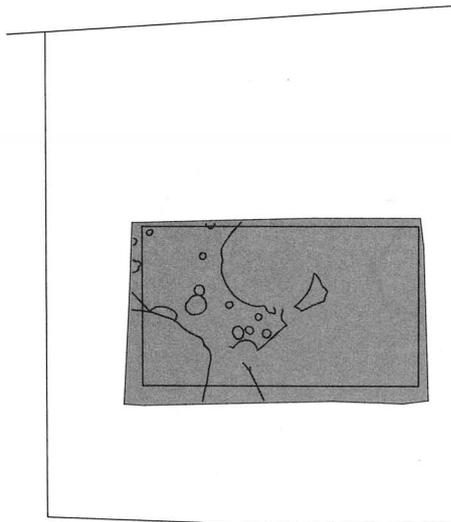
1. 駒形遺跡

(21-22-1 写真図版10)



第34図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 34
 所在地 茅野市米沢5073ほか
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年3月12日～4月13日
 調査面積 87㎡
 遺構 縄文前期・中期竪穴住居址、縄文土坑
 遺物 縄文土器・石器・黒曜石 整理箱4箱



第35図 調査位置図 (1/300)



遺跡概要 霧ヶ峰山塊の高層湿原「池のくるみ」を源とする桧沢川は、小河川ながら年間を通して豊富な水量がみられ、南麓の平坦部に出るあたりに扇状地状台地、扇状地、湿地を形成する。当遺跡は桧沢川左岸のこれらの微地形に所在する。縄文時代早期から後期に営まれた大規模な集落遺跡であるが、中世の遺構・遺物のほか、旧石器・平安時代の遺物も報告されている。

本州最大の黒曜石原産地（和田峠・霧ヶ峰）を北に負う地理的環境に加え、黒曜石製の石鏃が大量に採集されるとする遺跡の性格から、古くより黒曜石製の石器生産や黒曜石の搬出拠点となる縄文遺跡と推測されていた。平成6・8年度に県教育委員会が行った試掘調査（実態把握のための詳細分布調査）の結果、「黒曜石製石器の製作及び交易に深く関わった遺跡である

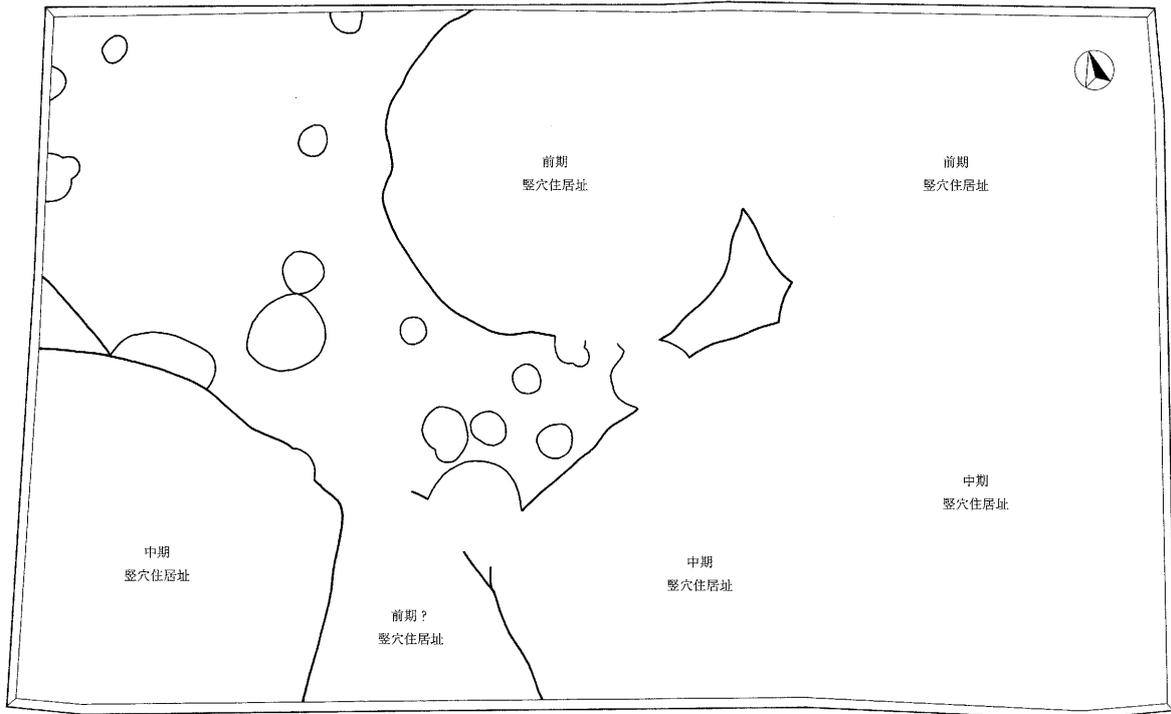
ことが確認」され、この調査成果によって「黒曜石の集積、製作、搬出に関与していた集落跡と推定され、当時の石器製作技術や交易の実態を知る上で重要」との評価を受け、平成10年に扇状地状台地の約27,000㎡が国史跡に指定された。その後、史跡から一段下がった扇状地と湿地を、東西に横断する県道建設工事が計画され、これに伴い県埋蔵文化財センターによる発掘調査が平成15・16年に行われた。その結果、扇状地に縄文時代前期初頭から前葉の竪穴住居址・方形柱穴列の濃密な分布が確認された。

調査概要 調査地点は遺跡範囲のほぼ中央、史跡に指定された扇状地状台地の末端付近で、南西に向かって緩やかに傾斜する場所に位置する。標高は899m位である。

当該事業の計画地は史跡範囲の西側隣接地であるが、扇状地状台地を対象に行われた平成6・8年度の試掘結果、および当該地の北西約20mの地点で行われた平成18年度の市下水道管敷設工事に伴う発掘結果（貯蔵穴とみられる土坑1基を検出）をみる限り、集落（竪穴住居址群）西側の外縁部をかすめる程度と考えられる場所であり、濃密な遺構の存在は予測できなかった。また、事業計画地に最も近い地点（Fトレンチ）で行われた平成6・8年度の試掘結果によると、40cm平均の耕作土層（畑）の下に厚みのある黒褐色土層（遺物包含層？）があり、当該事業の基礎工事の工法（建物の外周を筋掘り）と計画された掘削深度（現況地盤以下60cm）から考えて、遺構を乱すことなく当該事業が行われるものと判断された。これらの点から市教育委員会では工事立会の保護措置をとることにした。

3月12日から基礎工事が開始され、これに立ち会ったところ、40cm前後の埋土層・耕作土層の直下に縄文時代前期から中期の土器片、黒曜石の剥・碎片などを包含する厚みのある黒褐色土層が露呈し、濃密な遺構の存在が予想された。この黒褐色土層面を建物の支持層とする場合、計画された基礎工事の工法では十分な地耐力が得られないとの見解が施工業者から示され、建物範囲全面を「総掘り」する基礎工事に変更される事態となった。このため、表土層まで剥ぎ終えた状態で、いったん調査を中断し、県教育委員会に状況を報告するとともに、県教育委員会を交えた遺跡保護に係る現地協議を行うことにした。

現地協議は3月16日に行われた。今後、当遺跡では遺跡を取り巻く諸環境を取り込んだ史跡の整備・活用事業を進めていく計画があり、現況の維持に配慮願いたいとの旨を伝えた。事業者側から計画どおりに事業を進めたいとする意向が示され、当該地への建物建築は避けられない状況となったが、埋蔵文化財（遺構）



第36図 遺構平面図 (1/80)

に影響を及ぼさない範囲での基礎工事の施工が了解されたことは幸いであった。また、調査に要する十分な期間も確保されるなど、事業者から最大限の協力が得られることとなり、翌日、調査が再開された。

東西約12m、南北約7mの調査範囲に、1mグリッドを任意に設定して、人力による慎重な掘り下げを進めていった。黒褐色土層内から整理箱4箱分の土器片・黒曜石片などが出土したが、その層内で遺構を認識することは不可能であった。そのため、これらの出土遺物は遺物包含層に含まれるものと判断した。遺構を乱さない範囲で基礎工事の掘削底面を設けることで合意した先の保護協議に基づいて、事業者および事業関係者と掘削底面の設定に係る現地協議を行った。結果的に、遺構の平面プランがおぼろげに見え始めた面が掘削底面（調査終了面）となった。その面に、竪穴住居址と考えられる黒褐色土の落ち込みが10箇所ほど確認されたが、住居址の平面形状と帰属時期を知り得たものは、数軒に過ぎない。土坑は20基余りが確認された。形状・規模からみて、大半が柱穴と推測される。

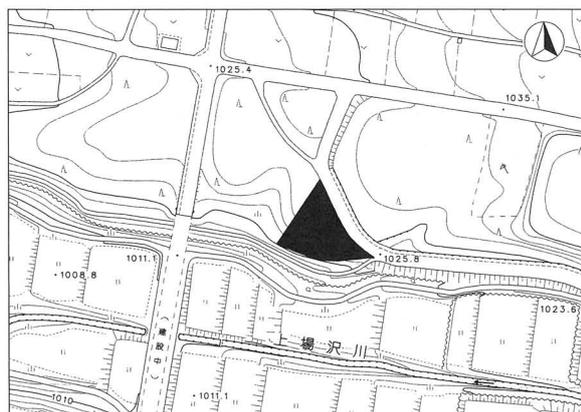
調査終了面には保護用のブルーシートが敷かれ、その上に厚さ30～40cmの碎石（保護層）が入れられている。基礎工事はこの碎石敷きされた面の上で行われている。

まとめ 当該事業に係る遺跡の保護措置は、前記したとおり、遺跡（遺構）の保存を前提とする、いわば確認調査に近いものとなった。そのために、平面形状・性格・時期などを明らかにできた遺構はほとんどなかったが、史跡範囲の西側隣接地に縄文時代前期から中期とみられる竪穴住居址らしき多数の遺構や、これに時期が並行すると思われる柱穴状の土坑などが確認され、扇状地状台地上の縄文集落が史跡範囲を越えて形成されていたという新たな知見が得られた点が、調査における大きな成果である。一方で、拡大傾向にある縄文集落の範囲を明らかにする必要が生じるなど、大きな課題が残された調査となった。具体的にいえば、今回の調査区の西・南側隣接地（畑）に住居域（竪穴住居址群）が延びる蓋然性が高まったことである。実態を把握する確認調査を早急に行い、その結果に即した適切な保護措置を早急に図る必要があると考える。

平成22年度

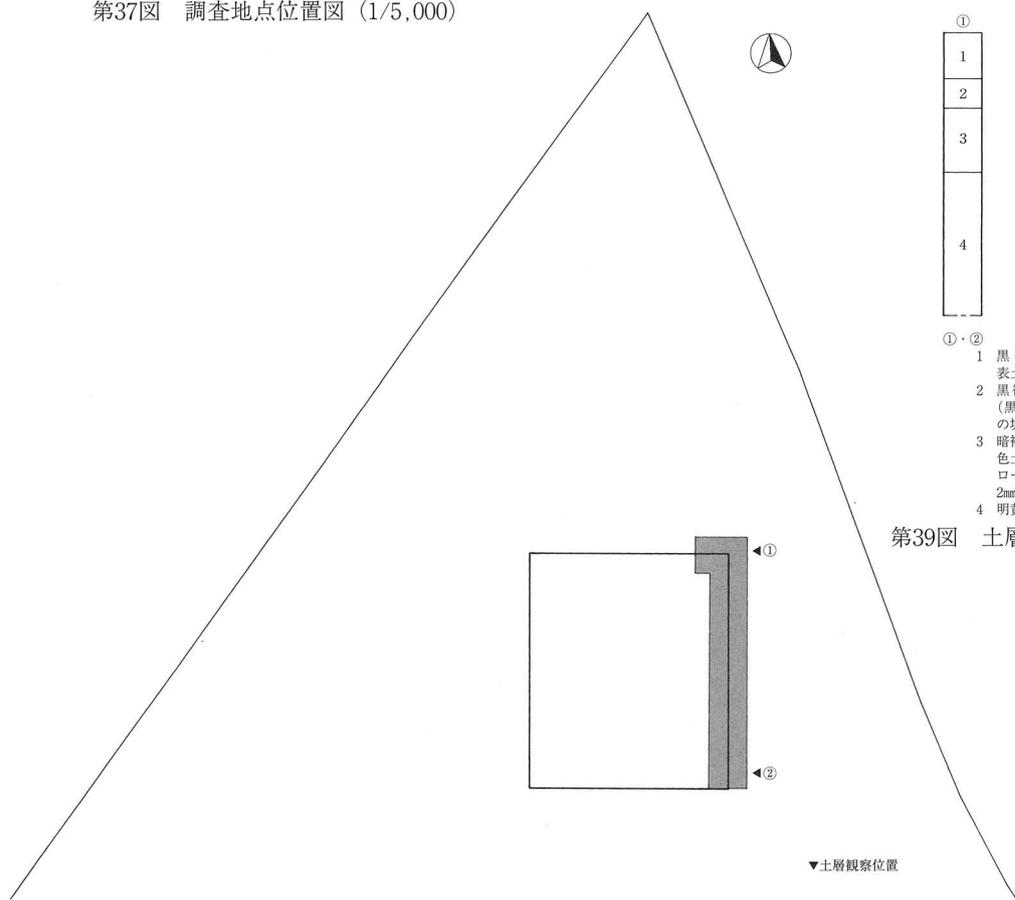
1. 新水掛A遺跡

(22-1 写真図版10)



第37図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 89
 所在地 茅野市豊平787
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年4月20日
 調査面積 16m²
 遺構 なし
 遺物 なし



第38図 調査位置図 (1/300)

第39図 土層断面図 (1/40)

遺跡概要 ハヶ岳西麓の東西に延びる台地に所在する。北東方向約200mの谷を隔てた北側の台地に、特別史跡の尖石遺跡が所在する。保存状態の極めてよい縄文時代の集落遺跡であるが、昭和5・12・13・52年の小発掘によって、遺跡の規模・性格が推測されている。

昭和12年と13年の小発掘は、東西に約20m離れた地点を対象に行われた。この時、縄文時代中期中葉の土偶が3点出土し、遺跡の重要性が認識されることとなった。昭和52年には、台地の中央を東西に通じる農道

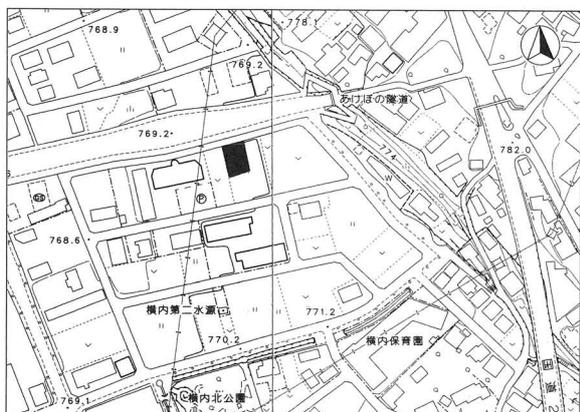
の拡幅に伴って、遺跡のほぼ中央部が発掘調査された。幅2～3m、長さ12m、面積にして30㎡の小発掘であったが、縄文時代中期中葉と考えられる小竪穴群と屋外埋甕、前期・中期・後期の遺物が検出された。小竪穴群と屋外埋甕は、集落の中央につくられた中期中葉期の「特殊遺構」と考えられており、これを中心に環状ないし馬蹄形の集落が形成されたと推測されている。また、中期中葉期の集落と異なる地点に中期後葉期の集落の存在が推測されており、両集落の広がりから尖石遺跡に匹敵する規模・内容をもつ縄文集落と考えられている。平成11年12月には、台地の南側緩斜面から時期不明の敷石住居址が不時発見されている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の西端で、台地の南側斜面に位置する。標高は1,030m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会ったところ、計画された掘削深度（現況地盤以下90～150cm）に達する前に地山層が露呈した。そこで、事業者の承諾を得て、土層の状態と遺構・遺物の存否を確認するための精査を行った。基本的な土層は、黒色土から明黄褐色土（ローム層）に漸移する状態を示している。事業計画地の中で最も傾斜の緩い箇所（基礎東辺）において、露呈した明黄褐色土層までの各層を精査したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。これにより当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

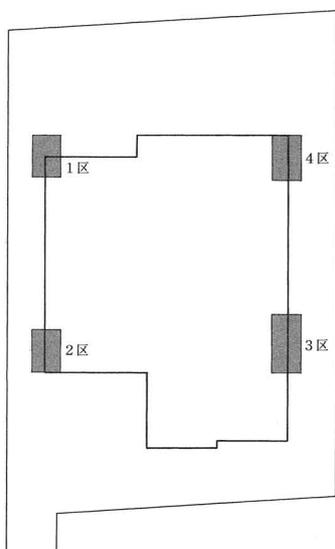
2. 家下遺跡

(22-2 写真図版10・11)



第40図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 110
 所在地 茅野市ちの285-3
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年9月1日
 調査面積 8㎡
 遺構 なし
 遺物 なし



第41図 調査位置図 (1/300)



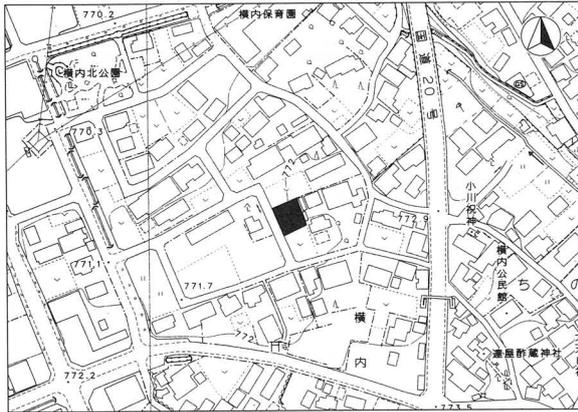
第42図 土層断面図 (1/40)

調査概要 調査地点は遺跡範囲の北端で、微高地に接する谷の中に位置する。標高は770m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、計画深度（現況地盤以下40～50cm）まで掘り下げられた4箇所です土層の状態を確認した。耕作土層（水田）下にある宅地造成時の埋土層内で掘削が止まるため、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

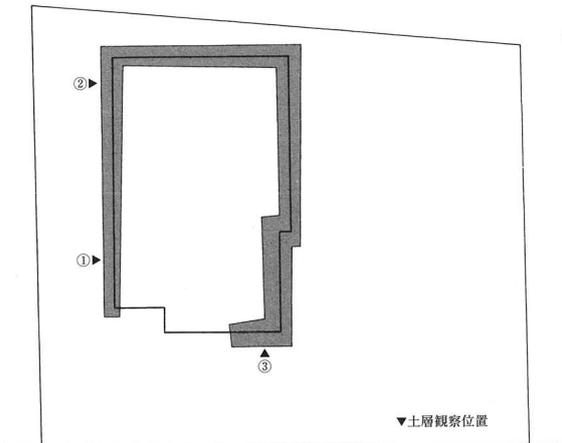
3. 家下遺跡

(22-3 写真図版11)

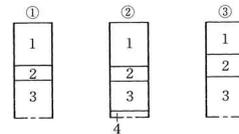


第43図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 110
 所在地 茅野市ちの2591-4
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年10月14日
 調査面積 28㎡
 遺構 なし
 遺物 弥生・古墳・中世土器65点、須恵器5点、
 近世陶器2点



第44図 調査位置図 (1/300)



- ①~③
- 1 黒色土7.5YR2/1 耕作土 (水田)
 - 2 黒褐色土10YR3/2 硬い 1層の客土?
 - 3 黒色土5YR1.7/1
炭化物2mm~1cm多 近代陶器・石灰を含む
 - 4 褐色~にぶい黄褐色の砂 (質土)、または黄褐色~明黄褐色の砂利

第45図 土層断面図 (1/40)

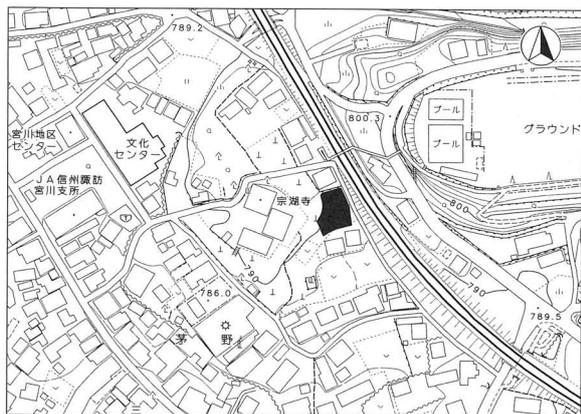
調査概要 調査地点は遺跡範囲の南端で、南東から北西に延びる微高地の頂部付近、または南西側緩斜面と考えられる場所に位置する。標高は772m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会ったところ、弥生時代以降の遺物が多数確認されるとともに、計画深度(現況地盤以下50cm)まで掘り下げられた底面の一部に地山層が露呈した。このため、事業者の承諾を得て、土層の状態と遺構・遺物の存否を確認するための精査を行った。基本的な土層は、表土層(畑)の下に、耕作土層またはこれに関わる土層が数面あり、その下が地山層の褐色~にぶい黄褐色砂質土、または黄褐色~明黄褐色砂である。精査の結果、出土したすべての遺物は耕作土層とそれに関連する土層に含まれること、露呈した地山面(調査面積の約2割)に遺構が存在しないことが確認された。これにより当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

出土した遺物には、弥生時代後期土器(壺で赤色塗彩あり・鉢または高坏で赤色塗彩あり・甕)、古墳時代前期?土師器(甕)・古墳時代後期土師器(甕)・古墳時代(高坏)、中世土器(カワラケ?・内耳土器)、須恵器(甕・壺・坏)、近世陶器(甕・碗)の破片がある。

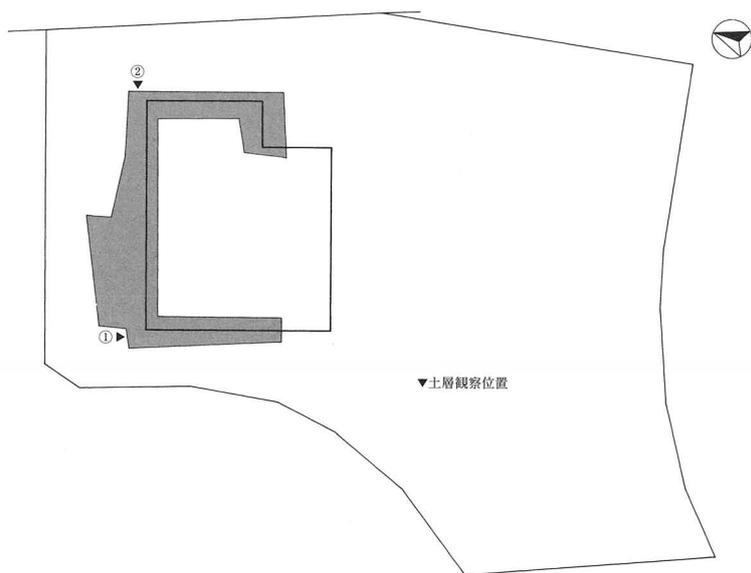
4. 四ツ塚古墳群

(22-4 写真図版11・12)

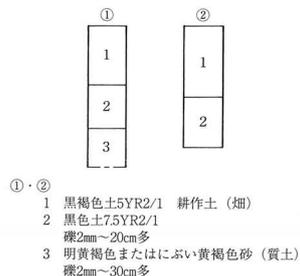


第46図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 142
 所在地 茅野市宮川4704-2
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年10月20日
 調査面積 32㎡
 遺構 なし
 遺物 なし



第47図 調査位置図 (1/300)



第48図 土層断面図 (1/40)

遺跡概要 八ヶ岳西麓に東西に延びる「長峰」と呼ばれる台地最末端の直下、上川と宮川によって形成された沖積地を臨む高台に所在する。A～Dの4つの古墳からなることが知られ、当市における古墳群の分類では、台地末端付近にある他の古墳とともに「長峰台地古墳群」に群別されている。『諏訪史』第一巻(1924)によると、すべての古墳は地元区民の手によって明治24年に発掘調査されており、古墳の構造や出土した遺物が詳述されている。地元氏の祝神と、地元区民の奉斎する神社の位置がそれぞれの古墳とされるが、その存在を窺わせる痕跡は認められない。

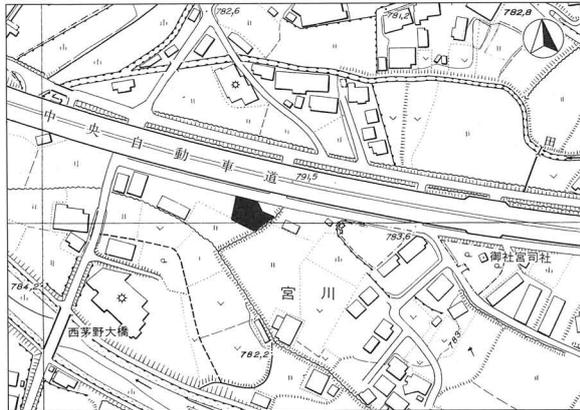
調査概要 調査地点は遺跡範囲の南端で、南側斜面に位置する。標高は790m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会ったところ、計画深度(現況地盤以下65～75cm)に達する前に地山層が露呈した。事業者には慎重な掘り下げを求めるとともに、承諾を得て、掘削された断面および底面の精査を行った。基本的な土層は、黒色土から明黄褐色砂(質土)・にぶい黄褐色砂(質土)に漸移する状態を示し、30cm大までの安山岩の円礫を多数含んでいる。遺跡が立地する高台は、「諏訪構造茅野断層」の活動で落ち込んだ長峰状台地の最末端とされているため、八ヶ岳西麓の台地に普遍的な明黄褐色土(ローム層)の堆積を予想していたが、高台の北を流れる上川の供給による安山岩の礫や砂の堆積が確認された。地表面から1mの深さに満たない調査であり、長峰状台地の最末端であるのか否かは明らかにできていない

が、上川の沖積作用によって形成された地形であることは間違いないといえよう。露呈した地山層を精査したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。これにより当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

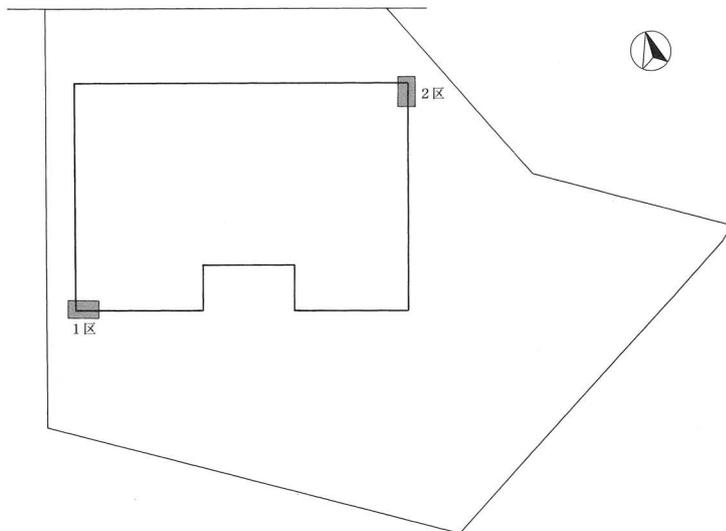
5. 御社宮司遺跡

(22-5 写真図版12)

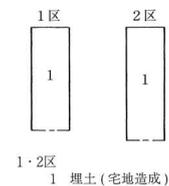


第49図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 143
 所在地 茅野市宮川5816-1
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年9月16日
 調査面積 2㎡
 遺構 なし
 遺物 なし



第50図 調査位置図 (1/300)



第51図 土層断面図 (1/40)

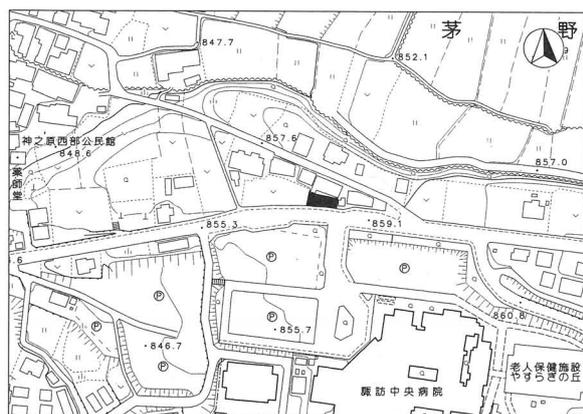
遺跡概要 宮川および上川と、宮川の支流である田沢沢川が形成した沖積低地に所在する。昭和52・53年の中央自動車道建設工事に伴う発掘調査によって、縄文時代晩期の多様な遺構や豊富な遺物が発見され、当該期の拠点集落と位置づけられた遺跡である。また、古墳時代中期の竪穴住居址、中世以降の竪穴住居址・掘立柱建物址などの遺構も発見されており、複数の時代に跨る遺跡であることが確認されている。近年では、国道20号バイパス建設工事に伴う大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から近世における沖積低地の土地利用の変遷が考察されたほか、中世の「御射山道」と推定される柵列、馬の鞍に装着した中世の青銅製沓金具などの検出から、諏訪大社と深い関わりをもつ遺跡であることが明らかにされている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の西側で、自然堤防（微高地）と宮川に挟まれた低地に位置する。標高は783m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、計画深度（現況地盤以下55～60cm）まで掘り下げられた2箇所です土層の状態を確認した。宅地造成時の埋土層内で掘削が止まるため、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

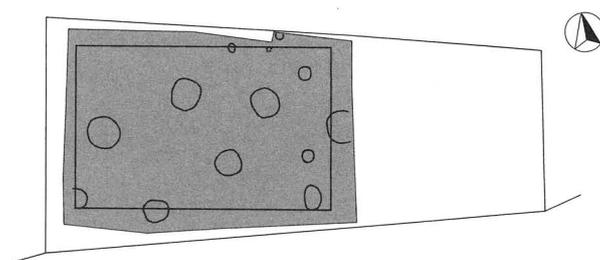
6. 中御前遺跡

(22-6 写真図版12~14)



第52図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 155
所在地 茅野市玉川4183-2
調査原因 個人住宅
調査期間 平成22年7月3日～6日
調査面積 89m²
遺構 縄文土坑13基
遺物 縄文土器6点、中世土器1点



第53図 調査位置図 (1/300)

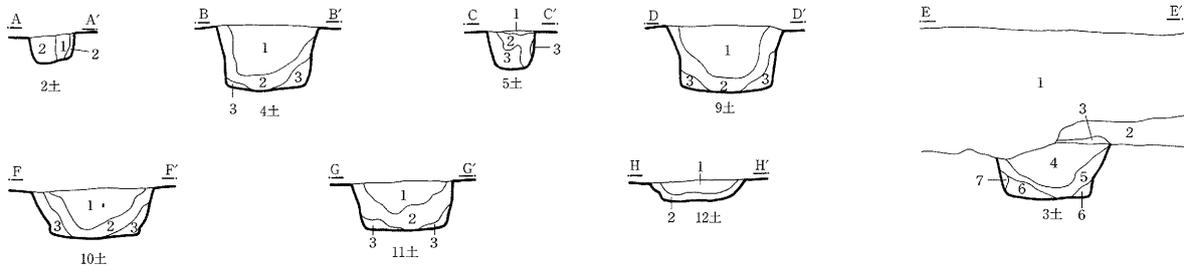
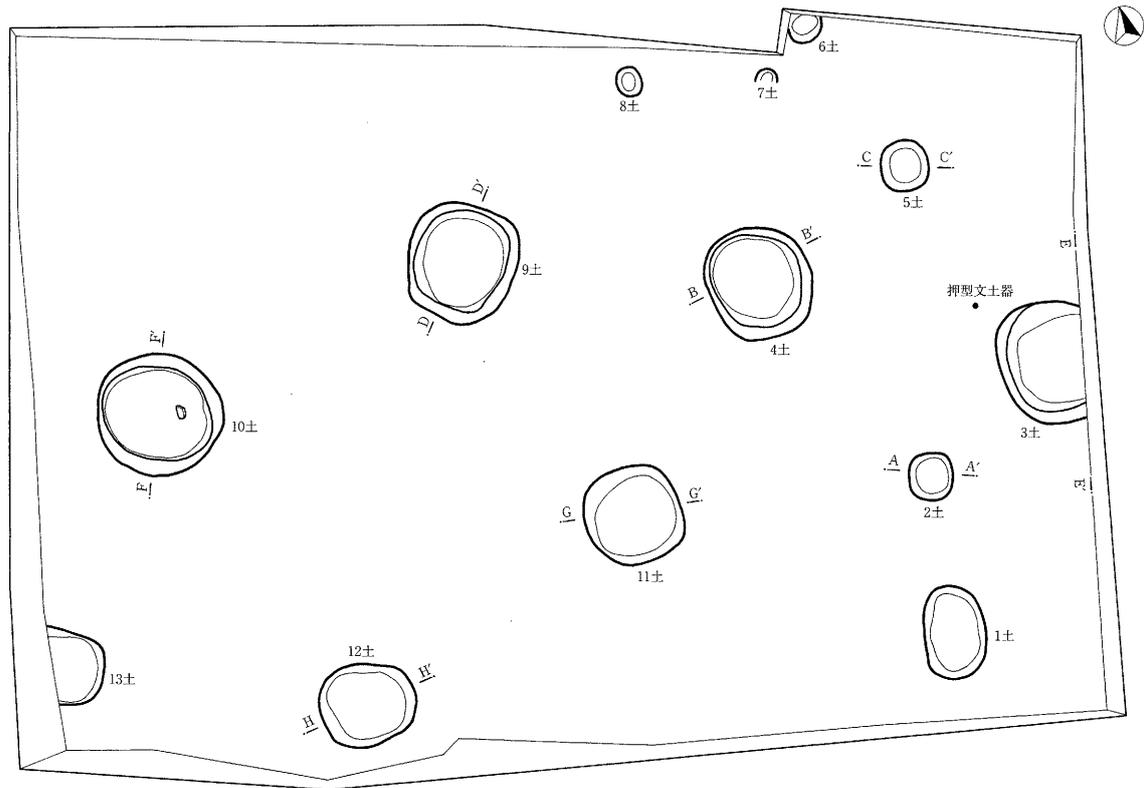
遺跡概要 八ヶ岳西麓の長峰状台地に所在する。古くから知られた縄文時代の遺跡で、昭和24年に諏訪清陵高校地歴部、昭和42年に茅野高校地歴部による小発掘が行われ、縄文時代中期の竪穴住居址・土坑・独立埋甕が発見されている。また、平成17・19年に行われた発掘調査の結果、縄文時代中期後葉の竪穴住居址・土坑（貯蔵穴・落とし穴など）・掘立柱建物址などの遺構が発見された。地形と遺構の位置関係、および竪穴住居址の分布状況からみて、中期後葉期の集落は環状ないし馬蹄形であった可能性が考えられている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の西側で、台地の南側緩斜面に位置する。標高は858m位である。

個人住宅建築工事が計画された当該地は、周辺で行われた発掘結果からみて、遺構の存在する可能性が極めて高いとされていた場所である。計画された基礎工事の工法（総掘り）とその掘削深度（現況地盤以下150cm）から、遺構の破壊が予想されるため、当該事業に先立って本調査を行うことにした。

事業計画地は北側に隣接する個人住宅（母屋）建築工事の際に、100cm前後の埋土層によって耕作地（畑）として造成された場所である。表土層を除去すると、旧耕作土層（畑）が現れ、その直下に遺構とみられる黒色土の落ち込みが点々と確認された。遺構検出面は、灰黄褐色土からにぶい黄褐色土（ローム漸移層）層面で、表土層から120～130cmの深さがある。この面は基礎工事の掘削深度よりも数10cm浅く、計画どおりに基礎工事が進められた場合、遺構上面の破壊が確実な状況となった。現地において事業者ならびに事業関係者と遺跡の保護措置を協議したが、計画どおりに当該事業を進めたいとする意向が示されたため、記録保存による発掘調査の実施が確定した。

調査の結果、縄文時代とみられる13基の土坑が検出された。これらは、直径100cm以上と直径50cm以下の2種類に大別される。また、断面形および覆土にみられる特徴から、大形土坑の大半が貯蔵穴で小形土坑が柱穴と考えることができる。代表する数基の土坑について、以下に触れておく。



- 2土
- 1 黒色土7.5YR2/1 柱痕
ローム粒子少 ローム塊2mm少 炭化物2~7mm少
 - 2 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多 ローム塊2~5mm少 礫2mm少 炭化物2mm少
- 3土
- 1 埋土 (宅地造成)
 - 2 黒色土5YR2/1 耕作土 (畑)
 - 3 黒褐色土5YR2/1 覆土?
礫2mm少
 - 4 黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少 ローム塊2mm少 礫2mm少 炭化物2mm少
 - 5 黒褐色土10YR2/2~2/3
ローム粒子多 ローム塊2mm~1.5cm少 礫2mm少
 - 6 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少
- 4土
- 1 黒色土10YR2/1
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 礫2mm少 炭化物2mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/2~2/3
ローム粒子多 ローム塊2~5mm少 礫2mm少 炭化物2mm少
 - 3 黒褐色土10YR3/2 (暗褐色土10YR3/3)
ローム粒子多 ローム塊2~7mm少 礫2mm少
- 5土
- 1 黒色土5YR2/1
ローム粒子少 礫2mm少 炭化物2mm少
 - 2 黒色土7.5YR2/1 柱痕?
ローム粒子少 ローム塊2mm少 礫2mm少
 - 3 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子多 ローム塊2mm~1cm少 礫2mm少
- 6土
- 7土
- 8土
- 9土
- 1 黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 礫2mm少 炭化物2~5mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多 ローム塊2mm~1cm少 礫2mm少 炭化物2~5mm少
 - 3 黒褐色土10YR3/2 硬い
ローム粒子多 ローム塊2mm~1.5cm少 礫2mm少 炭化物2mm少
- 10土
- 1 黒色土10YR2/1
ローム粒子多 ローム塊2~5mm少 礫2mm少 炭化物2~5mm少
 - 2 黒色土10YR2/1+黒褐色土10YR2/2~2/3
ローム粒子多 ローム塊2mm~1cm多 礫2mm少 炭化物2~7mm少
 - 3 黒褐色土10YR3/2
ローム粒子少 ローム塊2~7mm少 礫2mm少 炭化物2mm少
- 11土
- 1 黒色土10YR2/1
ローム粒子少 礫2mm少 炭化物2~5mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/3+黒色土10YR2/1
ローム粒子多 ローム塊2mm~2cm多 礫2mm少 炭化物2mm少
 - 3 黒褐色土10YR3/2 硬い
ローム粒子少 ローム塊2~7mm少 礫2mm少
- 12土
- 1 黒褐色土10YR2/2~2/3
ローム粒子多 ローム塊2~5mm少 礫2mm少 炭化物2mm少
 - 2 黒褐色土10YR3/2 硬い
ローム粒子少 ローム塊2mm少 礫2mm少

第54図 遺構平面図・土層断面図 (1/80)

大形土坑 1・3～13号土坑が該当し、断面形や覆土の堆積状態などに幾つかの共通点がみられる。平面形は円形を基調とし、断面形は壁中位～下位に中端となる稜線をもち、ここから底面に向かい外側に開く「巾着」形を呈するものが主体をなす。覆土は、壁側からの流れ込みによって堆積した数層からなり、底面に向かって徐々に黒味を減じていく。これらの共通点に加え、重複関係がなく、一定の間隔で分布すること、まとまった遺物を伴わないことも挙げられる。以上の点から、これらの土坑は貯蔵穴で、構築時期に大差がないと考えられる。ただし、これらの土坑と平面形・断面形が大きく異なる1号土坑は、構築時期が異なる可能性がある。

これらの土坑からは土器片が少量出土している。4号土坑では時期不明の土器（1点は縄文時代中期後葉？）が2点、5号土坑では縄文時代中期初頭の土器が1点と時期不明の土器が1点、10号土坑では縄文時代中期後葉の土器が1点出土した。

小形土坑 2・5～8号土坑が該当するが、直径50cm前後の2・5号土坑と、直径20～30cmほどの6～8号土坑に細分できる。ともに平面形は円形を基調とする。前者では柱痕と考えられる幅10～15cmの垂下層が確認された。規模も類似しており、掘立柱建物址などに伴う遺構の可能性もある。

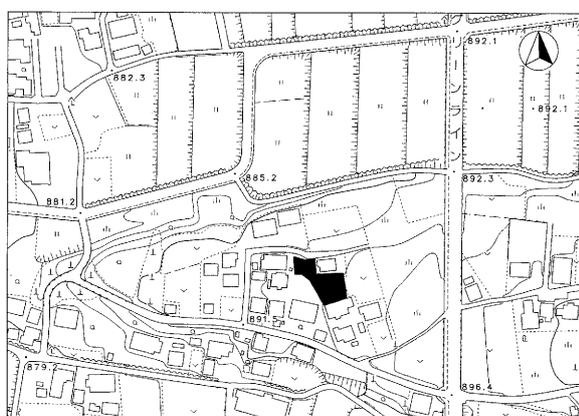
遺構に伴わない遺物として、12号土坑内の攪乱層から中世土器（内耳土器）、耕作土層の直下から縄文時代早期（沢式）の押型文土器の破片が1点ずつ出土した。

まとめ これまでの発掘調査によれば、当遺跡は縄文時代中期後葉を中心とする集落遺跡で、台地の幅が最大となる遺跡範囲の中央付近に、南北規模が50mほどの環状ないし馬蹄形集落が形成されていたと推測されている（『市内遺跡Ⅱ』19-4）。

今回の調査地点は、その該期集落の中心とみられる地点から約100m東に離れた、遺跡の西端に近い場所である。出土遺物の少なさから、時期が特定できた遺構はひとつもないが、集落の中心となる時期が中期後葉である点から考えて、検出された遺構の大半は該期の可能性が高いとみられる。また、中期後葉期の環状ないし馬蹄形集落の外縁部（竪穴住居址による住居域の外側）から、貯蔵穴とされる土坑群が検出された事例（北山地区の聖石遺跡・長峯遺跡）を勘案するならば、貯蔵穴とみられる大形土坑は西側に中心をもつ該期集落に伴う遺構と考えるのが妥当と思われる。

7. 小堂見遺跡

(22-7 写真図版14・15)

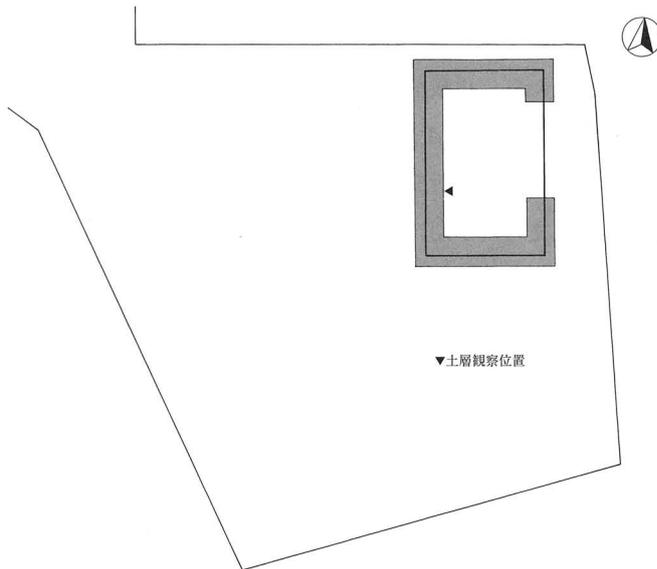


第55図 調査地点位置図 (1/5,000)

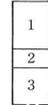
遺跡番号	160
所在地	茅野市玉川3074-1ほか
調査原因	個人住宅蔵
調査期間	平成22年8月26日
調査面積	21㎡
遺構	なし
遺物	なし

調査概要 調査地点は遺跡範囲の西端で、台地平坦面の頂部付近に位置する。標高は892m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会ったところ、耕作土層(畑)の直下に黄褐色土(ローム漸移層)



第56図 調査位置図 (1/300)



- 1 黒色土7.5YR2/1 耕作土(畑)
- 2 黄褐色土10YR5/6
- 3 明黄褐色土10YR6/6

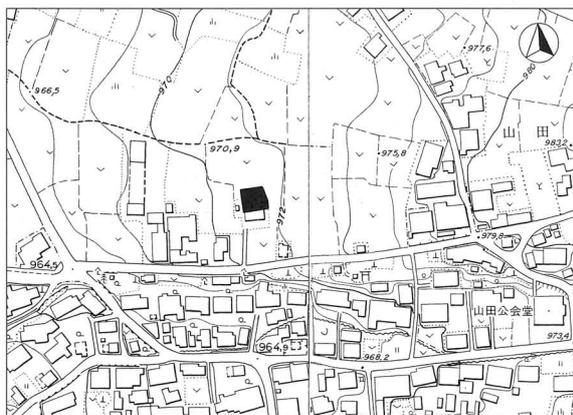
第57図 土層断面図 (1/40)

が露呈した。このように、計画された掘削深度(現況地盤以下55cm)より高い位置で地山層が露呈したため、事業者の承諾を得て、耕作土層を取り除いた面を精査し、遺構・遺物の存否を確認することにした。精査の結果、遺構・遺物ともに確認されず、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。な

お、周辺の耕作地(畑)を歩いてみたが、遺物の散布は認められなかった。以上の調査および踏査の結果からみて、調査地点は遺跡から外れた場所である可能性が高いと思われる。

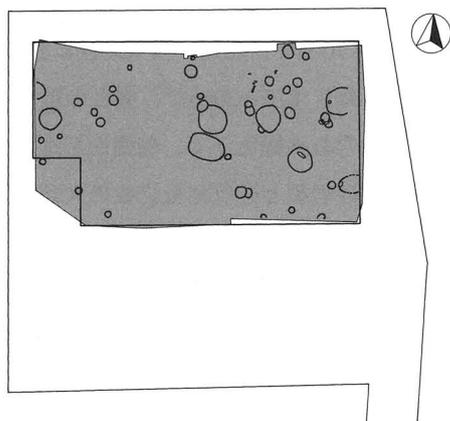
8. 尾根田遺跡

(22-8 写真図版15~18)



第58図 調査地点位置図 (1/5,000)

- 遺跡番号 164
- 所在地 茅野市玉川10202-1
- 調査原因 個人住宅
- 調査期間 平成22年6月17~30日
- 調査面積 89㎡
- 遺構 縄文土坑42基、縄文焼土址1箇所、縄文集石1箇所
- 遺物 縄文土器・石器・黒曜石(28点、64.2g)、整理箱1箱



第59図 調査位置図 (1/300)

遺跡概要 八ヶ岳西麓の広原状台地に所在する。耕作地(畑)に広がる遺跡であるため、長らく実態不明の遺跡であったが、平成14年4月の耕作時に、今回調査区の北西約40mの地点から縄文時代中期中葉(藤内式期)の竪穴住居址が不時発見され、該期の集落遺跡であることが明らかとなった。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の南端で、台地の南側緩斜面に位置する。標高は971m位である。

個人住宅建築工事が計画された当該地は、遺跡範囲の中心から大きく南に外れた場所である。遺構が存在する可能性は低いと考えられたが、遺跡範囲すら判然

としない状態にあるため、現地確認の必要性が生じた。現地を踏査したところ、縄文時代中期中葉から後期前葉とみられる土器・黒曜石片が多数認められ、その状況から、比較的浅い位置に複数の時期にわたる遺構の埋蔵が予想された。計画された基礎工事の工法（総掘り）と掘削深度（現況地盤以下100cm）から、遺構の破壊が十分に考えられるため、当該事業に先立って本調査を行う旨を事業者に伝えた。

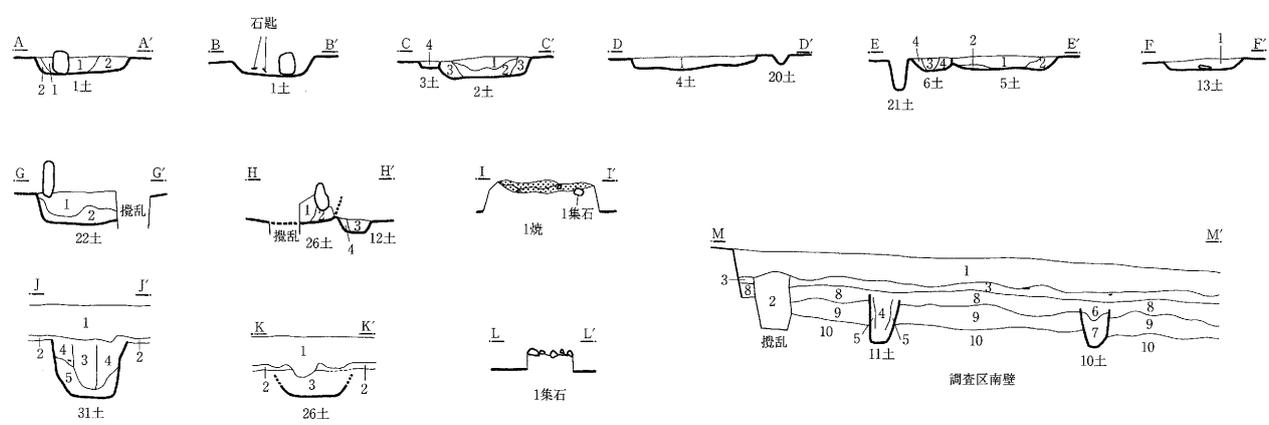
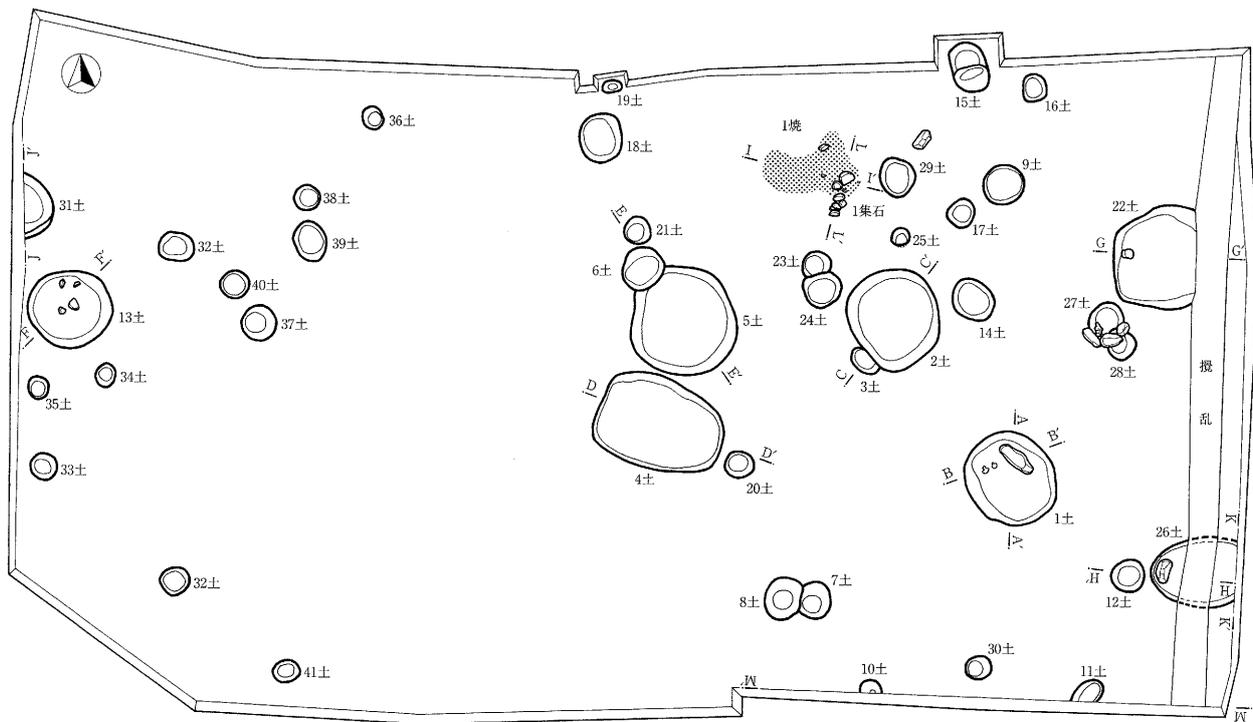
調査区南東隅から耕作土層（畑）を除去していくと、縄文時代中期・後期の土器片、硬砂岩製の茎部を欠く石匙、黒曜石片などの遺物を包含する赤みを帯びた黒褐色土（遺物包含層：第60図調査区南壁第3層）が現れた。その下に黒みの強い黒褐色土が厚く堆積し、黒みの弱い黒褐色土と暗褐色土の混在土を経て、明黄褐色土（ローム層）に漸移する状態であった。現況地盤から明黄褐色土（ローム層）までの深さは70～80cmである。また、調査区の南壁に黒褐色土を覆土とする柱穴状の土坑（10・11号土坑）がかかっており、現況地盤以下40～50cmの位置から掘り込まれていることが確認された。これらの土坑の掘り込み付近を遺構検出面として、耕作土層の剥ぎ取りを進めたところ、黒褐色土層内から板状・柱状の安山岩の大形礫が数個出土するとともに、その周辺から大小の土坑が複数確認され、調査区全面に遺構の広がり予想された。遺構の破壊が確実な状況となり、事業者ならびに事業関係者と遺跡の保護に関わる現地協議を行った。その結果、事業者から計画どおりに当該事業を進めたいとする意向が示されたため、記録保存による発掘調査の実施が確定した。なお、敷地内に除去した土を置くための十分な場所が確保できず、東側と西側を交互に調査することとした。

①**土坑** 形状および規模、推測される性格などから、A～Cの3つのタイプに分類が可能である。**Aタイプ**は墓坑ないし貯蔵穴と考えられるもので、1・2・4・5・13・22・26号土坑が該当する。この中で、土坑の形状、出土遺物などから墓坑と考えられるものは、1・4・22・26号土坑で、2・5号土坑もその可能性がある。**Bタイプ**は直径が50cmを大きく上回るもので、柱穴と考えられる。31号土坑が該当する。**Cタイプ**は直径が50cm以下の柱穴と考えられるもので、A・Bタイプ以外の土坑が該当する。

Aタイプ 断面形が箱状ないし皿状となる共通点があるのに対し、平面形状は上面形・底面形ともに円形を呈するもの（2・5・13号土坑）、隅丸長方形を呈するもの（4号土坑）、楕円形を呈するもの（26号土坑）のほか、上面形と底面形に角があり矩形ないし多角形を志向して掘削されたと考えられるもの（1・22号土坑）もあり多様である。さらに、副葬品とみられる石器を伴うもの（1号土坑）、「墓標」と考えられる大形の礫が据えられたもの（22・26号土坑）、石器・礫を伴わないもの（2・4・5号土坑）がある。覆土は黒色・黒褐色・暗褐色土からなり、地山層（明黄褐色土）への掘り込みが深い土坑ほどローム粒子・塊を多く含んでいる。また、数層に分層されたものは、「レンズ」状または水平に近い堆積状態を示し、上位層ほど黒味が強いつ徴をもつ。以下、数基の土坑について詳述する。

1号土坑は調査区東側にある。上面規模が100×90cm、底面規模が85×70cmで、北西－南東方向に長軸（N-35°-W）をもつ、矩形を志向したと思われる平面形状である。壁の高さは15～20cmで、底との境がわりと明瞭である。覆土は2層に分層された。ともにローム粒子・塊を少量含む黒褐色土で、壁側から堆積した様子が観察された。北西側から安山岩の大形板状礫（40×15cm）と、硬砂岩製と硅質粘板岩製の大型石匙が出土した。土坑底面の長軸方向に板状礫の長辺と石器の主軸を揃えたとともに、その短軸方向に横に並べて置いている。板状礫は長辺の一側面が底面に密着するが、大型石匙はともに底面から3～5cmほど高い位置にある。縄文時代中期中葉（藤内I式期）の土器が2点出土したため、該期の土坑と考えられる。また、副葬品とみられる大型石匙の出土から、本址は墓坑と判断される。

22号土坑は調査区東側にある。上面形・底面形に角があるため、矩形ないし多角形を志向して掘削されたと思われる。土坑の一部が暗渠に切られるため、平面規模ははっきりしないが、暗渠の東側に土坑が延びて



- 1土
- 1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少 ローム塊2mm~1cm少 礫2~5mm少 炭化物2mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子少 ローム塊2mm~2cm少 礫2~5mm少 炭化物2mm少
- 2・3土
- 1 黒褐色土10YR2/2 2土
ローム粒子少 ローム塊2mm~1.5cm少
 - 2 暗褐色土10YR3/3 2土
ローム粒子少 ローム塊2mm~1.5cm少
 - 3 黒褐色土10YR2/3 2土
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少
 - 4 黒褐色土10YR3/2 3土 3土
ローム粒子少 ローム塊2mm少
- 4土
- 1 黒色土7.5YR2/1 (黒褐色土10YR3/2+暗褐色土10YR3/4を含む)
ローム粒子少 ローム塊2mm~1.5cm少
- 5・6土
- 1 黒褐色土10YR2/2 (黒色土7.5YR2/1を含む) 5土
ローム粒子少 ローム塊2mm少 礫2~5mm少 炭化物2~5mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/3~3/2 5土
ローム粒子少 ローム塊2mm少 礫2~5mm少
 - 3 黒褐色土10YR2/2 6土 柱痕
ローム粒子少 礫2~5mm少 炭化物2~5mm多
 - 4 黒褐色土10YR3/2 6土
ローム粒子少 ローム塊2mm~1cm少 礫2~5mm少

- 調査区南壁
- 1 黒色土10YR1.7/1 耕作土(畑)
 - 2 攪乱 暗渠の窺方
 - 3 黒褐色土5YR2/1 遺物包含層
 - 4 黒褐色土10YR2/2 11土 柱痕
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 炭化物2mm少
 - 5 黒褐色土10YR3/2 11土
ローム粒子少 ローム塊2mm少
 - 6 黒褐色土10YR2/2 10土
 - 7 黒褐色土10YR2/3 10土
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少
 - 8 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少 炭化物2mm少
 - 9 黒褐色土10YR2/2~3/2+暗褐色土10YR3/4
ローム粒子多 ローム塊2mm~4cm少
 - 10 明黄褐色土10YR6/6
- 13土
- 1 黒褐色土10YR2/2+黒色土7.5YR2/1
ローム粒子少 ローム塊2~7mm少 礫2~5mm少 炭化物2~7mm多
- 22土
- 1 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子多 ローム塊2mm~4cm少 礫2~5mm少 炭化物2~5mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/3
ローム粒子多 ローム塊2mm~1cm少 礫2~5mm少 炭化物2mm少

- 26土
- 1 黒色土10YR1.7/1 耕作土(畑)
 - 2 黒褐色土5YR2/1 遺物包含層
 - 3 黒褐色土10YR2/2
ローム粒子少 礫2~5mm少 炭化物2mm少
- 12・26土
- 1 黒褐色土10YR2/2 26土
ローム粒子少 礫2~5mm少 炭化物2mm少
 - 2 黒褐色土10YR2/3 26土 硬い
ローム粒子少 礫2~5mm少
 - 3 黒褐色土10YR2/2 12土
ローム粒子少 ローム塊2~7mm少 礫2~5mm少
 - 4 黒褐色土10YR3/2 12土
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 礫2~5mm少
- 31土
- 1 黒色土10YR1.7/1 耕作土(畑)
 - 2 黒褐色土5YR2/1 遺物包含層
 - 3 黒色土7.5YR2/1 31土 柱痕
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 礫2~5mm少 炭化物2~5mm少
 - 4 黒褐色土10YR2/2 31土
ローム粒子少 ローム塊2~5mm少 礫2~5mm少 炭化物2mm少
 - 5 黒褐色土10YR2/3 31土 硬い
ローム粒子多 ローム塊2mm~4cm多 礫2~5mm少 炭化物2~7mm少
- 焼土址
- 1 暗赤褐色土5YR3/4
 - 2 暗赤褐色土2.5YR3/2

第60図 遺構平面図・土層断面図 (1/80)

いない点からみて、直径でいえば110cmほどの大きさと推測される。壁の高さは30cmで、底との境が明瞭である。覆土は2層に分層された。ともにローム粒子・塊を多く含む黒褐色土で、土坑全体がほぼ均等に埋まってく（埋められた）状態が観察された。表土剥ぎ取り作業の際に、遺物包含層付近において拳大の安山岩の円礫が確認されていたが、その周辺を掘り下げた結果、本址の西端に直に据えられた柱状礫であることが明らかとなった。その後の調査によって、直径にして10cm強、長さ40cm弱の大きさであること、第1層に食い込んで直立することが確認された。礫の上端が遺物包含層付近で確認され、下端が底面よりかなり高い位置にある点から、「墓標」として据えられた礫と考えられる。柱状礫の15cm南で、土坑の底面より45cm高い位置から、硬砂岩製の石匙の茎部が出土した。土器の出土がなく、時期は不明である。

26号土坑は調査区南東端にある。中央を暗渠が横断し、東側が調査区域外にあるが、検出された壁の形状からプランの大概が窺える。東西に長軸（N-88°-W）をもつ楕円形を呈し、110×75cmほどの大きさと推測される。明黄褐色土層を数cm掘り込みつくられるため、底との境が不明瞭である。覆土は安山岩の板状礫を境に2層に分層された。ともにローム粒子・塊をほとんど含まない黒褐色土で、第2層が硬く締まっている。板状礫は、長さ30cm、厚さ15cm、最大幅（下端幅）25cmの三角形を呈し、土坑西端の長軸線上で、底面より10cm高い覆土（第2層）内に直に据えられている。礫の上端が遺物包含層付近にあり、下端が底面より高い位置にある点から、22号土坑出土の柱状礫と同様に、「墓標」として据えられた礫と考えられる。覆土から沈線の施された薄手の小さな土器片が1点出土した。この土器は縄文時代後期の可能性がある。

Bタイプ 堅穴住居址の柱穴より一回り規模が大きく、例えば、掘立柱建物址に伴うような大形の柱穴である。

31号土坑は調査区西端にある。約1/2が調査されたと思われるため、直径が80～90cm程と推測される。検出された壁の高さは40cmであるが、調査区西断面で60cmの立ち上がりが確認された。覆土は4層に分層された。第3層が柱痕、第4・5層が根固めの埋土層である。柱痕は黒色土で、幅が25cmある。埋土層は黒褐色土からなる。ローム粒子・塊が多量に含む第5層は、硬く締まっている。出土遺物がなく、時期は不明である。

Cタイプ 直径が50cm以下の、いわゆる「ピット」とされるものである。黒褐色土を覆土とするものが大半である。すべてを半截した結果、10基で柱痕またはそれと思しい痕跡が確認された。

27号土坑は調査区東側にある。Cタイプの中で大形礫を伴う唯一の土坑である。安山岩の板状礫を南壁に沿うように配し、28号土坑を切って構築される。縄文の施文された土器片が1点出土した。

②焼土址 被熱によって一定範囲が赤色化し、堅穴住居址・掘立柱建物址などに伴わないものを焼土址とした。

1号焼土址は調査区北側にある。北西側が攪乱で失われているものの、遺存状態は良好である。黒褐色土内（第60図第3層～4層上位）に形成され、南北100cm、東西65cmの楕円形の範囲が、15cmの厚さ（最大厚）で「レンズ」状に焼けている。焼土上面およびその検出面の周囲から、縄文時代中期初頭・中葉・後葉・末葉、後期初頭・前葉の土器片が出土し、その中で最新の後期前葉期（堀之内Ⅱ式期）が焼土址の形成時期と考えられる。なお、本址の周囲からCタイプの土坑が多数検出されており、本址を囲むように見えるものもある。建物址を視野に入れた発掘作業および整理事業を進めたが、位置関係以外に両者を結びつける積極的な根拠は見出せなかった。

③集石 建物址や土坑などの遺構に伴わない、意図的に据えられた礫のまとまりを集石とした。

1号集石は調査区北側にある。石器を含む拳大前後の安山岩8点が、上面を揃えて、南北方向に列状に置かれている。掘方は確認できなかったが、検出レベルからみて、埋置された可能性がある。5点が石器（凹

み、磨面、敲打痕のある礫石器)である。1号焼土址に覆われているためか、礫上面が一様に赤色化している。1号焼土址の下に遺存するため、後期前葉またはこれより古い時期の遺構であるが、同一地点で重複する状態からみて、両者が全く無関係なものであったとも考え難い。このような観点から、1号焼土址の形成時期とさほど時間的な隔たりのない時期に構築された遺構と考えておく。

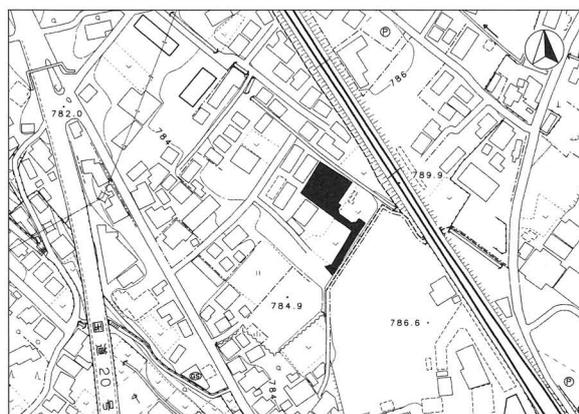
竪穴住居址が検出されなかったこともあり、遺物量(整理箱1箱分)は調査面積に対して少なめである。器形を窺える土器は1個体もなく、大きなものでも10cm程度の破片である。時期不明の土器も多くあるが、主体となる時期は縄文時代中期後葉以降である。石器は前記したものがすべてである。その他、黒曜石と輝緑岩片が出土した。黒曜石の内訳は、9号土坑(1点、0.3g)が碎片、13号土坑(2点、9.5g)が石核・両極打法による剥離痕をもつ石片、焼土検出面・遺構検出面・攪乱層(25点、54.4g)が、剥片・碎片・両極打法による剥離痕をもつ石片・石鏃である。

まとめ 前記のとおり、当遺跡が縄文時代中期中葉の集落遺跡であることは、該期の竪穴住居址の不時発見で知られていたが、それ以外の遺跡の内容については、発掘調査事例に乏しいことも相まって、推測すら難しい状況にあった。このような中で行われた当遺跡初となる今回の発掘調査(本調査)は、遺跡の継続期間を示すさまざまな時期の遺物、集落に伴う各種の遺構が確認されるなど、遺跡の実態を考える上で多くの成果をもたらした。

中期中葉以外と考えられる遺構の検出、中期初頭から後期前葉までの土器の出土から、中期中葉期の単純集落でないことが確認された点が最大の成果である。特に、中期後葉から末葉(24・29号土坑など)、後期初頭から前葉(8・13・15号土坑など)と考えられる土坑、後期前葉と判断された1号焼土址と該期の可能性がある1号集石などの、中期後葉期以降に属する多数の遺構の検出が注目される。調査区の近傍に中期後葉以降の居住施設が間違いなく存在し、濃密な分布も窺われるところである。そして、幅の広い台地上に立地する点を勘案するならば、当遺跡は「長期継続型の拠点集落」である可能性が高いと思われる。また、中期中葉期と特定された墓坑(1号土坑)は、不時発見された中期中葉期の竪穴住居址と関連する可能性もあり、該期の集落構造を考える上で極めて重要な遺構といえる。調査区が中期中葉期の「墓域」の一部であり、この付近を中心とする直径80mほどの環状ないし馬蹄形の集落が、該期に形成されていたとの推測も可能である。以上に記した集落観が妥当なものであるのか、今後、周辺の調査を進める中で検証していきたい。

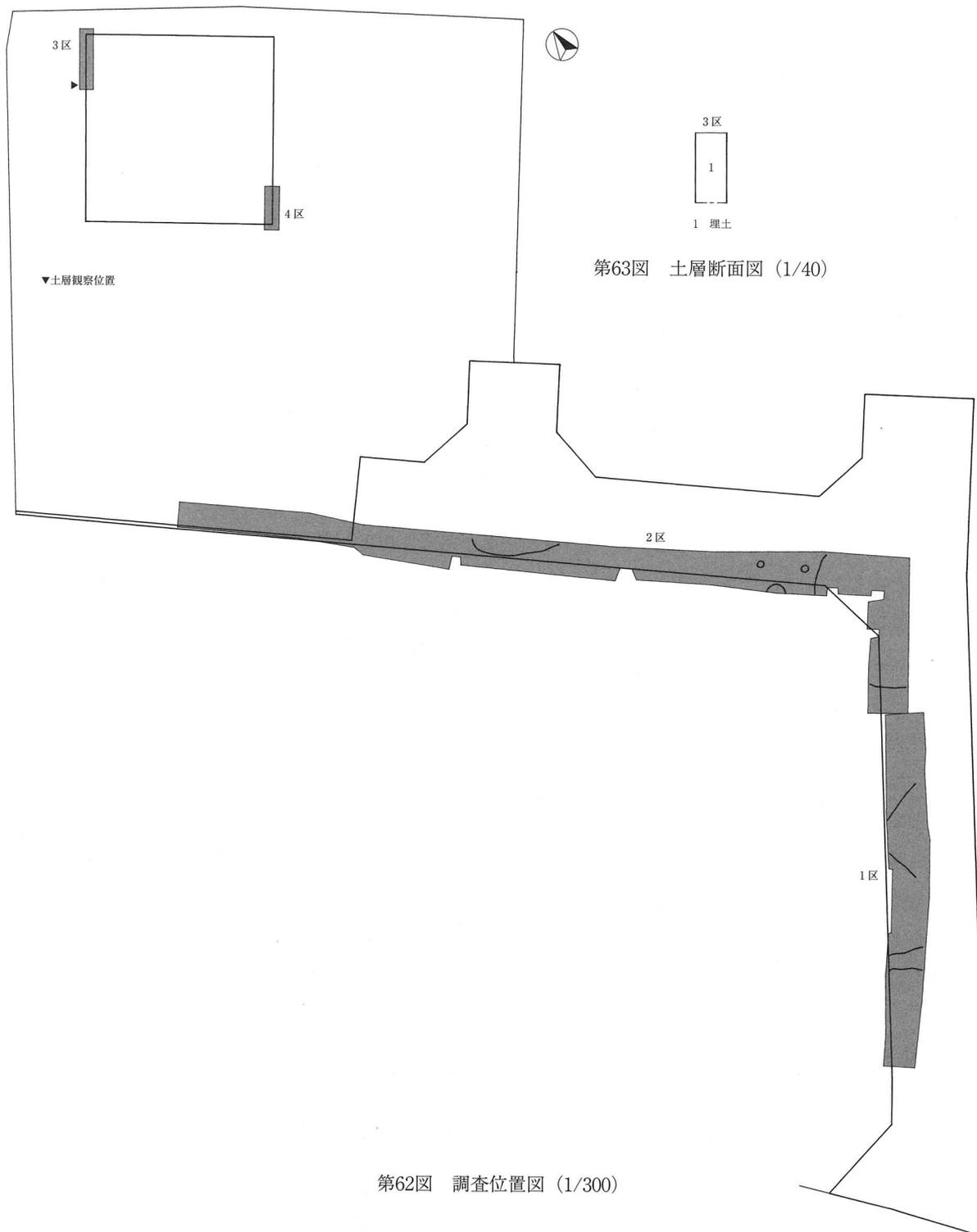
9. 構井・阿弥陀堂遺跡

(22-9 写真図版18~20)



第61図 調査地点位置図(1/5,000)

遺跡番号	222・223
所在地	茅野市ちの2539-1ほか
調査原因	個人住宅
調査期間	平成22年5月25日~6月1日(進入路) 平成22年12月6日(住宅)
調査面積	101㎡(進入路:97㎡、住宅:4㎡)
遺構	弥生後期住居址2軒、平安住居址1軒、溝址1条、土坑17基(住居址の柱穴を含む)
遺物	縄文・弥生・平安・中世土器、須恵器、古代陶器、中世磁器、黒曜石(7点、25.0g) 整理箱1箱



第63図 土層断面図 (1/40)

第62図 調査位置図 (1/300)

調査概要 調査地点はJR中央東線の西側、「構井地区」である。遺跡範囲の南側で、沖積段丘面を形成する南東から北西に延びる一微高地の頂部付近とみられる場所に位置する。標高は785～786m位である。

当該事業における遺跡の保護対象範囲は、個人住宅建築範囲と進入路設置範囲の2箇所である。

(1) 進入路

幅4m、長さ65mの進入路が、約60cmの埋土によって築造されるのに伴い、隣地との境界に高さ120cm、底板幅90cmの「L」字形擁壁の設置が計画されていた。周辺の発掘結果によれば、当該地は遺構の存在する可能性が極めて高い場所であり、計画された掘削深度（現況地盤以下70～80cm）からみて遺構の破壊が予想

された。そこで、工事に先立ち、擁壁設置範囲を対象とする本調査を2つの調査区(1・2区)に分けて行った。

水田から畑への改変に加え、かつて線路に接する東側隣接地に生簀があったとのことであり、これらに伴うさまざまな土層(耕作土層・埋土層・砂層など)が50~60cmの厚さで複雑に重なっていた。これらの土層の下に、地山層となる黒色土、黒褐色~暗褐色砂質土、20cm大までの安山岩の円礫を少量含む明黄褐色砂質土が堆積しているが、黒色土層の残存が認められる箇所がある一方で、明黄褐色砂質土層まで削平された箇所があるなど、地山層の遺存状態は一様でない。地山層が露呈した段階で、遺構とみられる黒色(砂質)土の落ち込みが点々と認められた。遺構検出面と基礎工事の計画深度をすり合わせたところ、検出面以下に工事の掘削が及ぶ恐れがあるため、現地で事業者ならびに事業関係者と遺跡の保護措置を協議した。その結果、計画どおりに当該事業を進めたいとする意向が示され、記録保存による発掘調査の実施が確定した。なお、攪乱層の中で工事の掘削が止まる2区北側の約1/3については、調査範囲から除外することにした。

① 竪穴住居址

1号住居址 1区から検出された。方形を呈する住居址であるが、一部の調査に留まっており、平面規模・主軸方向などは推測不可能である。壁は北壁と西壁の一部が検出された。高さは5cm前後であるが、調査区断面において20cmの立ち上がりが確認された。壁下に幅15~30cm、深さ5cmまでの周溝がめぐる。床は明黄褐色砂質土層に平らに設けられている。全体的に硬く、壁際以外が特に硬く締まっている。覆土は2層に分層された。黒色(砂質)土がベースとなり、「レンズ」状に堆積する。硬く締まった床下から、直径150cm前後と推測される深さ15cmの1号土坑が検出された。明黄褐色砂質土粒子・塊を多量に含む黒褐色砂質土で埋め戻されている点から、住居の掘方の可能性がある。ここから灰釉陶器(瓶)の破片が出土した。

調査面積に対して、出土した遺物量は極めて少ない。弥生土器、平安時代土師器(甲斐型坏・黒色土器)、平安須恵器(坏:第80図11・12ほか)がある。また、黒曜石(1点、0.2g)の破片が出土した。

出土した土師器・須恵器の時期からみて、平安時代前半の竪穴住居址と考えられる。

2号住居址 2区南端から検出された。平面形は隅丸長方形または楕円形を呈し、主軸長が7.0m、副軸長が5.7mと推測される。主軸方向はN-41°-Eを示す。壁は西壁と南壁の一部が検出された。高さは5~20cmで、床との境が明瞭である。壁下に周溝は確認されていないが、南壁の直下に、上端長26×15cm、下端長15×9cmの隅丸長方形を呈する、深さ20cmの2号土坑が設けられている。床は明黄褐色砂質土層を浅く掘り窪めてつくられている。部分的な整地(第64図2住第16層)を伴う平らな面で、全体が硬く締まっている。床面から柱穴状の土坑が10箇所検出され、4・10・11号土坑の3箇所が主柱穴と考えられる。掘方は「五平(状)柱」を据えたと思われる長楕円形である。4号土坑が上端長32×16cm、下端長30×11cm、深さ50cm、10号土坑が上端長31×16cm、下端長24×13cm、深さ32cm、11号土坑が上端長30×15cm、下端長30×10cm、深さ42cmとなる。南壁から90cmほど離れた、主軸線上に位置する3号土坑は、上端長37×30cm、下端長22×15cm、深さ34cmの隅丸長方形を呈し、穴全体が南壁側に傾いている。位置・規模・形状からみて、出入口部にかけての梯子を受ける穴と考えられる。5~8号土坑は、上端の直径が20~30cm、深さが5cm前後の小穴である。規模が類似し、貼床されていないという共通点があるため、本址に伴う穴と考えている。主軸線上に位置し、整地層の下から検出された柱穴状の窪みを9号土坑としたが、住居構築に伴う掘方の一部の可能性もある。炉址は主柱穴に挟まれた主軸線上に位置する。全体が攪乱を受け、構築当時の姿が失われているが、火床に接して、奥壁側を除く3辺に礫を据えたと思われる浅い掘り込みがある点から、奥壁側が開く「コ」の字形の石囲炉であったと考えられる。主軸線に沿って細長く掘り窪められた火床は、10cmまでの厚さで焼けている。炉址の約1m南の床面に、直径約10cm、厚さ1cm程度の焼土址がある。床までの

覆土は4層に分層された。ローム粒子・塊を少量含む黒色（砂質）土・黒褐色（砂質）土で、「レンズ」状の堆積を示している。

一定量の土器と、少量の石器・黒曜石が出土した。土器はすべて弥生時代後期（壺に赤色塗彩あり・高坏に赤色塗彩あり・甕）である（第80図13～22）。石器には緑色岩の打製石器？が2点ある。また、黒曜石（3点、16.7g）の石核・剥片・碎片が出土した。その他、板状を呈し、剥離痕をもつ緑色岩？の素材礫があり、褐色に変色して光沢を帯びた箇所がある。

出土した土器の時期からみて、弥生時代後期の竪穴住居址と考えられる。

3号住居址 2区中央付近から検出された。南側の一部が調査されたに過ぎないが、15号土坑が出入口の梯子を受ける穴と考えられること、壁が北側に向かって緩やかに曲がることなどから、2号住居址と類似する平面形・規模・主軸方向と推測される。南壁の高さは2～10cmであるが、調査区断面において20cmの立ち上がりが確認された。明黄褐色砂質土層への掘り込みが浅いためか、床との境が不明瞭である。壁下に周溝は認められないが、壁に接するように、上端長48×33cm、下端長28×18cmの隅丸長方形を呈する、深さ34cmの16号土坑が設けられている。2号住居址検出の2号土坑と、平面形および設けられる位置が類似するため、同じ機能・用途をもつ穴と考えられる。床は整地（第64図3住第6層）を伴う平らな面で、壁下を除き硬く締まっている。床面から3箇所の土坑が検出された。前記したように、15号土坑は出入口部の梯子を受ける穴と考えられるもので、上端長31×22cm、下端長18×12cm、深さ31cmの隅丸長方形を呈し、穴全体が壁側に傾いている。17号土坑は壁の一部が不明瞭な、深さ5cmの浅い穴である。床までの覆土は2層に分層された。どちらもローム粒子・塊を少量含む黒色（砂質）土で、壁側から流れ込んだ堆積状態を示している。

弥生時代後期土器（甕・壺に赤色塗彩あり：第80図23・24）の破片が11点出土した。また、黒曜石（1点、1.2g）の剥片が出土した。

出土した土器の時期からみて、弥生時代後期と考えられる竪穴住居址と考えられる。

②土坑 竪穴住居址外から検出された14号土坑について報告する。

14号土坑 2区の南側、調査区断面にかかり検出された。約1/2が調査されたとみられ、上面形が直径80cmほどと考えられる。上面径に対して底面径が小さく、断面形は逆台形を呈する。深さは80cmである。覆土は4層に分層された。最上層が黒色（砂質）土、最下層が暗褐色（砂質）土、これに挟まれた層が黒褐色（砂質）土で、壁側から流れ込んだ堆積状態を示す。最上層を除き、カチカチに締まっており、下層ほど明黄褐色砂質土粒子・塊を多く含んでいる。形状、覆土とその堆積状態などから、柱穴ではないと思われる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

③溝址

1号溝址 1区の西側から、調査区を横断するかたちで検出された。長さ160cm、幅65～115cm、深さ10～20cmを測り、断面形が「U」の字形を呈する。覆土は2層に分層された。明黄褐色砂質土粒子・塊を少量含む黒色（砂質）土がベースとなり、「レンズ」状に堆積する。砂・シルトなどが見当たらない点から、水路ではないと考えられる。

5点の土器片が出土し、1点に櫛描文がある。他の4点は無文であるが、胎土から弥生土器と思われる。また、黒曜石（1点、1.1g）の両極打法による剥離痕をもつ石片が出土した。出土した土器の時期からみて、弥生時代の溝址と考えられる。なお、周辺から検出されている弥生時代の遺構がすべて後期である点から、該期に属する溝址の可能性が高いと思われる。

その他、記述すべきこととして、12号土坑から黒曜石（1点、5.8g）の碎片、検出面から平安陶器（皿）、

中世磁器（白磁）が出土した。

（2）個人住宅

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、計画深度（現況地盤以下45cm）まで掘削された2箇所（3・4区）を精査した。宅地造成時の埋土層内で掘削が止まるため、当該事業による遺跡への影響はないと判断した。

まとめ 今回、本調査および工事立会を行った場所は、平成17・18年度に県道大年線の新設工事に伴って長野県埋蔵文化財センターが発掘調査し、縄文時代前期前半の竪穴住居址と弥生時代後期の周溝墓が検出された、4区の北側隣接地である。また、南東から北西に延びる微高地の頂部付近とみられる場所である点からみても、遺構の存在する可能性が極めて高いことが予想された。

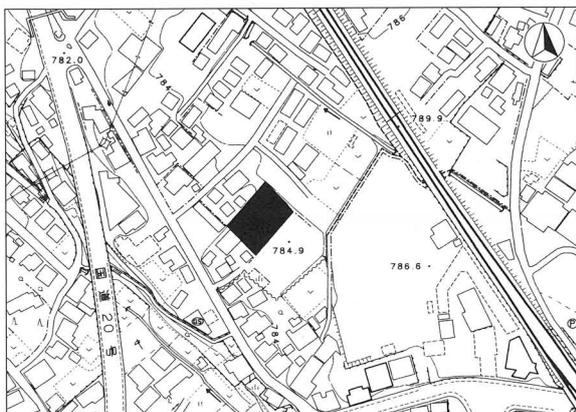
本調査の対象となった進入路は、J R中央東線に沿う微高地を、横断または縦断する形で計画されていた。実質的な調査範囲は、擁壁が設置される幅1.5～2 m（掘方）の狭い範囲であったが、総延長が60m以上に及ぶことから、微高地上の地下の様子を広くみる絶好の機会となった。調査の結果、予想どおり遺構が検出され、あわせて安定した地山層の堆積も確認された。調査範囲の制約もあり、土坑以外の遺構で全体が調査できたものは一つもないが、出土遺物に恵まれた竪穴住居址・溝址では、時期が特定または推測することができた。今回の発掘資料は、県埋蔵文化財センターの発掘成果から考察された「構井地区」における集落の動態（集落観）を補強する資料であるとともに、新たな知見をもたらす資料と評価される。

一つは弥生時代後期の集落域である。先の考察によると、該期の集落は微高地の頂部付近に営まれ、約100mの間隔をおいて南側と北側の2つのグループに分けられるとされている。微高地の頂部付近への占地については、同様の所見が得られたために異論はないが、南・北2つのグループに分けられるとする点は、再考の余地があると思われる。僅かに1軒ではあるが、両グループの推測域の間から竪穴住居址が検出された点を重要視して、微高地全体に集落が形成されていたと考えたい。

もう一つは平安時代の集落域である。該期の竪穴住居址は微高地北側に偏在し、微高地の頂部より一段低い面（礫を多数含む地山層面）に分布する点が指摘されている。ところが、今回の調査によって、微高地南側の頂部付近から該期の竪穴住居址が検出され、集落が微高地全体に広がることが確認された。ただし、現状をみる限り、微高地南側から竪穴住居址が集中して発見される可能性は低いと思われる。

10. 構井・阿弥陀堂遺跡

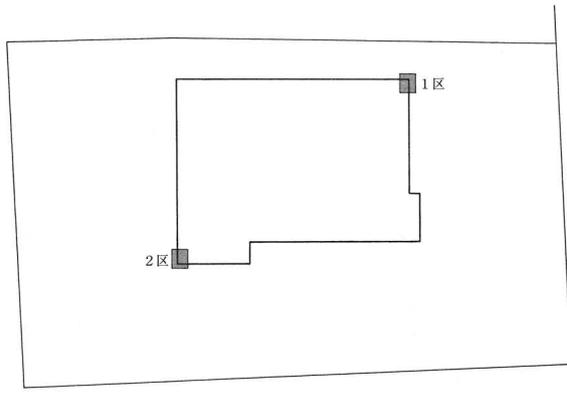
(22-10 写真図版20)



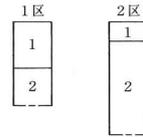
第65図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号	222・223
所在地	茅野市ちの3405-1
調査原因	個人住宅進入路
調査期間	平成22年11月29日～12月1日
調査面積	38㎡
遺構	なし
遺物	なし

調査概要 調査地点はJ R中央東線の西側、「構井地区」である。遺跡範囲の南端で、東から西（南東から



第69図 調査位置図 (1/300)



1・2区
1 砕石
2 埋土 (宅地造成)

第70図 土層断面図 (1/40)

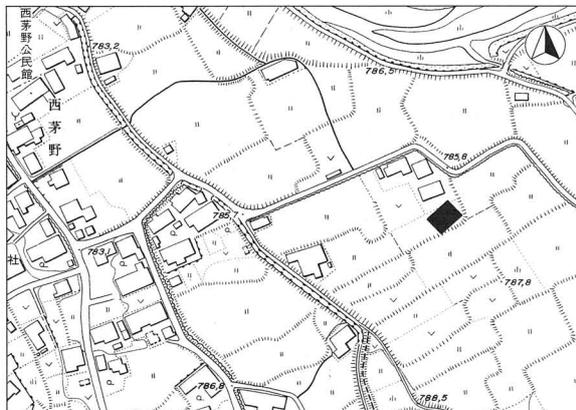
遺跡概要 富士見町境の富士見峠付近を源とする宮川によって形成された沖積低地に所在する。西側に諏訪大社の神事を執り行った上社大祝代々の居館跡とされる県史跡「諏訪大社上社前宮神殿跡」と、縄文時代から近世の集落遺跡である前宮遺跡、南側に中世の干沢城下町遺跡が位置する。遺跡名となった「荒玉社」とは、諏訪大社上社および大祝に関わる重要な神事が執り行われた上社関連の神社であるが、平成13年度以降に行われた土地区画整理事業・店舗建築工事に伴う数次の発掘調査の結果、カワラケを伴う礎石建物址が検出され、これを荒玉社とみる考えが示されている。また、その周辺から文献にみられる中世の町「大町」の存在を窺わせる遺構・遺物が検出されており、これらが南側に接する干沢城下町遺跡に及ぶ可能性が指摘されている。

調査概要 調査地点は遺跡範囲の南東端に位置する。標高は771m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、計画深度（現況地盤以下45～60cm）まで掘り下げられた2箇所です層の堆積状態を確認した。宅地造成時の埋土層内で掘削が止まるため、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

12. 中村遺跡

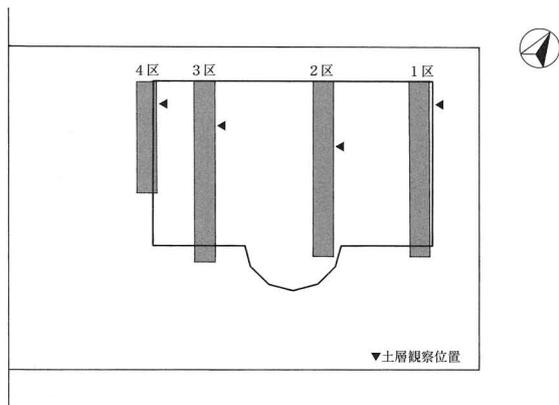
(22-12 写真図版21)



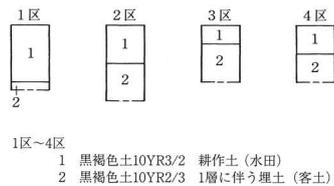
第71図 調査地点位置図 (1/5,000)

遺跡番号 323
所在地 茅野市宮川6207-3
調査原因 個人住宅
調査期間 平成22年4月16日
調査面積 21m²
遺構 なし
遺物 古代陶器1点

遺跡概要 守屋山系を源とする麻浸川による扇状地の扇端部が、宮川によって形成された沖積低地と接する場所に所在する。東に接する外垣外遺跡と一連の遺跡であり、御社宮司遺跡と宮川を挟んで対峙する位置関係にある。平成10年に発見され、翌年に登録された遺跡で、平成12年度の土地区画整理事業、平成15年度の



第72図 調査位置図 (1/300)



第73図 土層断面図 (1/40)

国道20号バイパス建設工事に伴う大規模な発掘調査が行われた結果、縄文・弥生・平安・中世の集落遺跡であることが確認されている。また、平安時代後期の土坑墓から出土した八稜鏡と鉄鐸は特筆され、特に鉄鐸は諏訪信仰との関わりが窺われる資料として注目されている。

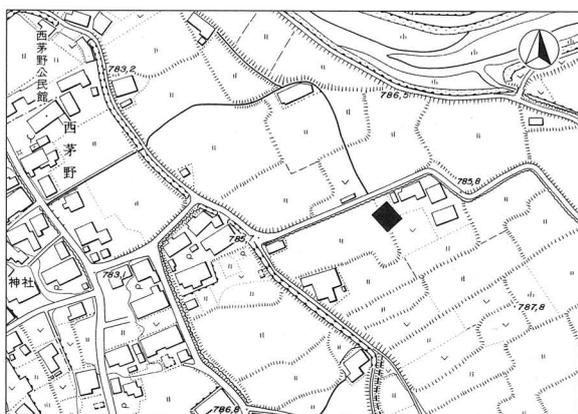
調査概要 調査地点は遺跡範囲の中央からやや南東に寄った場所に位置する。標高は783m位である。

個人住宅建築工事が計画された当該地は、周辺での発掘結果からみて、遺構の存在する可能性が高いとみられた場所である。また、現地を踏査したところ、計画地の南端に地山層の可能性のある黒色土層が露呈しており、工事の掘削が地山層に達するものと予想された。計画された基礎工事の工法（総掘り）と掘削深度（現況地盤以下30～40cm）からみて、遺構の破壊が懸念されたため、当該事業に先立って本調査を行うことにした。

土層の堆積状態を確認するために、建築範囲に4箇所（1～4区）の調査区を設定して、工事の計画深度まで掘り下げた。1区の中ほどに地山層と考えられる礫含の黒色土層が露呈したため、ここを精査したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。他の地点では、予想に反して、耕作土層（水田）およびこれに関わる埋土層内で工事の掘削が止まることが確認された。以上の調査結果から、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。唯一の出土遺物である灰釉陶器（瓶）の破片は、埋土層からの出土である。

13. 中村遺跡

(22-13 写真図版21)

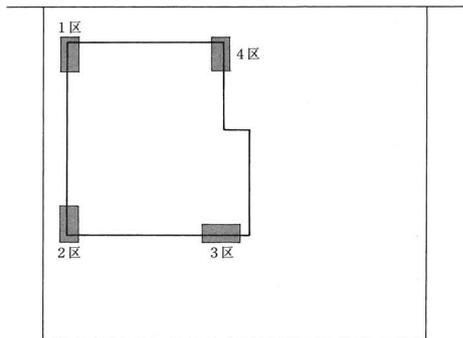


第74図 調査地点位置図 (1/5,000)

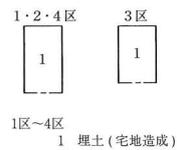
遺跡番号 323
 所在地 茅野市宮川6209
 調査原因 個人住宅
 調査期間 平成22年6月7日
 調査面積 4㎡
 遺構 なし
 遺物 なし

調査概要 調査地点は遺跡範囲の中央付近に位置する。標高は783m位である。

建物の外周を筋掘りする基礎工事に立ち会い、計画深度（現況地盤以下30～35cm）まで掘り下げられた4

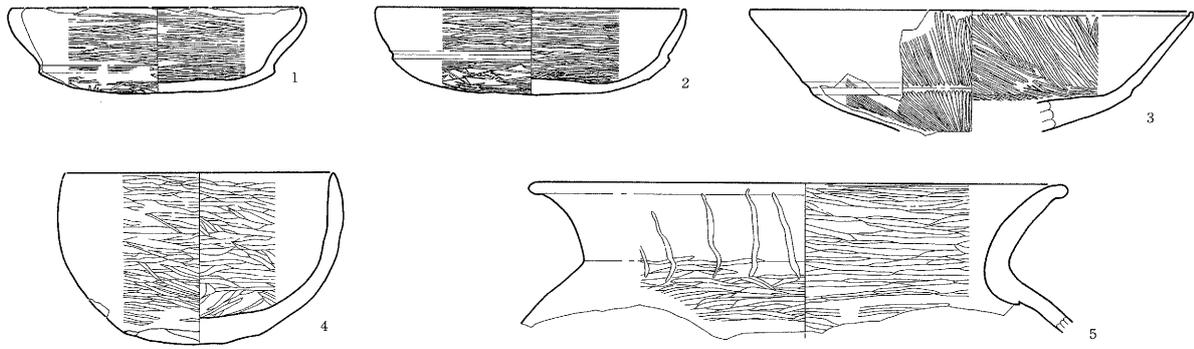


第75図 調査位置図 (1/300)

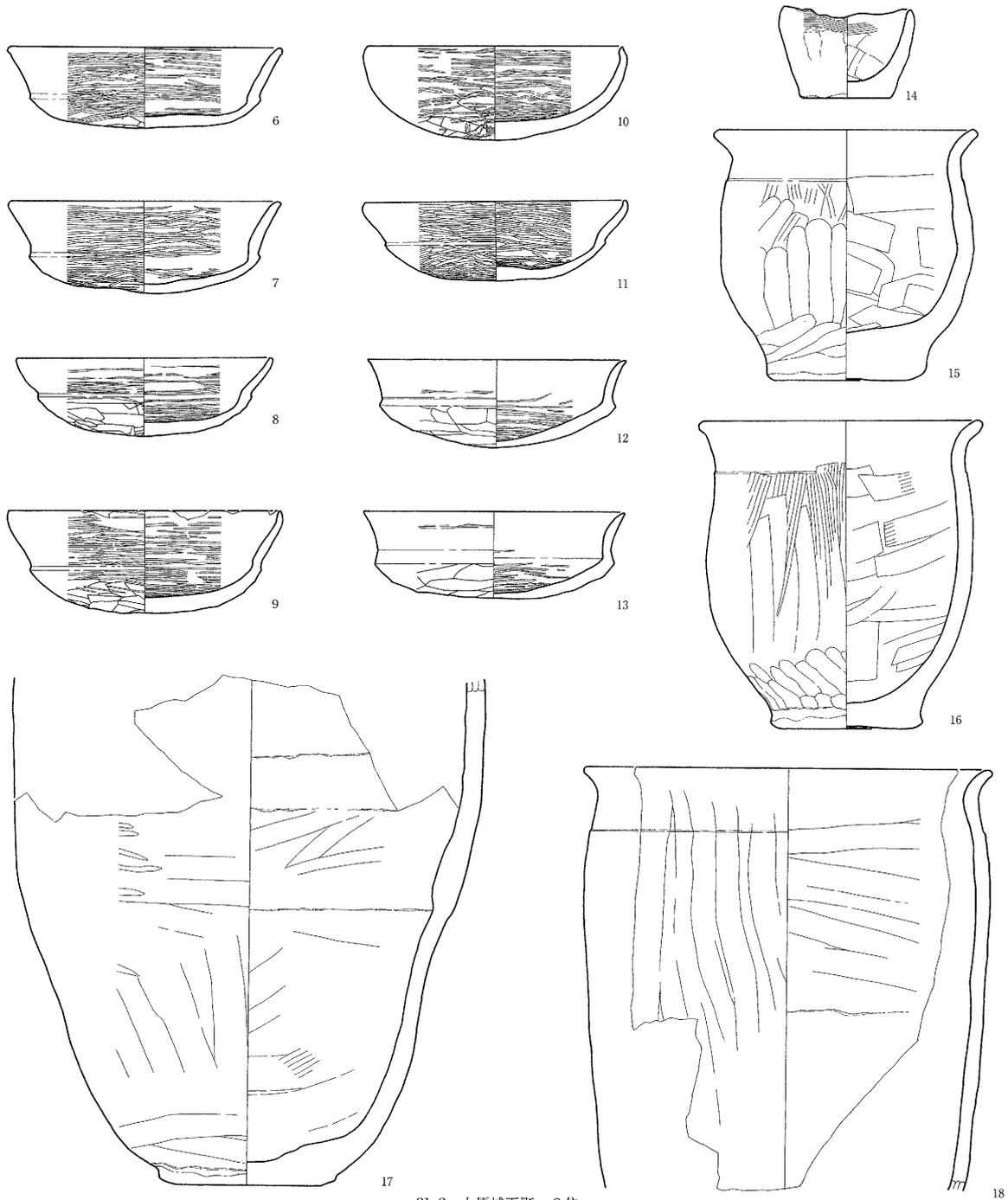


第76図 土層断面図 (1/40)

箇所で土層の状態を確認した。宅地造成時の埋土層内で掘削が止まるため、当該事業は遺跡に影響を及ぼすものでないと判断した。

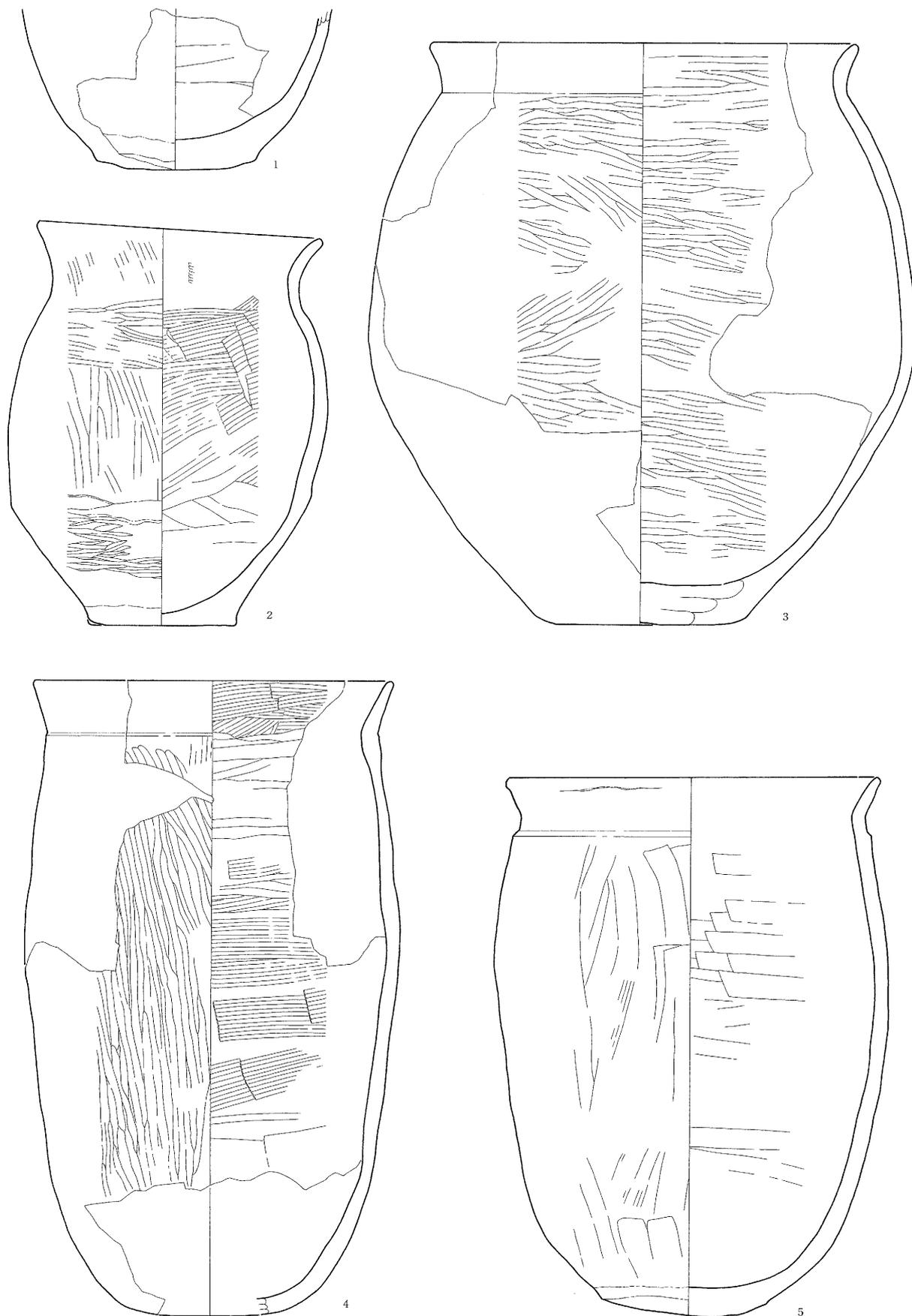


21-2 上原城下町 1住

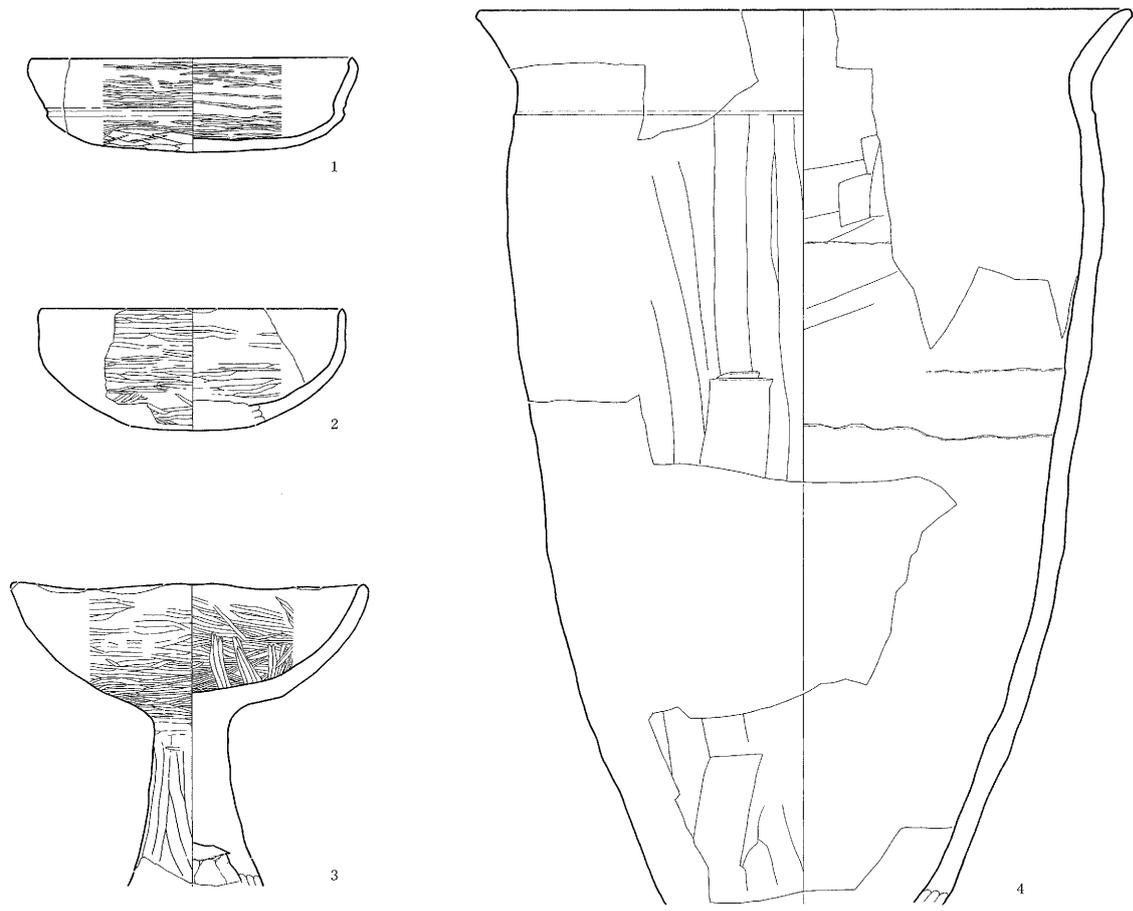


21-2 上原城下町 2住

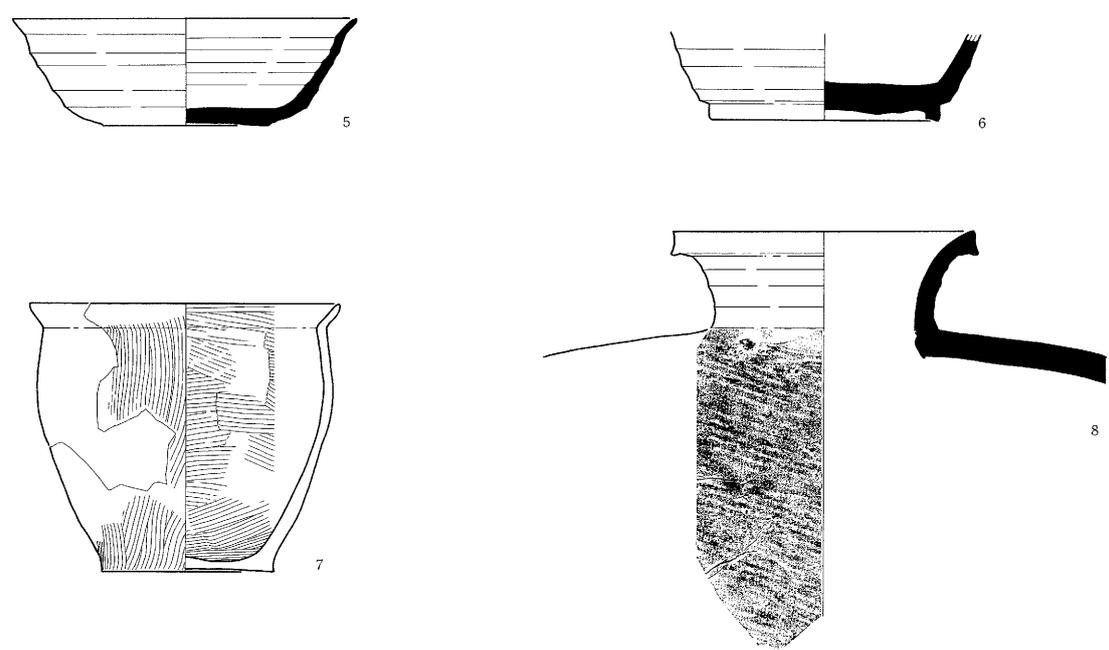
第77図 21-2 上原城下町遺跡出土土器 (1~5: 1住、6~18: 2住) (1/3)



第78図 21-2 上原城下町遺跡出土土器 (1~5 : 2住) (1/3)

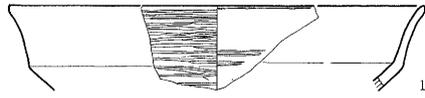


21-2 上原城下町 3住

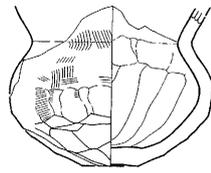


21-2 上原城下町 4住

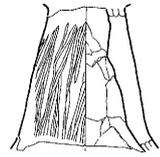
第79図 21-2 上原城下町遺跡出土土器 (1~4 : 3住、5~8 : 4住) (1/3)



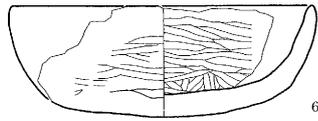
21-2 上原城下町 5住



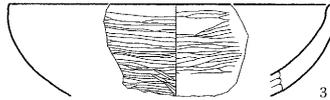
2



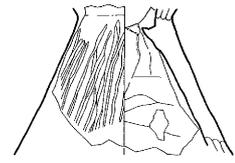
4



6

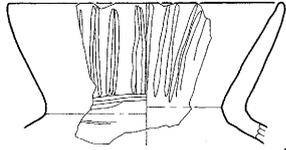


3



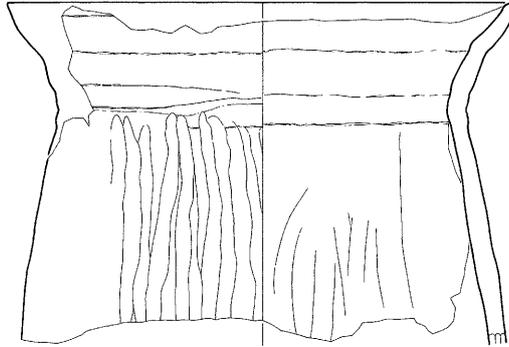
5

21-2 上原城下町 7住

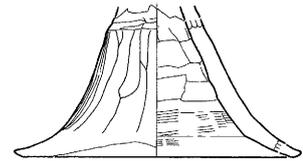


7

21-2 上原城下町 8・9住

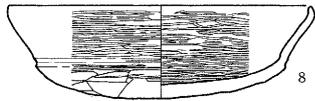


9



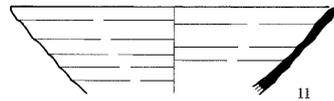
10

21-2 上原城下町 検出面

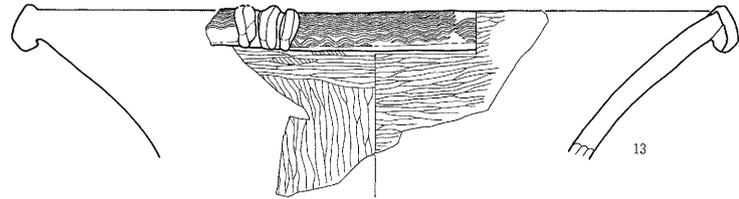


8

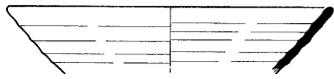
21-2 上原城下町 10住



11

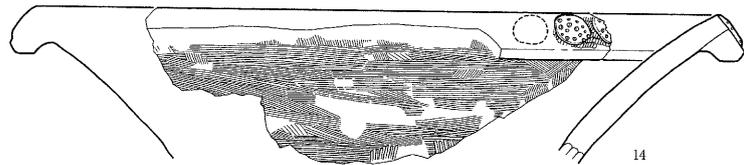


13

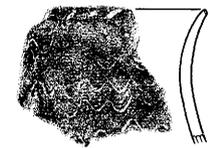


12

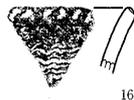
22-9 構井・阿弥陀堂 1住



14



15



16



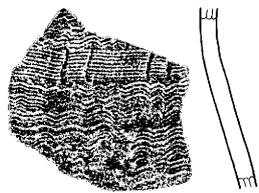
17



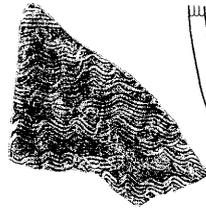
21



23



18



19



20



22



24

22-9 構井・阿弥陀堂 2住

22-9 構井・阿弥陀堂 3住

第80図 21-2 上原城下町遺跡出土土器 (1:5住、2~5:7住、6・7:8・9住、8・9:10住、10:検出面)
構井・阿弥陀堂遺跡 (11・12:1住、13~22:2住、23・24:3住) (1/3)



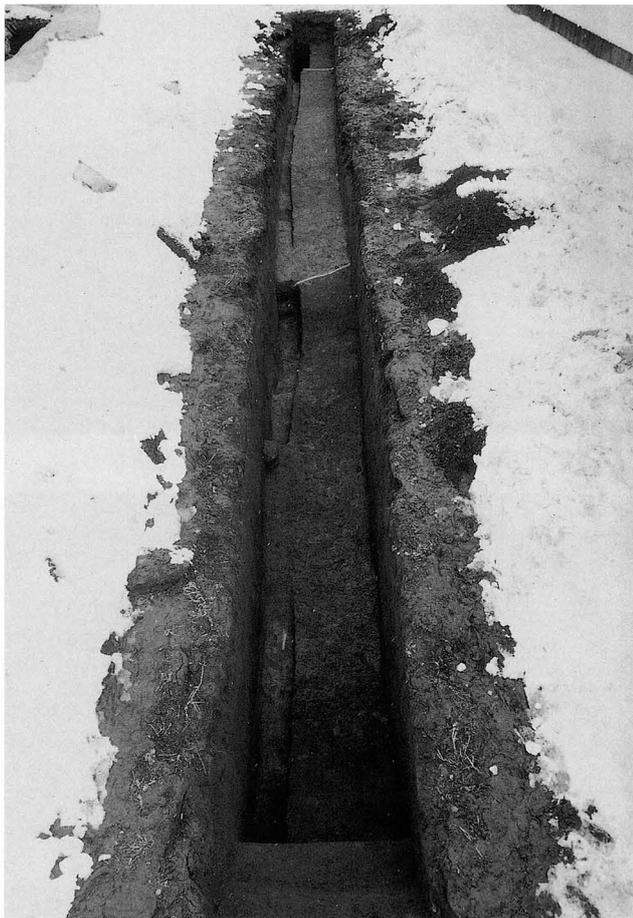
21試-1 家下遺跡 (1) 調査区現況 (北から)



(2) 作業風景 (西から)



(4) 2区 (西から)



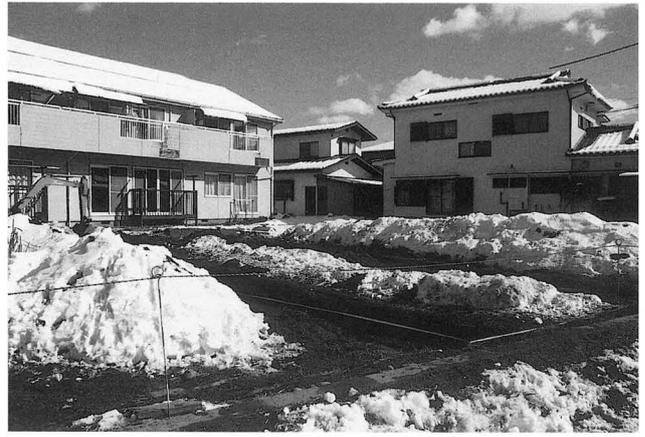
(3) 1区 (西から)



(5) 3区 (西から)



(6) 1区方形周溝墓周溝 土層断面 (南西から)



(7) 調査区全景 (北西から)



22試-1 向林遺跡 (1) 調査区現況 (東から)



(2) 土層断面 (南から)



(3) 調査区全景 (東から)



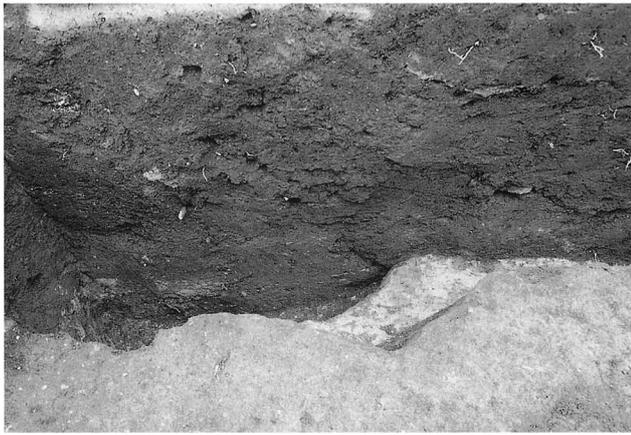
22試-2 神ノ木遺跡 (1) 調査区現況 (南西から)



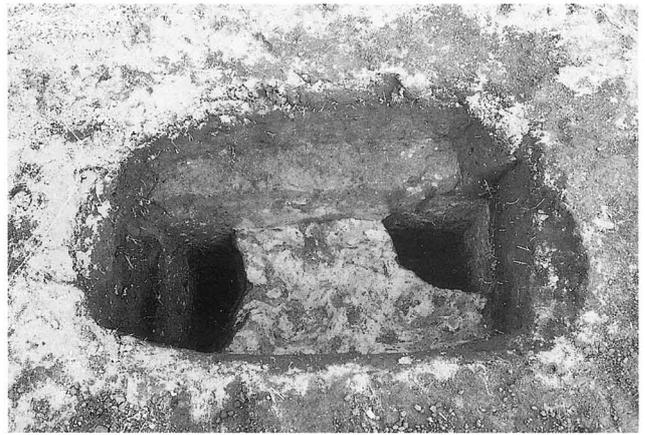
(2) 1区1号住居址、9~13号土坑 (北西から)



(3) 2区2号住居址、2号土坑 (北西から)



(4) 2区2号住居址、2号土坑土層断面 (南西から)



(5) 3区3・4号土坑 (北西から)



(6) 6区3号住居址、5・6号土坑 (南東から)



(7) 6区5・6号土坑土層断面 (南から)



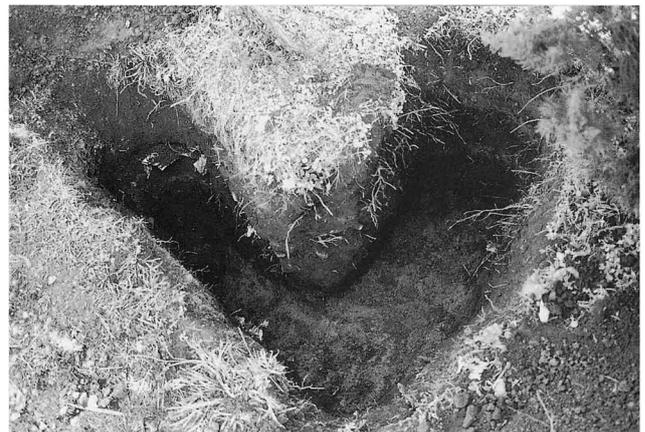
(8) 作業風景 (南西から)



22試-3 小堂見遺跡 (1) 調査区現況 (南西から)

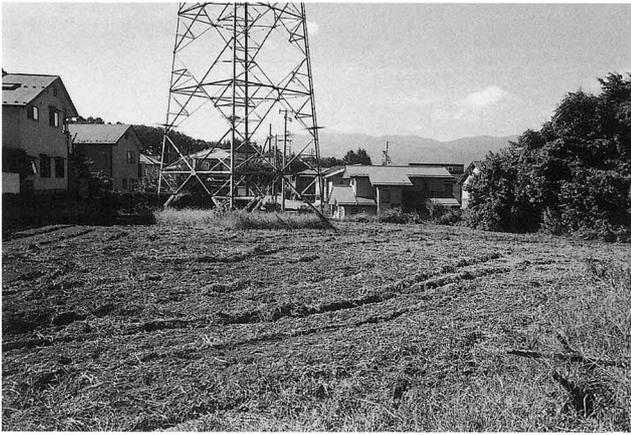


(2) 土層断面 (北から)

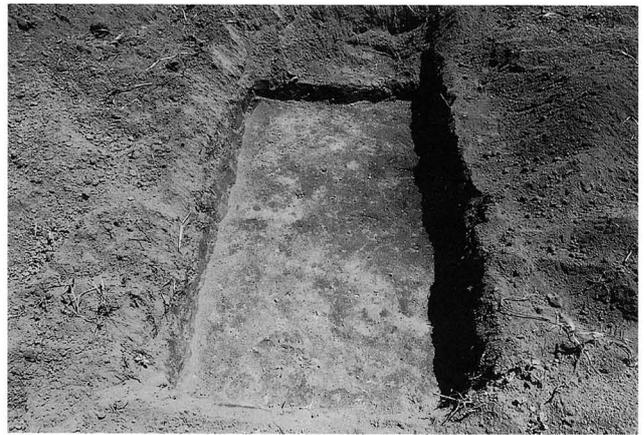


(3) 調査区全景 (南西から)

図版 4



22試-4 上御前遺跡 (1) 調査区現況 (北から)



(2) 4区1号土坑検出状態 (西から)



(3) 4区1号土坑検出状態 (北から)



(4) 7区1号住居址検出状態 (西から)



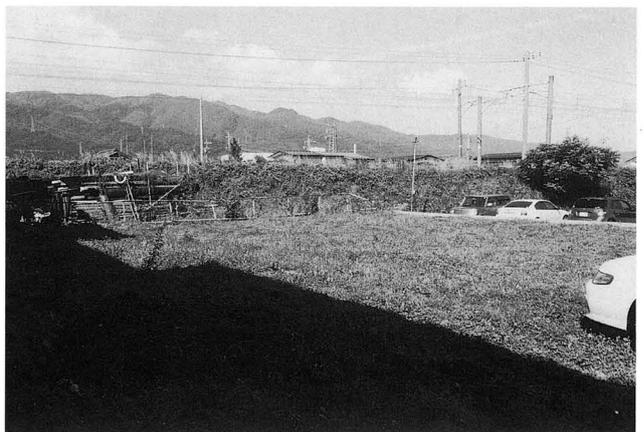
(5) 7区1号住居址土層断面 (南から)



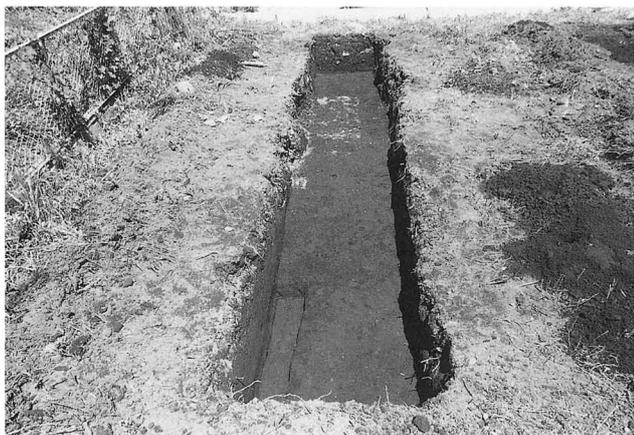
(6) 10区2号土坑土層断面 (南から)



22試-5 構井・阿弥陀堂遺跡 (1) 調査区現況 (南から)



22試-6 構井・阿弥陀堂遺跡 (1) 調査区現況 (東から)



(1) 1区 (南東から)



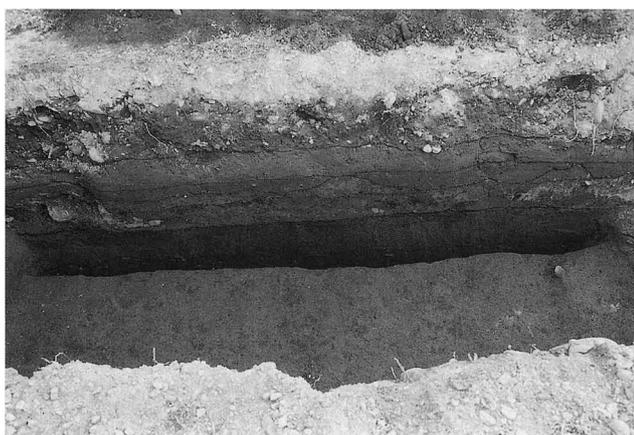
(2) 2区土層断面 (北東から)



(3) 3区土層断面 (北から)



(4) 5区 (北西から)



(5) 5区土層断面 (北東から)



(5) 作業風景 (南から)



(6) 調査区全景 (北東から)



21-1 一本木遺跡 (1) 調査区現況 (北西から)

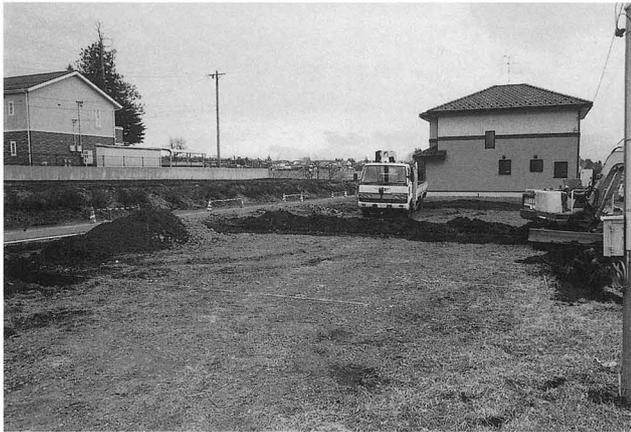
図版6



(2) 1区東辺 (北から)



(3) 1区西辺 (東から)



(4) 調査区全景 (北西から)



21-2 上原城下町遺跡 (1) 調査区現況 (西から)



(2) 1号住居址 (西から)



(3) 1号住居址土師器出土状態 (西から)



(4) 2号住居址 (南西から)



(5) 2号住居址土師器出土状態 (南西から)



(6) 2号住居址土師器出土状態 (南から)



(7) 2号住居址土師器出土状態 (南西から)



(8) 2号住居址太型蛤刃石斧出土状態 (南西から)



(9) 2号住居址カマド検出状態 (南西から)



(10) 2号住居址カマド (南西から)



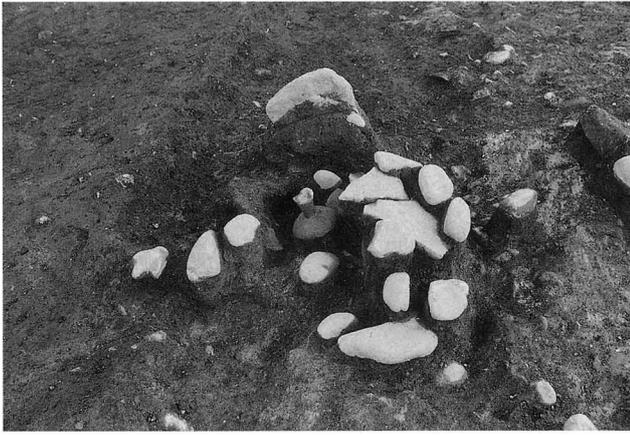
(11) 2号住居址主柱穴(1号土坑) (南西から)



(12) 3号住居址 (南西から)



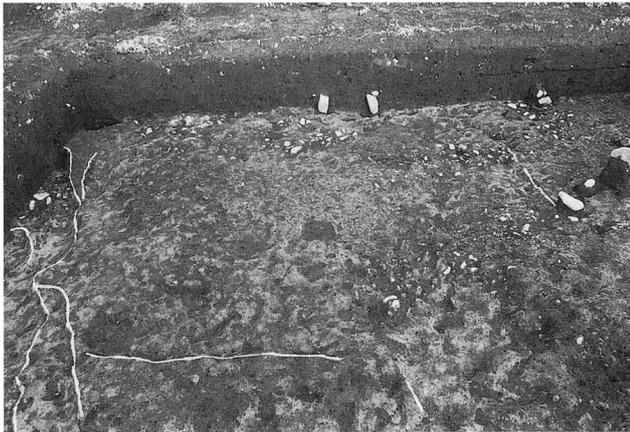
(13) 3号住居址カマド検出状態 (南西から)



(14) 3号住居址カマド検出状態 (北西から)



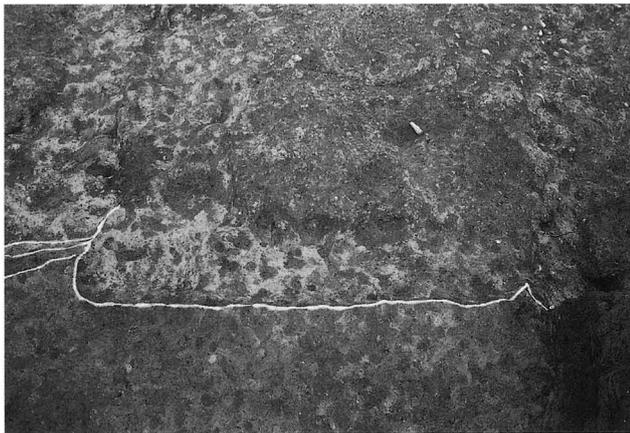
(15) 3号住居址カマド (南西から)



(18) 4号住居址 (西から)



(19) 4号住居址カマド (西から)



(20) 5号住居址 (南西から)



(21) 6・7・11号住居址 (南西から)



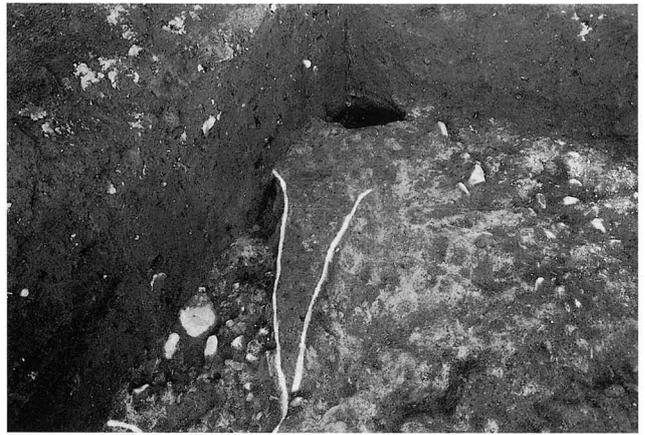
(22) 7号住居址板状鉄製品出土状態 (北東から)



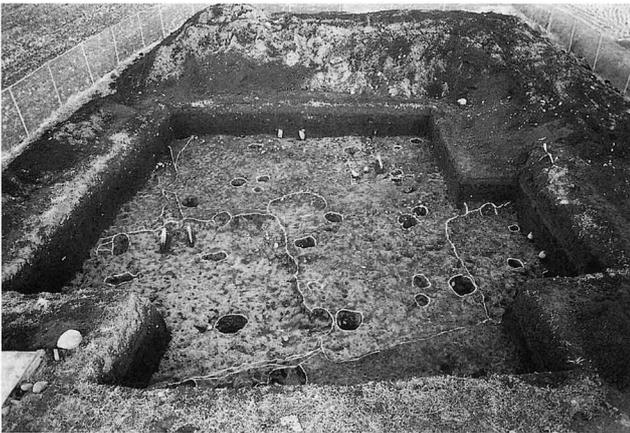
(21) 8・9号住居址 (西から)



(22) 10号住居址 (西から)



(23) 12号住居址 (南西から)



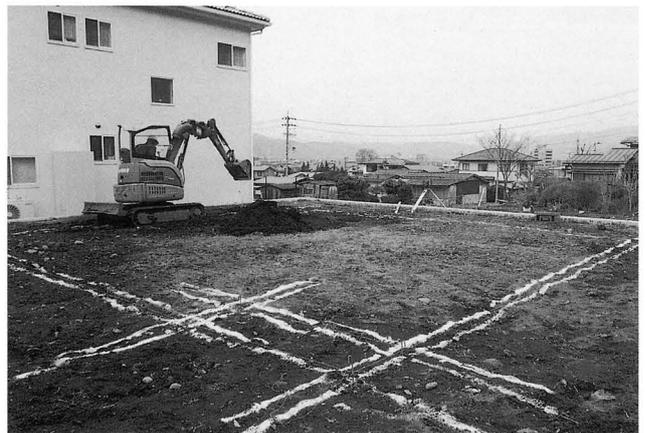
(24) 調査区全景 (南西から)



(25) 表土剥ぎ取り作業 (南西から)



(26) 作業風景 (東から)



21-3 上原城下町遺跡 (1) 調査区現況 (南東から)



(2) 2区 (北東から)



(3) 調査区全景 (南東から)



21~22-1 駒形遺跡 (1) 調査区現況 (東から)



(2) 調査区全景 (東から)



(3) 遺構保護状態 (南西から)



22-1 新水掛A遺跡 (1) 調査区現況 (南東から)



(2) 調査区東辺土層断面 (南西から)



(3) 調査区全景 (南東から)



(4) 作業風景 (北西から)



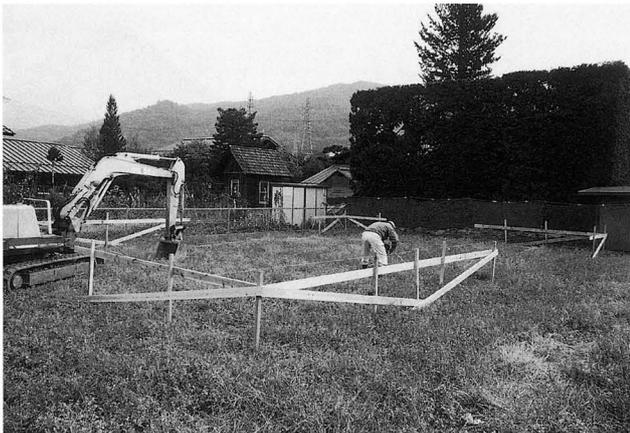
22-2 家下遺跡 (1) 調査区現況 (北から)



(2) 1区 (東から)



(3) 調査区全景 (北西から)



22-3 家下遺跡 (1) 調査区現況 (南から)



(2) 調査区南辺 (南西から)



(3) 調査区東辺 (南から)



(4) 調査区全景 (南から)



(5) 作業風景 (東から)



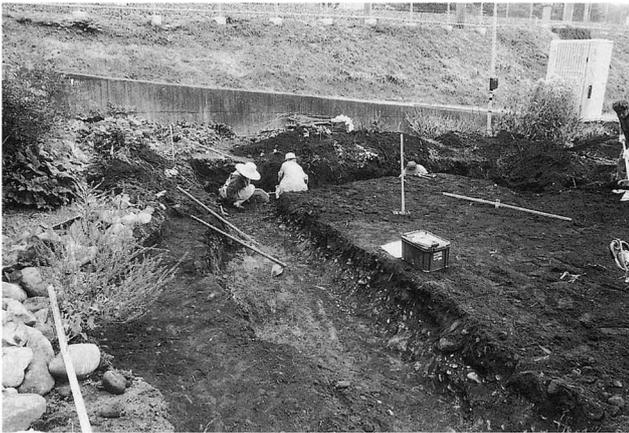
22-4 四ツ塚古墳群 (1) 調査区現況 (南西から)



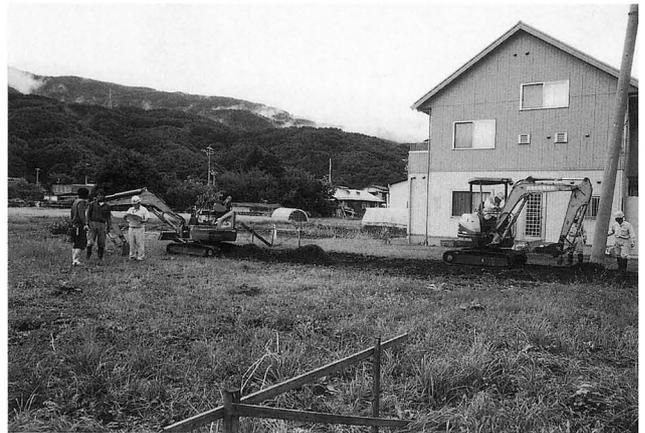
(2) 調査区北辺 (南西から)



(3) 調査区全景 (北西から)



(4) 作業風景 (西から)



22-5 御社宮司遺跡 (1) 調査区現況 (東から)



(2) 1区 (西から)



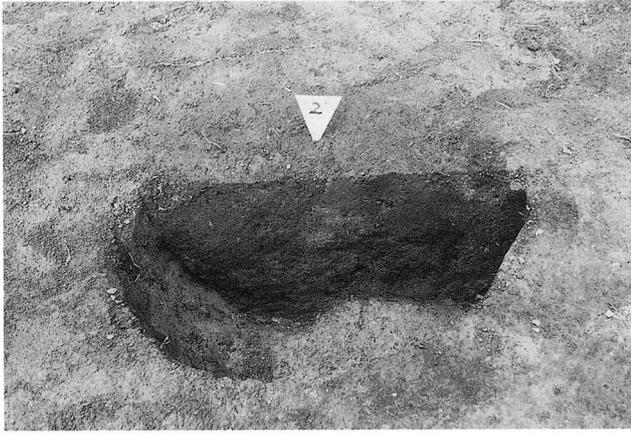
(3) 調査区全景 (東から)



22-6 中御前遺跡 (1) 調査区現況 (南東から)



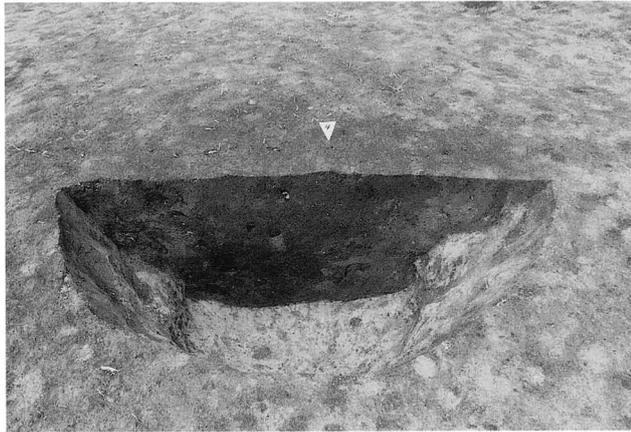
(2) 調査区東壁土層断面 (西から)



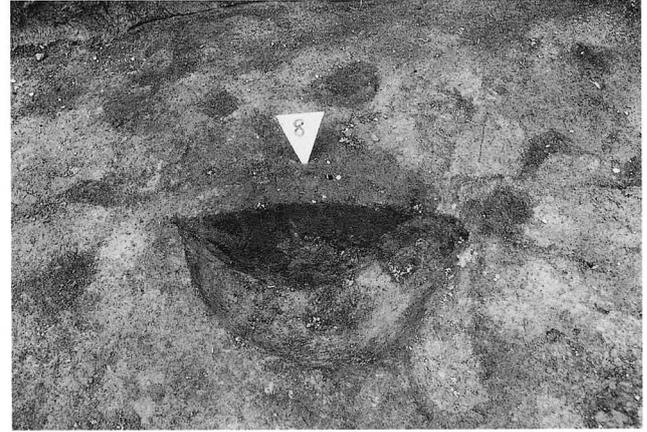
(3) 2号土坑土層断面 (南から)



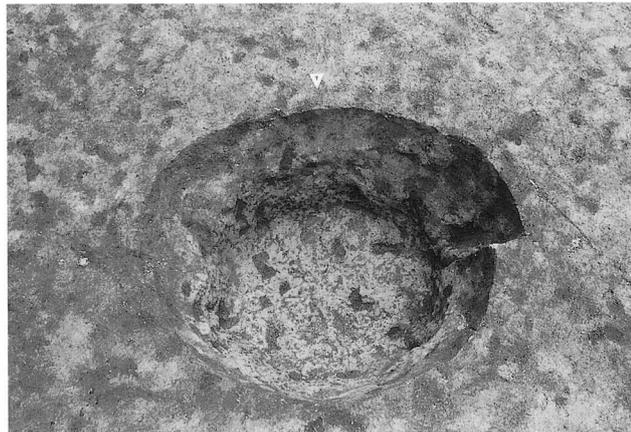
(4) 4号土坑 (北から)



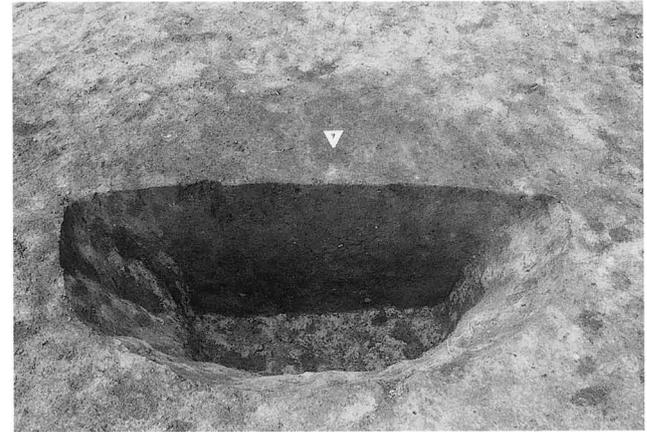
(5) 4号土坑土層断面 (南から)



(6) 8号土坑土層断面 (南から)



(7) 9号土坑 (北西から)



(8) 9号土坑土層断面 (南東から)



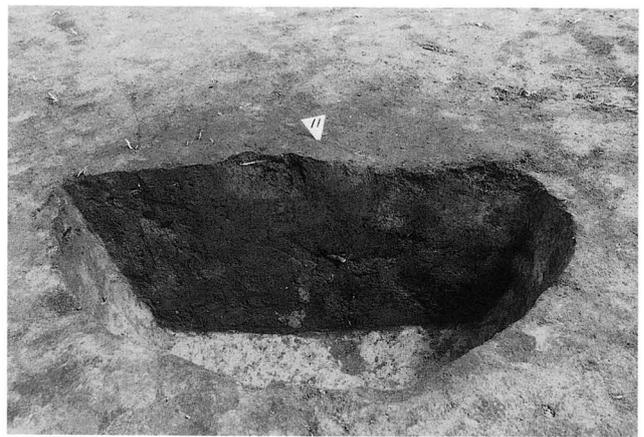
(9) 10号土坑 (北から)



(10) 10号土坑土層断面 (東から)



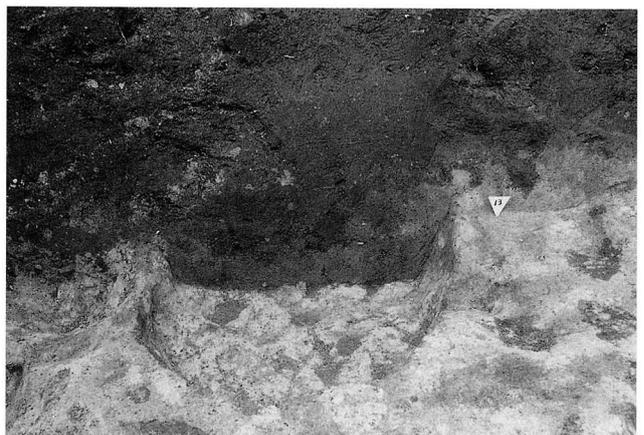
(11) 11号土坑 (北から)



(12) 11号土坑土層断面 (南から)



(13) 12号土坑 (北から)



(14) 13号土坑土層断面 (東から)



(15) 調査区全景 (東から)



(16) 作業風景 (東から)



22-7 小堂見遺跡 (1) 調査区現況 (北東から)



(2) 調査区西辺土層断面 (南西から)



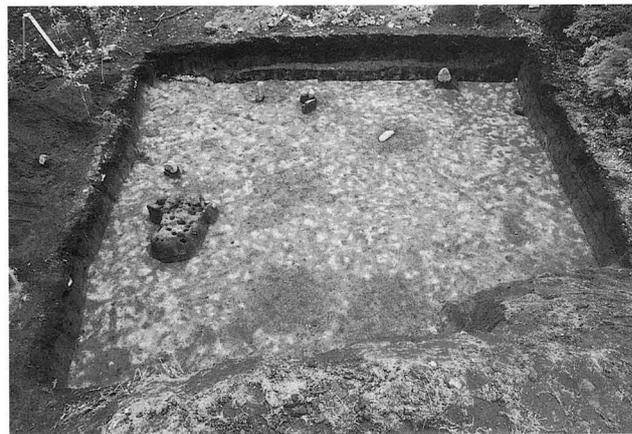
(3) 調査区全景 (南から)



(4) 作業風景 (南西から)



22-8 尾根田遺跡 (1) 調査区現況 (北東から)



(2) 調査区東側遺構検出状態 (西から)



(3) 調査区東側全景 (西から)



(4) 調査区西側全景 (東から)



(5) 調査区南壁土層断面 (北から)



(6) 調査区東側土坑検出状態 (北西から)



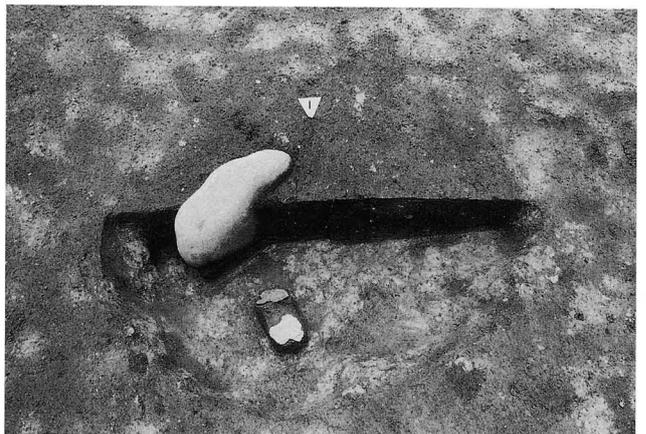
(7) 調査区東側土坑 (南東から)



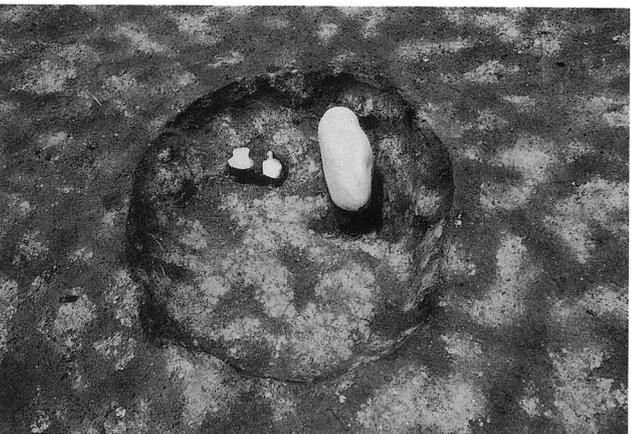
(8) 1・26号土坑検出状態 (東から)



(9) 22・27・28号土坑検出状態 (東から)



(10) 1号土坑土層断面 (西から)



(11) 1号土坑 (南東から)



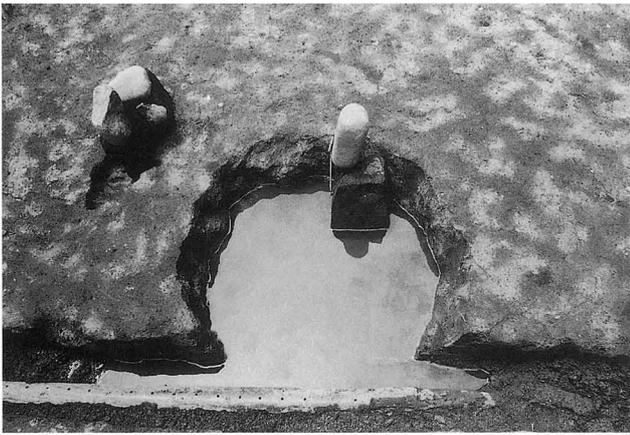
(12) 4号土坑土層断面 (南西から)



(13) 11号土坑土層断面 (北から)



(14) 13号土坑 (南から)



(15) 22号土坑 (東から)



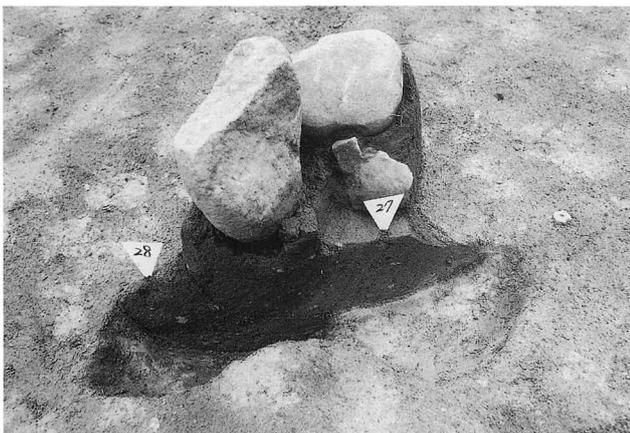
(16) 22号土坑土層断面 (南から)



(17) 26号土坑 (南西から)



(18) 26号土坑土層断面 (北から)



(19) 27・28号土坑土層断面 (北東から)



(20) 31号土坑土層断面 (東から)



(21) 1号焼土址、1号集石 (西から)



(22) 1号焼土址土層断面 (南西から)



(23) 1号集石 (西から)



(24) 作業風景 (南東から)



22-9 構井・阿弥陀堂遺跡 (1) 調査区(進入路)現況 (南から)



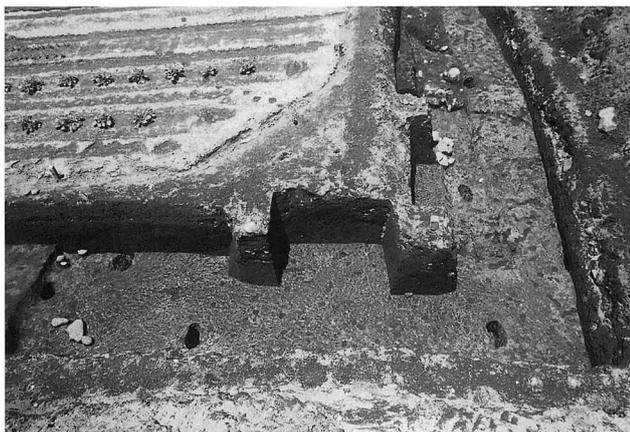
(2) 1区 (南西から)



(3) 1区1号住居址 (南から)



(4) 1区1号溝址 (南東から)



(5) 2区2号住居址 (南東から)



(6) 2区2号住居址主柱穴・炉址 (西から)



(7) 2区2号住居址南側礫出土状態 (北西から)



(8) 2区3号住居址 (南西から)



(9) 2区3号住居址土層断面 (南から)



(10) 2区12・13号土坑 (南西から)



(11) 2区 (南東から)



(12) 作業風景 (南から)



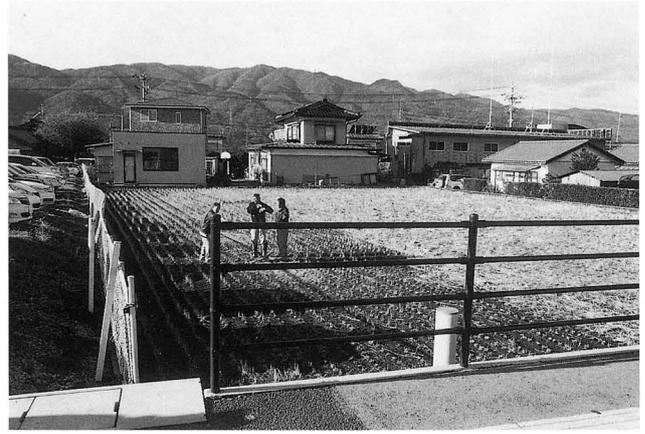
(13) 調査区(個人住宅)現況 (南東から)



(14) 3区 (南西から)



(15) 調査区（個人住宅）全景（南東から）



22-10 構井・阿弥陀堂遺跡 (1) 調査区(進入路)現況 (北東から)



(2) 1区 (北東から)



(3) 1区土層断面 (西から)



(4) 作業風景 (北東から)



22-11 荒玉社周辺遺跡 (1) 調査区現況 (北から)



(2) 1区 (北西から)



(3) 調査区全景 (北から)



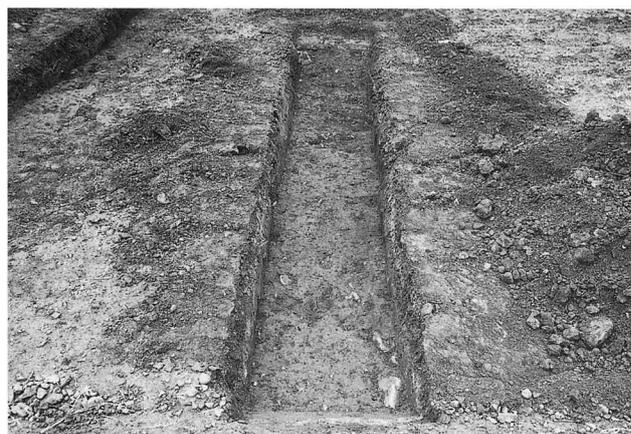
22-12 中村遺跡 (1) 調査区現況 (南西から)



(2) 1区 (北西から)



(3) 2区土層断面 (南西から)



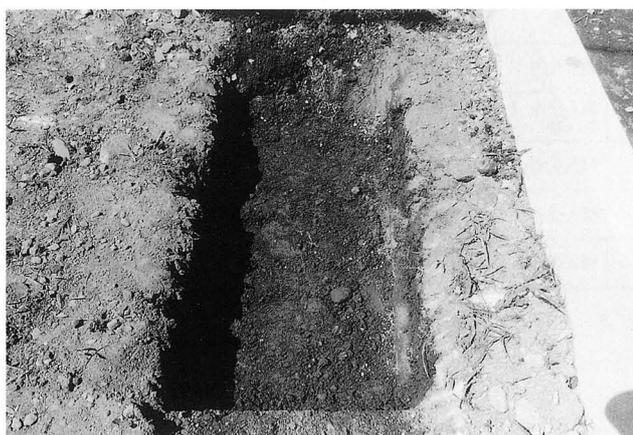
(4) 4区 (北西から)



(5) 作業風景 (南西から)



22-12 中村遺跡 (1) 調査区現況 (東から)



(2) 1区 (北東から)



(3) 調査区全景 (東から)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきご					
書名	市内遺跡5					
副書名	平成21・22年度 埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	小池岳史					
編集機関	茅野市教育委員会					
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番地1号 Tel.0266-72-2101					
発行年月日	西暦2011年3月28日					
ふりがな 遺跡名	所在地	市町村コード 遺跡番号	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	発見遺構
						発見遺物
いえした 家下	茅野市ちの 2580-5	20214	平成22年 2月1日～4日	50	集合住宅	弥生後期住居址・方形周溝墓・溝址
		110				弥生・古墳・平安土器、弥生石器、黒曜石
むかいばやし 向林	茅野市米沢 5597	20214	平成22年 10月5日	3	移動無線 通信基地局	
		37				
かみのき 神ノ木	茅野市北山 7347-1	20214	平成22年 4月26日～5月6日	13	倉庫	縄文前期住居址・方形柱穴列
		53				縄文土器・石器、黒曜石・近世陶器
こどうみ 小堂見	茅野市玉川 3090-3	20214	平成22年 12月6日	1	移動無線 通信基地局	
		160				
かみごぜん 上御前	茅野市玉川 3108-1ほか	20214	平成22年 8月30日	20	土砂採取	縄文前期住居址・土坑
		161				縄文土器・黒曜石
かまい あみだどう 構井・阿弥陀堂	茅野市ちの 2542-11	20214	平成22年 4月13日	6	駐車場	
		222・223				
かまい あみだどう 構井・阿弥陀堂	茅野市塚原1丁目 2497-6	20214	平成22年 7月20日	50	個人住宅	中世遺物包含層
		222・223				弥生・古墳・平安・中世土器、須恵器、黒曜石
いっほんぎ 一本木	茅野市玉川 8450-1	20214	平成22年 3月23日	17	個人住宅	
		163				
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 801-1ほか	20214	平成21年 11月24日～12月3日	82	個人住宅	古墳中期・後期・平安住居址、古代土坑
		224				弥生・古墳・平安・中世土器、弥生・古墳・平安石器、古墳鉄製品、黒曜石
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 1220-16	20214	平成22年 3月18日	4	個人住宅	
		224				
こまがた 胸形	茅野市米沢 5073ほか	20214	平成22年 3月12日～4月13日	87	個人住宅	縄文前期・中期住居址、縄文土坑
		34				縄文土器・石器、黒曜石
しんみずかけえー 新水掛 A	茅野市豊平787	20214	平成22年 4月20日	16	個人住宅	
		89				
いえした 家下	茅野市ちの 285-3	20214	平成22年 9月1日	8	個人住宅	
		110				
いえした 家下	茅野市ちの 2591-4	20214	平成22年 10月14日	28	個人住宅	弥生・古墳・中世土器、須恵器、近世磁器
		110				
よつつかこふんぐん 四ツ塚古墳群	茅野市宮川 4704-2	20214	平成22年 10月20日	32	個人住宅	
		142				
みしゃぐうじ 御社宮司	茅野市宮川 5816-1	20214	平成22年 9月16日	2	個人住宅	
		143				
なかごぜん 中御前	茅野市玉川 4183-2	20214	平成22年 7月3日～6日	89	個人住宅	縄文土坑
		155				縄文・中世土器
こどうみ 小堂見	茅野市玉川 3074-1ほか	20214	平成22年 8月26日	21	個人住宅蔵	
		160				
おねた 尾根田	茅野市玉川 10202-1	20214	平成22年 6月17日～30日	89	個人住宅	縄文土坑・焼土址・集石
		164				縄文土器・石器、黒曜石
かまい あみだどう 構井・阿弥陀堂	茅野市ちの 2539-1ほか	20214	平成22年 5月25日～6月1日	97	個人住宅 進入路	弥生後期・平安住居址、溝址、土坑
		222・223				縄文・弥生・平安・中世土器、須恵器、古代陶器、中世磁器、黒曜石
かまい あみだどう 構井・阿弥陀堂	茅野市ちの 3405-1	20214	平成22年 11月29日～12月1日	38	個人住宅 進入路	
		222・223				
あらたましゃゆうへん 荒玉社周辺	茅野市宮川 1932-7	20214	平成22年 9月24日	1	個人住宅	
		319				
なかむら 中村	茅野市宮川 6207-3	20214	平成22年 4月16日	21	個人住宅	古代陶器
		323				
なかむら 中村	茅野市宮川 6209	20214	平成22年 6月7日	4	個人住宅	
		323				

市内遺跡 5

—平成21・22年度 埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成23年 3月25日 印刷

平成23年 3月28日 発行

編集 茅野市教育委員会

発行 茅野市教育委員会

長野県茅野市塚原二丁目6番地1号 (0266) 72-2101(代)

印刷 永明社印刷所

長野県茅野市塚原二丁目12番地30号

